

縣ハ之ニ反シ極メテ寛大ナル取扱ヲ爲スカ如キ結果ヲ見ルニ至リ、彼是權衡ヲ保  
タサルノ觀アルノミナラス、中ニハ工場又ハ職工ニ關シ何等ノ規程ヲ設ケサルモ  
ノアリ、又各府縣ノ取締規則ヲ設クルニ至リタル時機ニモ非常ノ差異アリテ、既ニ  
明治十四年ニ製造場ノ取締ヲ爲スモアルニ拘ハラス、同一事項ニ付近々七八年  
前ニ始メテ取締ヲ爲スニ至リタルカ如キモノアリテ頗ル錯雜シタル狀況ニ在リ。  
然レトモ工場法發布以前ニ於テ主要ナル工業府縣カ夙ニ工場建設ニ許可主義  
ヲ採リタル爲其ノ成績ノ歷々徵スヘキモノアリ。若シ初ヨリ此ノ事ナカラシカ  
工場ノ内外ニ及ホス危害其ノ他公益問題ニ付到ル所苦情紛議ヲ生シタルモノア  
ルヘキハ想見スルニ難カラス。固ヨリ許可其ノモノニ付テハ一定ノ標準、地域等  
ノ定メナキモノアル爲往々營業者ヨリ苦情ヲ申出ツルモノ尠カラス、更ニ又目下  
警察ニ適當ナル機關ヲ完備セサル爲許可ノ遲延其ノ他ニ關シテモ往々非難ノ聲  
ヲ聞クコトアリト雖、工場ニ關スル取締カ一般警察ノ權能ニ屬シ、特ニ之ニ對シテ  
經費人員ノ配付ナキ以上ハ免レサル所ナリト云ハサルヘカラス。而シテ今ヤ工  
場法發布セラレ、其ノ第十三條及第十七條ハ從來廳府縣ニ於テ行ヒ來リタル各種

取締ノ權能ニ一層明確ナル法律上ノ根據ヲ與ヘタルモノニシテ、同時ニ此等取締  
ニ關スル事務ハ主トシテ農商務大臣ノ處理ノ下ニ行ハルルニ至リタルモノトス。  
工場法ニ基キテ他日發布セラルヘキ命令ノ内容ハ、其ノ工場ノ設備ニ關スルモ  
ノト、又職工ノ雇入周旋ニ關スルモノトヲ問ハス、各府縣特殊ノ事情アルモノヲ除  
クノ外ハ、總テ全國ヲ通シテ可成劃一ノ制規ニ依ラシムヘキハ固ヨリ其ノ所ナリ  
ト信ス。



## 第三章 工場法制定ノ根據

## 第一節 總論

維新ノ改革ニ伴フ泰西文物ノ移入ハ、靡然トシテ社會ノ表裏ヲ改造セスンハ已マサラントス。工場法案ハ所謂歐化主義ノ最モ勢ヲ極メタル明治十五年ノ交ニ於テ始メテ我國ニ胚胎シタルモノニシテ、而カモ其ノ規定ノ内容ハ工業經營ノ自由ヲ羈束スルモノ多キヲ以テ、法律ノ制定ヲ憚ハサルノ徒ハ往々ニシテ、西洋盲倣ノ名ノ下ニ之ヲ葬リ去ランコトヲ試ミタルコト一再ニ非サルナリ。其ノ斯ノ如ク甚シカラサル者ト雖、動モスレハ則チ「西洋丸寫シ」ノ制度ニ非サルヤニ付檢討到ラサルナク、提案者カ這般先入ノ意見ニ對シテ疎通辯明ニ勗メタルコト前後十數年ヲ通シテ終始一貫、常ニ其ノ軌ヲ一ニスル所ナリ。先ニ第一章ノ結末ニ於テ述ヘタルカ如ク本法案カ、永年ノ宿題トシテ工業家ノ眼前ニ懸ケラレタルノ一事ハ、本法ノ制定ヲ圓滑ナラシメタル主要ナル原因ナリト雖、其ノ餘リニ早クヨリ論唱セラレタル一事ハ、世人ヲシテ本法自體ノ要不要ヲ疑ハシムル一種ノ慣行ヲ馴致

シタルコトモ亦疑ヲ容レサル所ナリ。然レトモ此等四圍ノ事情ハ相俟チ相輔ケテ本法制定ノ根據ニ付周到綿密ナル調査研究ヲ重テシムルノ動機ヲ爲シタルモノニシテ、從來ノ立法中稀ニ見ル調査ト手數トヲ要シタルノ理由モ亦茲ニ存ス。

工場法制定ノ必要ナル所以及反對意見ニ對スル駁論等ハ(一)明治四十年十二月社會政策學會ニ於ケル諸學者ノ報告及講演、工場法ト労働問題(二)桑田博士著「工場法ト労働保險」(三)關博士著「労働者保護論」及(四)戶田博士著「日本ノ社會」(五)關博士著「工業政策等」ニ殆ント網羅シ悉サレタルヲ以テ、今故ラニ茲ニ詳論スルノ必要ヲ見スト雖、屢、法案ノ學會及實業團體等ニ諮問セラレルニ當リ、法律制定ノ根據トシテ提唱セラレタル事項ノ梗概ヲ記録スルハ必スシモ徒爾ニ非スト信スルヲ以テ、左ニ之ヲ略説スルコトトセリ。

工場法制定ノ一般的理由。我國維新以後ニ於ケル工業ノ勃興ハ有史以來未タ曾テ有ラサル所ニシテ之ニ依リテ我國民ノ物質的生活ノ程度ヲ昂進シタルコトモ亦實ニ顯著ナル事實ナリ。一時農業ノミヲ經營シテ薄利ノ收益ニ安堵シタル事業家及労働者ハ工業ノ有利ナルコト農業ノ比ニ非サルヲ發見スルヤ、資本ハ苟



クモ捕捉スヘキ機會ヲ逸セス、滔々トシテ工業ノ方面ニ投下セラルルニ至リ、從來家庭ニ在リテ平和ナル手工業ニ從事シタル女子ハ漸ク田園ヲ離レテ市街地ニ集リ、機械ノ震動騒響ノ中、或ハ塵埃粉末ノ飛散スル所又ハ有害瓦斯ノ發生スル場所ニ於テ群集的工場生活ニ就クコトナレリ。明治四十二年末ノ調査ニ依ルニ我國ニ於テ十人以上ノ職工ヲ僱使スル私立工場ノ數ハ一萬五千四百二十六ニシテ職工總數六十九萬四千七百七十一人ナリ、而シテ女子人員ハ四十五萬二千六百八十七人、十六歳未満ノ男子人員ハ二萬二千四百五十四人ナリ、即チ法律上ノ保護ヲ要スル職工ノ數ハ四十七萬五千四百四十四人ニシテ、實ニ總數ノ七割弱ニ當ル。今此等ノ職工カ僱使セラルル實況ヲ觀ルニ、工業主ノ多數ハ營業上ノ競争ニ依リ苟モ自己ノ生産ヲ多量且安價ナラシムル手段ニ付テハ苦心討究至ラサルナク、業務ノ經營上差支ナキ限りハ競フテ勞銀ノ低廉ナル婦女幼少者ヲ歡迎スルノミナラス、中ニハ之ヲシテ身體ノ耐ヘ得ル限り勞働ニ從事セシメ、コトヲ試ミ、職工モ亦操業上自他ノ競争ニ勵マサレ、心身ノ過度ノ疲勞ヲ願慮スルノ遑ナキ状態ニ陥レルモノ尠カラス。願フニ過度ノ勞働ハ素ト職工ノ本意ニ非ス、然レトモ工場ノ規律

ト間斷ナキ機械ノ運轉トハ無意識ノ間ニ之ヲ餘義ナクシツツアルナリ。工場ノ設備ヲ完全ニシ、身體ヲ強健ニシテ、業務ニ習熟シタル職工ヲ永ク其工場ニ勤績セシムルハ工業主ノ欲スル所ナルヘシ、然レトモ競争上目前焦眉ノ急ハ未タ工場主ヲシテ此ノ種ノ希望ヲ實行セシムル迄ノ餘裕ヲ存セサルヲ如何セン。是ニ於テカ職工ハ就職後數月ナラサルニ過度ノ勞働ニ依リ氣力漸ク衰へ、健康ヲ損シテ豫定ノ期間工場ノ勞働ニ堪ヘサルニ至ル者多ク、更ニ又工場設備ノ不完全ナルト操業上ノ注意ヲ缺ク爲不慮ノ災害ヲ被リテ終身救治スヘカラサル不具者ト爲ル者尠カラス。其ノ他工業ニ從事スル婦女幼年者中、不知不識ノ間ニ疾病ニ侵サレ易キ體質トナリ、爲ニ結核性疾患ニ罹ル者ノ歩合頗ル多キヲ加へ、延テ恐ルヘキ病毒ヲ社會公衆ニ流布セントスルノ傾向アルヲ見ルニ至リテハ、之カ救治ノ方策ヲ講シ國民ノ健康ヲ保全スルト共ニ秩序アル工業ノ發達ヲ強要スルハ已ムヲ得サルノ施設ト謂ハサルヲ得ス。

大凡工業經營ヨリ生スル弊害ハ其ノ種類一ニシテ足ラズト雖、其ノ主要ナルモノヲ二種ニ大別スルコトヲ得ヘシ、即チ(一)工場設備ノ不完全ニ基クモノ、(二)職工ノ



不當使役ニ基クモノ是ナリ。(一)ニハ(イ)或ハ工場ノ崩壞ノ如キ、或ハ避難設備ノ不完全ヨリ生スル遭難ノ如キ、或ハ機械裝置ヨリ生スル災害ノ如キ、或ハ又劇藥毒藥其ノ他ノ有害料品ノ取扱ヨリ生スル危害ノ如キ、一時的ノモノアリ(ロ)塵埃粉末飛散ノ防止設備行届カス、氣容不足シ、又ハ換氣採光ノ設備ノ不良等ナルニ因リテ生スル危害ノ如キ、連續的ノモノアリ而シテ(イ)ハ危害ノ程度如何ニ拘ラス、一時ニ激發スルヲ以テ世上ノ注意ヲ惹クコト多シト雖(ロ)ハ危害急速ニ發現スルコト稀ナルヲ以テ自ラ之ヲ等閑ニ看過スル傾ナキヲ得ス、然レトモ其ノ害毒ノ及フ所往々前者ヨリモ大ナルモノアリ。(二)職工ノ不當使役ニ伴フ弊害即チ婦女幼少者ノ酷使、深夜ノ勞働及時間ノ過長ナルコト等ニ基ク弊害モ亦(ロ)ト同シク世人ノ注意ヲ惹クコト比較的ニ少キヲ常トス、而シテ職工ハ機械ト異リ容易ニ之ヲ解雇シ無償又ハ僅少ノ費用ヲ以テ新規ノ者ヲ補充スルコトヲ得ルヲ以テ、工業主モ遽ニ職工待遇ノ改善ヲ迫ラルルコト鮮シ、然レトモ斯ノ如キハ國民ノ母タルヘキ婦女及人生ノ發育期ニ在ル幼少者ノ健康ヲ害シ、終生又恢復スルノ期ナキ心身上ノ缺陷ヲ生セシムルノミナラス、延イテ其ノ惡影響ヲ後世ニ波及シ軍國トシテ健全ナル壯

丁ヲ招募スルコト能ハサルカ如キ事實ヲ我國ニ現出スルコトアラハ工業ノ勃興モ輸出貿易ノ伸張モ却テ國本ヲ危クスルノ素因ト爲ルヘシ。

工業ニ伴フ危険ハ之ヲ豫防スルヲ得可シ、然レトモ之ヲ絶無ナラシムルコトヲ得ス、左レハ職工カ業務上負傷シ又ハ疾病ニ罹リタルトキ之ニ或ル程度ノ扶助ヲ與フルハ工業主ノ當ニ爲スヘキ所ニシテ工業ノ經營ニ伴フ避クヘカラサル損失ト看做ス可キモノナリ。然ルニ工業主中何等ノ扶助ヲ爲サス此ノ種業務上ノ損失ヲ職工自身、又ハ職工ノ親族友人其ノ他一般ノ公共經濟ニ轉嫁セシムルカ如キ者アリ不當ト謂ハサルヲ得ス、若シ此ノ轉嫁ニシテ行ハレサラシカ無告ノ窮民ヲ増加スルノ因トナルノミナラス、勞働者ハ豫メ危険多キ又ハ衛生上有害ナル工場ノ勞働ヲ忌避シ工業ノ發達ヲ妨クルカ如キ結果ヲ來スノ虞ナシトセス。其ノ他職工ノ誘拐ヲ防止シ不正ノ周旋業者ヲ制裁シ、職工ノ雇入解雇ニ伴フ弊害ヲ未然ニ防キ徒弟ノ收容及就業等ニ關シ一定ノ規則ニ從ハシムルカ如キハ、工業ノ振興ニ伴ヒ其ノ必要益、増大スヘキヲ以テ工場法ノ制定ハ洵ニ時運ノ急須ニ應スルモノト謂ハサルヲ得ス。



以上陳ヘタル所ニ依リテ之ヲ觀レハ工場法ハ單ニ消極的ノ目的ノミヲ有スルモノニ似タリト雖他ノ半面ニ於テハ積極的ノ目的ヲ有スルモノナリ。即チ(一)職工ヲシテ永ク其ノ健康ヲ保全セシメ、工場生活ニ對スル危懼ノ念ヲ去リ、一生之ニ從事シテ敢テ顧慮スル所ナク、其ノ家族モ亦家庭ノ事情ノ許ス限リ好テ工場勞働ニ從フカ如キ状態ニ導キ本邦ノ工業ヲシテ多數ノ熟練職工ヲ有スルニ至ラシメシコト是ナリ(二)就業時間内ハ毫モ疲勞セサル十全ノ精力ヲ以テ専心業務ニ從事スルノ習性ヲ養ハシムルコト(三)其ノ他國民中ノ第三階級ヲシテ其ノ身體生命及幸福ヲ保全セシムルヨリ生スル社會上及政治上ノ利益ハ茲ニ多言スルヲ須キサル所ナリ。

工場法制定ニ關スル理由ハ大約以上陳フル所ノ如シ、然レトモ之ニ對スル反對論又ハ異論トシテ嘗テ論唱セラレタル重ナルモノニ付之レカ辨明ヲ掲クヘシ。

反對論ニ對スル辨明

(一)工場法ハ文明國トシテノ體裁ノ爲ニ制定スルモノナルヲ以テ反對ナリトノ論。工場法ハ體裁ノ爲ニスルモノニ非スシテ實際上ノ必要ニ促サレタルモノナ

リ試ミニ我國職工ノ現狀如何ヲ觀察スルニ左記ノ如キ状態アルヲ如何セン。

(イ)罹病率。歸郷女工ノ健康状態及死亡率調査ノ結果ハ甚タ慘憺タルモノアリ。又百人以上ヲ收容スル寄宿舎又ハ社宅ヲ有スル工場ヨリ徵シタル報告ニ依リテ之ヲ見ルモ我職工ノ罹病率ハ之ヲ歐洲先進國ニ於ケル職工ノ健康状態又ハ我國在監人ノ健康状態ニ比スルトキハ著シク不良ナルヲ見ル、如斯ハ單ニ職工自身ノ不幸ナルノミナラス工業主ノ側ニ在リテモ亦甚タシク不利ナリト謂フヘシ。何トナレハ熟練ナル職工一日ノ缺勤ハ、一日ノ就業時間ヲ一時間宛十二日間ニ亘リテ減少スルヨリモ多クノ損失ヲ生スルヲ通常トシ、工業主トシテハ可成職工ヲ缺勤セシメス又少シニテモ永ク勤績セシムルヲ利トスルヲ以テナリ。

(ロ)罹災率。職工ノ災害ニ罹リテ負傷スル歩合モ遙カニ外國ニ比シテ大ナリ、我國ノ工場ヨリ報告シタル所ニ依リ職工ノ罹災率ヲ外國ニ於ケル歩合ニ比較スルニ是亦彼ニ幾倍スルモノアルヲ見ル、此ノ事モ亦直接ニハ職工及工業主雙方ノ不利ニシテ間接ニハ國家經濟上ノ損失タルヤ疑ナキ所ナリ。

(ハ)群居ノ弊害。元來多數群居スレハ健康上德操上其ノ他ニ付各種ノ弊害ヲ生



シ易キモノナリ、即チ市都ニ於ケル罹病者ハ遙カニ田園ヨリ多ク、又市街地ノ警察事故ハ之ヲ田舎ニ比シテ其ノ歩合遙カニ大ナルニ徴シテ知ルヘシ、故ニ都市ニ對シテハ國家ハ特別ノ注意ヲ拂フノミナラス、都市中多數群集スル場所ニ對シテハ其々衛生及風紀上ニ於テ特殊ノ取締ヲ必要トス。今ヤ我國工場ノ數益、増加シ四十年末ニ一萬餘ヲ算シタルモノ四十二年末ニ於テ一萬五千ヲ算スルニ至レリ、此ノ勢ヲ以テスレハ比年ナラスシテ數萬ニ達スヘキコト明カナリ、而シテ此等工場數ノ増加スルニ伴ヒ、弊害益、多ク發生スルト共ニ之カ取締法ヲ講スルコトハ愈困難ト爲ルヘキヲ以テ、今ニ於テ適當ナル矯正法ヲ立ツルノ必要ハ體裁論ニハ非スシテ實質上ノ基礎ヲ有スルモノナリ。

(二)主從ノ美風アルヲ以テ工場法ノ制定ヲ不要ナリトスルノ論。我國ニハ主從ノ美風存ス、法規ヲ以テ主從ノ關係ヲ定ムルハ不可ナリトノ論アリ。此ノ美風ノ存スルコトハ之ヲ認ムルニ吝ナラサルモ、今ヤ工業主中自己ノ使用スル職工ノ族籍身分ハ勿論其ノ氏名サヘ知ラサルモノ多數ヲ占メ、職工モ亦工業主ノ顔ヲスラ知ラサルモノ決シテ尠カラス。斯カル状態ノ下ニ就業スル職工漸ク大多數ヲ占

ムルニ及テハ家族的關係アルノ理由ヲ以テ工場法ヲ否定スルハ基礎頗ル薄弱ナリ。

(三)工業ハ貧民ヲ救護ストノ論。就業ノ年齢又ハ就業時間ノ制限等ヲ以テ工業主カ行フ貧民救護ノ美舉ヲ制限スルモノナリト論スルモノアリ、然レトモ婦女幼少年ヲ一定ノ規律ト相互競争ノ下ニ機械ノ運轉ニ強要セラレツツ單調ナル勞働ニ過勞セシムルコトハ救護ニ非スシテ事實其ノ天壽ヲ短縮セシメツ、アルナリ。今貧民階級ノ生活費用ヨリ重利的ニ積算シテ十五歳位ノ男女ノ經濟的價格ヲ見ルニ、大凡一千圓内外ト爲ルヘシ、彼等ハ從來國家ノ富ヲ消費スルノミノ人ナリシナリ。然ルニ今ヨリ成年者ト成ルニ從ヒ從來消費シタル富ヲ國家ニ返還シ更ラニ國家ノ爲ニ少シニテモ多ク生産スヘキ天職ヲ有ス(然ラサレハ國)假リニ國家ヲ以テ一ツノ大工場トスレハ彼等ハ新規ニ買入レラレタル機械ノ如シ、此ノ機械カ掃除ヲモ行ハス又油ヲモ與ヘサル人ニ濫用セラレ直チニ修繕ヲ要スルコトナリ又ハ遂ニ用フヘカラサル廢物トナルカ如キコトアラハ之レ寔ニ忍ヒサル所タリ。無生ノ機械ハ放棄スルカ又ハ破碎シテ他ノ工業原料タラシメ得ルト雖職工



ハ全ク然ラス、彼ニシテ生産力ヲ失ヒタル時ハ單純ナル消費者トシテ殘存スルヲ以テ國家ノ生産効果ヲ減少セシメ國富ヲ消耗スルモノタリ、國家ヨリ觀ルニ壯年ノ男女ノ身體ヲ毀損セシムルハ國家ノ基礎ヲ動搖セシムルト同然ニシテ其ノ惡果ハ數代後ニ於テ顯著ナルヘシ。又人道ヨリ考フルモ、吾人ノ同胞カ職工タリシ故ヲ以テ天授ノ生ヲ短縮シツツアル慘事ニ對シ、彼等自ラニ於テ注意スヘキコトヲ警告スルト同時ニ、公力ヲ以テ國家ニ及ホス惡影響ヲ豫防シ置カサルヘカラス。婦女幼少者ニ關スル就業ノ制限ハ、夫又ハ父兄ノ勤勉心ヲ刺戟シ又一般ニ成年男子ニ對スル需要ヲ喚起シ其ノ賃銀ヲ幾分ナリトモ高ムルヲ以テ、之ニ依リテ職工階級ハ必スシモ困難ニ陥ルモノト斷定スルヘカラス、若シ夫レ婦女幼少年者ヲ濫用スルニ非サレハ成立セサルカ如キ工業ハ國家全體トシテハ其ノ存立ヲ希望セサル工業ナリト謂ハサルヲ得ス。

(四) 生産費ヲ過大ニストノ論。就業時間休暇等ノ制限ハ生産費ヲ大ニストノ論アリト雖モ、不活潑ナル長時間ノ労働ハ十全ノ精力ヲ以テ、短時間内ノ労働ヲ爲スニ劣ルコトハ何人モ首肯スル所ナリ。只工場法ノ制限ニ慣ルル迄多少ノ困難ヲ

感スル場合アルニ過キササルナリ、彼ノ婦女子又ハ少年者ヲ濫用シ其ノ身體カ羸弱トナリタル後、之ヲ解放シ直ニ新來ノ者ヲ招募スルカ如キ工業ノ經營法ハ、前ニモ陳フルカ如ク國家ニ損失ヲ與フルモノニシテ、公共經濟ノ基本ヲ殆クスルモノナリ、左レハ如何ニ生産費カ安價ナルモ吾人ハ斯ノ如キ工業經營法ノ矯正ヲ希望セサルヲ得ス。

工場法ハ職工ノ健康ヲ保全シ輸出貿易ヲ隆盛ニスストノ例證ハ之ヲ舉クルニ難カラス、試ミニ之ヲ英獨ノ例ニ照スモ職工ノ罹病率ハ工業地方ニ於テ著シク減退シツツアルノ適確ナル數字ヲ舉クルコトヲ得ヘシ、又此等ノ諸國ニ於テハ各種ノ工業ハ皆永ク勤績セル熟練職工ヲ有シ、品質ノ精巧ヲ以テ競争場裡ノ覇者タラント争ヒツ、アリ、若シ夫レ獨逸ニ於ケル労働者ニ對スル特殊ノ保護カ獨逸今日ノ工業ヲ隆盛ナラシメタリトノコトハ世上定論ノ存スル所ナリ。今ヤ我工業家ノ一部ハ學窓ニ在ル青年カ飽ク迄競争者ニ打勝タンカ爲ニ所謂寢食ヲ忘レテ勉強シツツアルカ如キ状態ナリ、餘リ無理ヲセヌ様ヲトノ忠言ハ却テ工業家ニ悦ハレサルノ觀アリ、然レトモ學生カ中學時代ニ餘リ無理ナル勉強ヲ爲シタル爲折角大



學ニ入りタル後頭ヲ惡クスルカ如キコトナキカ、夫レ國家ノ生命ハ永久ナリ國民トシテハ國家ノ一時的隆盛ヲ希圖スルノ餘リ、永遠ノ發達ヲ阻害スルカ如キコトナキ様注意セサルヘカラス、工場法ノ制定ノ必要ハ實ニ茲ニ在ルナリ。

(五)工場法ハ却テ勞働問題ヲ挑發スルモノナリトノ論。我國ニ於テハ歐米各國ニ於ケルカ如キ激烈且頻繁ナル同盟罷工アルニ非ス、職工ハ極メテ平穩ニ工場ニ於テ操業シツツアルニ拘ラス、今工場法ヲ以テ勞働時間ヲ制限シ之ニ違反シタル工業主ヲ罰スト云フカ如キ制度ヲ樹ツルコトハ、即チ平地ニ波瀾ヲ起スモノナリト論スルモノナキニ非ス、我國ニ同盟罷工ノ頻繁ナラサルハ之ヲ認ム、又職工中何等團體ラシキモノスラ存在スルコトナク、從テ勞働條件等ニ關シ團體ノ意見希望ヲ發表シタルコトナキコトモ亦之ヲ認ム。然レトモ是ニハ大ナル原因理由ノアルコトニシテ(一)外國ニ於テハ製鐵業其ノ他鐵關係ノ工業カ工業ノ中心タリ、此等ノ工業ハ纖弱ナル婦女ヲ使用スルコト極メテ少數ナルヲ以テ外國ニ於ケル男工ノ數ハ總職工ノ七八割ヲ占ムルヲ例トス、之ニ反シ、我國ニ於テハ此ノ種ノ工業極メテ少クシテ工業ノ中心點ト認ムヘキハ纖維工業ニ在ルヲ以テ女工ノ數ハ總職

工ノ六割三分ヲ占ムルヲ以テ見ル、而シテ製糸業又ハ紡績業ノ如キ羽二重其ノ他ノ織物業及燐寸業ノ如キハ最多數ノ女子ヲ僱使ス、之ヲ統計ニ徵スルニ製糸ハ九割三分、紡績ハ七割八分、織物ハ八割九分、燐寸ハ六割九分ノ女子ヲ使用ス。而シテ女工ヲ多數ニ使用スル工業ハ同時ニ多數ノ幼少年工ヲ使用スルヲ例トスルヲ以テ假令同盟罷工ヲ爲スヘキ原因アリトスルモ彼等ハ工場主又ハ工場監督ノ一睨ニ畏縮スル徒ナルヲ以テ、敢然起テ其ノ利益ヲ主張シ飽迄之ヲ爭フト云フカ如キコト稀ナリ、我國從來ノ例ヲ見ルニ同盟罷工ハ多クハ鑛山又ハ造船所ノ如キ多數ノ男工ヲ僱使スルモノニ多ク多數ノ女工ヲ僱使スル工場ニ少キハ實ニ之カ爲ナリ。事情果シテ然リトスレハ我國ニ於テハ歐米諸國ヨリモ一層政府ニ於テ此等ノ女子及幼少年者ヲ保護スル必要アリト謂ヒ得ヘシ。

(六)勞働保險ヲ同時ニ制定スルニ非サレハ不備ナリトノ論。工場法案中職工ノ扶助ニ關スル規定ノ代リニ勞働保險ニ關スル制ヲ定ムルトキハ、小工業主ニトリテハ一時ニ大ナル負擔ニ任セサルカ故ニ頗ル利便ナリ、之ヲ規定セサリシハ不備ナリトノ論アリ。固ヨリ疾病又ハ負傷ノ如キハ職工ニ有勝ノコトナルヲ以テ工



業主ハ平素ヨリ之カ爲ニ一定ノ金錢ヲ積ミ置キ職工モ亦賃金ノ内ヨリ幾何カラ支出シ是等不慮ノ場合ニ備フルコトトセハ雙方共ニ安心シテ之ニ處スルヲ得ヘキカ故ニ一部ノ工場ニ於テ既ニ實行シツツアル一種ノ勞働保險又ハ共濟組合ノ組織ヲ一般工場ニ實施スルノ利益ナルハ毫モ疑ナキ所ナリ。然レトモ全國ノ工場ヲシテ漏レナク實施セシメンニハ如何ナル方策ヲ採ルヘキヤト云フニ若シ之ヲ任意ニ放抛スルトキハ工業主中ニハ斯ノ如キ面倒ナル事務ヲ處理スルヲ好マサル者多數ナル可ク又職工モ將來ニ對スル深慮ナキ者多キヲ以テ假令僅少ナリト雖賃金中ヨリ差引カルルヲ好マス結局其ノ普及ハ至難ノ事ニ屬ス故ニ我邦ニ勞働保險ノ制ヲ設クルトセハ強制的ニ之ヲ爲スニ非サレハ到底其ノ目的ヲ貫徹スルコト能サルヘシ。而シテ強制勞働保險ノ制ヲ施スニ際シ先ツ第一ニ考慮スヘキハ職工ノ業態如何ニ依リ其ノ疾病ニ罹リ又ハ負傷スル歩合及其ノ經過ノ程度如何ヲ定メ積金ノ程度ヨリ割出シテ掛金ノ金額ヲ定ムルコト是ナリ。此ノ事ハ理論トシテ極メテ平易ニ似タリト雖實際ニ於テハ我國ニ於ケル職工ノ罹病率又ハ災害率ヲ其ノ業態ニ依リテ區別決定スルハ決シテ容易ノ業ニ非ス何トナレ

ハ工場職工ノ罹病又ハ災害ニ關シテハ何等精確ナル統計材料ノ存スルモノナキノミカ同一ノ業態ニ在リテモ工場ノ設備就業時間ノ長短夜業ノ有無職工ノ待遇如何等ニ依リ著シク危険率ヲ異ニスヘキカ故ニ是等ノ條件カ大體ニ於テ統一セラレサル間ハ獨逸ノ如ク同業者相集リテ保險組合ヲ構成スルカ如キハ到底不可實行ノ事トス。或ハ各工場ニ於テ別異ノ標準ヲ立テ積立ヲ強制セハ可ナラントノ説アランモ元來保險ハ成ル可ク多數者ノ間ニ危険ヲ分布スルヲ要スルヲ以テ我國ノ如キ小工場多キ處ニ於テ各工場ニ對シ一齊ニ之カ實行ヲ迫ルハ是亦行フ可ラサル所ナリト思考ス。今日ノ狀態トシテハ各工場中防キ得ヘキ危険ヲ防止セシ避ケ得ヘキ疾病ヲ豫防セサルカ如キモノ尠カラサルヲ以テ罹災又ハ罹病ノ善後策トシテ保險ニ關スル制ヲ立ツル前豫メ工場法ノ規定ニ依リ先ツ人爲的ニ避ケ得ヘキ丈ケ此等ノ危険ヲ防制スルコトヲ努ムルヲ以テ當然ノ順序ナリト認ム。以上ノ理由ニ依リ我邦ニ勞働保險ノ制ヲ立ツル必要アルハ毫モ疑フ餘地ナク速ニ之ニ着手スルヲ必要トシ工場法ノ施行ハ其ノ實施ニ必要ナル前提條件ナリト思考ス。



## 第二節 健康障害

### 第一項 總論

大凡職業ノ種類多シト雖單純ナル衛生上ノ見地ヨリ之ヲ見レハ人體ノ健康ニ有益ナルモノハ尠キカ如シ就中工業ハ最モ健康ヲ害シ從業者ノ罹病罹災ノ率ヲ高ムルコト他ノ職業中稀ニ見ル所ナリ。又居所ノ關係ニ於テモ市部生活ハ郡部生活ニ比シテ健康ニ良好ナラサルコトハ周ネク世人ノ知ル所ナルカ工場ハ郡部ニ少ク市部ニ多キヲ以テ工業ニ從フ者ハ多ク市部又ハ其ノ附近ニ居住スルヲ例トス之レ工業從業者カ其ノ住所ノ關係ヨリ健康上ノ障害ヲ受クルコト多キ所以ナリ。其ノ他我國ノ現狀ニ於テ女子ノ死亡率高キ地方ハ概ネ所謂工業地方トモ目セラルヘキ所ナルコトモ亦注意ヲ要スル事項ナリ依テ先ツ以上二三ノ事實ニ付之ヲ略說シ尙工業カ健康ニ及ホス影響如何ニ付總括的ノ解明ヲ試ントス。

(一)工業者ノ肺結核罹病率高キコト。大凡健康ノ良不良若ハ衛生上ノ適不適等ヲ考查スルニハ肺結核ニ對スル罹病率若ハ死亡率ヲ檢案スルヲ以テ最モ捷徑ト

ス今日本帝國死因統計表ニ就キ明治三十九年及四十年ノ二箇年平均ヲ見ルニ男女各性死亡者千人中肺結核死亡者ハ有業者ノ百十五人五分ニ對シ無業者ハ五十八人二分ニシテ僅カニ有業者ノ二分ノ一ニ滿タス之ニ依リテ何レノ職業ト雖衛生上多少ノ影響アルヲ知ルヘシ。然リ而シテ農業牧畜養蠶並林業狩獵ニ從事スル者ハ八十六人九分(男八三・六)ナルニ拘ラス金屬ニ關スル製造業ハ二百二十六人七分(男二二・三、九)機械器具製造業ハ二百三十八人六分(男二〇・三、九、六)ト爲リ綿糸織物編物製造業ニ於テ三百〇五人二分(男二二・三、〇、三)ニ増加シ印刷活字製版寫眞等ニ至リテハ一躍四百三十九人四分(男四二・四、一)ニ激進スルヲ見ルナリ。更ニ本邦纖維工業ニ從事スル者ヲ見ルニ其ノ大多數ハ女工ニシテ而モ二十歳未滿ノ者ハ實ニ其ノ七割ヲ占ム斯ノ如ク若キ女子ノ肺結核ニ因リテ死亡スル者多キハ日本帝國死因統計ノ明示スル所ニシテ統計上纖維工業ニ限リ肺結核甚タ多シト稱スルヲ得サルカ如キ觀アルモ事實ハ斯ノ如キ單純ナル觀察ニ依リテ判斷セラルヘキモノニアラス纖維工業ニ從事セル者ノ出入甚タ頻繁ニシテ疾患タルノ故ヲ以テ又ハ疾患ニ罹ルヘキ豫想ヲ以テ退場セシメラレ又ハ自ラ退場シタル者多シ而シテ



此等疾患ノ多クハ肺結核ナリ、然ルニ退場歸郷後死亡セシ者ハ殆ント總テ農業者ノ死亡員數中ニ算入サルルヲ以テ職工死亡統計ヲ解スル上ニ於テ之ヲ參酌セサルヘカラス。要スルニ工業ナルモノハ工場内ニ於ケル空氣ノ化學的汚染及塵埃等ニ依リ或ハ身體ノ過勞ニ依リ、肺結核ニ關スル罹病率ヲ増進スルモノナルコトヲ見ルニ足ルヘシ。

(二) 市部生活ノ不健康ナルコト。市部生活ノ郡部生活ニ比シテ健康ニ不良ナルコトハ故ラニ茲ニ論證スル必要ナキモ、四十年年度ニ於ケル、全國壯丁體格檢査成績表ニ依リテ之ヲ見ルニ、甲種合格者ハ市部ニ在リテハ三割二分六厘、郡部ニ在リテハ三割九分六厘ニ該當スルヲ見ル、此ノ事ハ獨リ我國ノミナラス外國ニ於テモ亦同様ナリ、即チ獨逸ノ例ヲ見ルニ何レノ職業ヲ通シテモ郡部ノ合格者ハ市部ヨリモ合格ノ率多シ、即チ市部ノ五六割ナルニ對シ、郡部ハ七八割ノ合格者ヲ出スヲ見ルナリ。其ノ他市街地ノ發達シタル府縣ニハ肺結核ノ死亡者多キコトモ亦事實ナリ、即チ道府縣別各性死亡千中肺結核ノ比率ヲ調査スルニ全國ヲ通シテ男子ノ肺結核ニ斃ルル平均率ハ七十一人ニシテ女子ハ七十七人六分平均七十四人三分

ナリ、而シテ最多數ノ率ヲ示セルハ東京府ノ百三十七人六分(東京市ハ百六十三人六分)、大阪府ノ百一十一人(大阪市ハ百三十六人五分)、神奈川縣ノ百〇五人五分(橫濱市ハ百四十九人五分)、京都府ノ百〇三人一分(京都市ハ百七十五人二分)ニシテ、沖繩ノ百〇二人二分ヲ例外トシ、兵庫縣ノ八十七人四分(神戸市ハ八十七人二分)、福井ノ八十四人八分(福井市ハ百三十四人八分)等(以下準之)之ニ次ク此等地方ハ孰レモ皆市街地ノ發達シタル府縣ナリ。而シテ市街地其ノモノノ存在カ此等府縣ノ率ヲ高ムルモノナルコトハ勿論ニシテ、人口五萬以上ノ二十九市區ノ平均ハ百四十二人四分(男百三十六人三分、女百四十八人七分)ニシテ遙カニ平均率ヲ超過セルヲ見ル、其レ斯ノ如ク市部ノ衛生状態ハ郡部ニ比シテ不良ナリ、然ルニ工業ノ發達ハ田園ノ子女ヲ驅リテ市部又ハ其ノ附近ニ集合セシムル傾向ヲ有スルモノトスレハ、市部ニ於ケル職業中特ニ健康障害ヲ惹起シ易キ工業ニ對シ、職工ノ濫使ヲ戒メ其ノ待遇ヲ改善セシメ以テ勞働力ノ保全ヲ確保スル必要アルコトハ自ラ明カナルヘシ。

(三) 女子ノ肺結核死亡率カ比較的高キ地方ハ工業地方ナルコト 尙道府縣別各性死亡千中肺結核ニ因ル者幾人ナルヤヲ見ルニ女子ハ男子ニ比シテ一般ニ死亡率高キコトハ爭フヘカラサル事實ナルカ、其ノ率ニ於テ女子平均肺結核死亡率七



十七人六分ニ對シ十人以上高キ府縣ハ大阪兵庫群馬奈良三重岐阜長野福井富山鳥取廣島山口和歌山徳島香川愛媛ノ十六府縣ニシテ此ノ中奈良鳥取山口香川ノ四縣ヲ除キ他ハ我國ニ於ケル主要ナル工業府縣ナリトス。我國ニハ纖維工業最モ多ク職工總數ノ六割四分ハ之ニ從事シ而モ其ノ八割強ハ女子ナルヲ以テ纖維工業ト女子勞働者トハ離ル可カラサル關係ヲ有ス果シテ然ラハ工業府縣ニ於テ女子ノ肺結核死亡率カ男子ニ比シテ高キ原因ニ付テハ大ニ注意スヘキ價值アルヘシ。

尙右ニ關シ外國ノ事例ヲ調査スルニ英獨佛共ニ市街地ノ死亡率ハ女子ハ男子ニ比シテ低キニ拘ラス女子ノ多ク工業ニ從事スル地方例ヘハ絹工業地タル佛國ノ里昂市ノ如キハ女子ノ死亡率ハ男子ヨリ高シ。又普國ニ於テモ女子ノ結核死亡率ハ市街地ニ於テ著シク多クライン州ノ如キハ肺結核ノ死亡率ハ一般ニ工業ノ景氣如何ニ比例スル事實アリ。要スルニ内外ノ事實ハ工業ト死亡率殊ニ結核死亡率トニ最モ密接ノ關係アルコトヲ示セリ。

(四)健康障害ノ原因 前段ニ述ヘタル健康障害ノ事實ハ如何ナル原因ニ依ル者

ナルヤ固ヨリ工業ノ健康ニ及ホス影響ノ程度如何ハ(一)工場ノ設備(二)就業ノ條件(三)生活ノ狀況等ニ依リテ其等ヲ同クセスト雖モ今一般的ニ衛生學者ノ調査シタル所ニ依リ左ニ之ヲ略述スヘシ

(一)空氣ノ汚染 工場内ニ於テハ呼吸炭火又ハ燈火等ニ依リ炭酸ノ量著シク増加シ又一酸化炭素炭化水素等ノ有害瓦斯ヲ發生ス斯ル氣中ニ於テハ呼吸困難頭痛眩暈惡心嘔氣ヲ感セシムルヲ例トス或ハ習慣ニ依リテ之ニ堪ヘ得ル場合アリトスルモ其ノ久シキニ涉ルトキハ頑固ナル頭痛ヲ生シ又顔面及粘膜ノ蒼白消化障害等ヲ來タスモノナリ。換氣不良ナル小工場ニ於テ職工群集スルトキハ此ノ種ノ危害特ニ多ク其ノ他セメント陶磁器印刷礦石製紙烟草獸毛紡績織物等ノ工場ニ在リテハ塵埃ヲ發生ス尤モ塵埃ハ其ノ性又ハ量ニ依リテ有害ノ程度ヲ異ニスト雖最モ危險ナルハ銳利ナル衝角ヲ有スル金屬塵埃及鑛石塵埃ニシテ器械的ニ當該臟器ヲ刺戟ス斯ル刺戟反復スルトキハ遂ニ急性若ハ慢性ノ炎症ヲ惹起シ其ノ臟器ノ抵抗力ヲ減殺スルニ至ルモノナリ植物性又ハ動物性ノ塵埃ト雖其ノ量多キトキハ同一ノ結果ヲ生ス。吸入セル塵埃ハ漸次氣管支及肺臟内ニ沈着シ



又氣管支腺、肋膜、肝、脾等ノ臟器内ニ達スルコトアリ、肺臟内ニ於ケル塵埃ノ種類ニ依リ、鑛肺(シデロージス)、石肺(カリコージス)、炭肺(アントラコージス)、木綿肺(ブノイモ)ニエ、コトヌーゼ等ノ稱アリ、是故ニ塵埃ノ發生ヲ伴フ工業ニ在リテハ、肺炎、肋膜炎、氣管支炎等多數ニシテ肺結核ノ發生亦尠カラサルハ固ヨリ其ノ所ナリ。

(二)工業中毒、或ル種ノ工業ニ於テハ、毒性物ノ瓦斯蒸氣又ハ其ノ粉末ニ依リテ中毒ヲ發ス、其ノ性狀如何ニ依リテ血中ニ吸收セラレ全身症病ヲ發シ、又ハ中樞神經系、心臟腎臟等主要ナル機官ノ疾患ヲ生スルアリ、或ハ直ニ觸接シタル局所ヲ侵スモノアリ、鉛中毒ハ活版工、鉛白工、塗色工等ニ多ク、磷中毒ハ白磷ヲ取扱フ燐寸工ニ、砒素中毒ハ砒素含有ノ鍍石又ハ色素ヲ取扱フ業ニ、又水素中毒ハ鏡、檢温器、バロメーター、製造業、渡金工、製帽工等ニ發ス、硫酸、亞硫酸、鹽酸、硝酸、フルオール、水素酸、硫化水素、硫化炭素、クロール等ノ瓦斯又ハ蒸氣ハ中等度ノ發生ニ於テ既ニ著シク粘膜ヲ刺戟シ其ノ多量ナルニ至リテハ、危險ナル健康障害ヲ惹起スモノナリ。

(三)身體ノ過勞、過勞ニ因ル病的變狀ハ工業ノ種類ニ依リ、或ハ筋肉ニ、或ハ五官器又ハ呼吸器ニ發生ス、而シテ幼少者又ハ身體ノ抵抗力薄弱ナル婦女ニ在リテハ

其ノ害殊ニ顯著ナルヲ例トス。通常過勞ハ筋肉ノ疲勞弛緩ヲ起スノミナラス、屢其ノ機能ノ持續的障害即チ筋ノ強直、關節強直、髓鞘炎又ハ姿勢ノ變化ヲ呈シ、急激ナル激勵ハ筋肉ノ傷害又ハ下腹脱腸ヲ惹起スルコトアリ、其ノ他過勞ハ血行器、視官、聽官、皮膚ノ病變ヲ誘發スルコト稀ナラス。次ニ繼續セル立業ハ靜脈血ノ歸流ヲ妨ケ下肢ノ鬱血腫脹ヲ來タスヲ以テ、紡績、機織、印刷等ノ起立工業ニ在リテハ足關節又ハ下脚ノ腫大ヲ伴フナリ、通常之ヲ工場浮腫(足腫レ)ト稱シ最モ多ク年少工ニ頻發スル一種ノ工場病ナリ。又繼續セル坐業ハ腰推ヲ前屈セシメ爲ニ胸腹ヲ壓迫シテ深呼吸ヲ妨ケ肺尖ヲシテ慢性貧血ニ陥ラシメ、延テ結核病變ノ發生ヲ容易ナラシム、其ノ他痔核便秘又ハ消化障害ヲ生シ婦女女子ニ在リテハ屢々子宮ノ病變、白帶下、月經異常、妊娠力減退等ヲ發ス、製紙工場ノ如キ氣濕大ニシテ塵埃ノ發生少キニ拘ハラス肺結核ノ發生尠カラス、又消化器子宮等ノ疾患多キハ之ニ基因スルモノトス。

(四)熱氣ノ影響 火夫又ハ窯業ニ從事スル職工其ノ他高温ノ室ニ於テ就業スル者ハ體温ノ調節ヲ害ヒ呼吸器病、神經痛、レウマチスムス腎臟炎等ノ感冒性疾患ヲ



發シ腦及腦膜ノ疾患ヲ生シ、或ハ水又ハ酒精飲料ノ過飲ニ因リ消化器病ヲ誘發スルコトアリ。

(五) 濕度ノ過不足 濕度ノ過不足ハ、體溫調節ヲ不能タラシムルモノニシテ感冒、關節リヨマチス、呼吸器疾患、熱射病ヲ起シ爲ニ罹病ノ素因トナルモノナリ。

(六) 採光ノ不充分 採光不充分ノ爲物體ヲ近視スル等ニ依リテ、視力ノ調節ヲ失シ遂ニ近視眼トナリ又ハ眼球ノ機質的障害ヲ惹起スコトマリ。

(七) 喧噪ナル雜音 繼續セル喧噪ナル機械ノ音響ハ、聽官ヲ鈍ナラシメ甚シキハ全聾ニ陥ラシムルコトアリ。

(八) 有害原料ノ取扱 工業原料ノ刺戟ニ基因スル皮膚ノ濕疹ハ、之ヲ工業、エクトツエームト稱シ、又發疹ノ狀況ニ依リ一般ニ之ヲクレツエ又ハ疥癬(寄生蟲ニ寄ル疥癬ト異ル)ト稱シ、水、クレツエハ硝子眞珠等ノ磨工ニ、機那、クレツエハ機那皮、キニトネ、鹽類ヲ取扱フ職工ニ、テール、クレツエハ、テール油又ハ粗製、バラフヒンヲ取扱フ職工ニ、セメント、クレツエハ壁工ニ見ル所ノモノナリ、又、クローム鹽類ヲ取扱フ職工ハ皮膚ニ潰瘍ヲ生シ、フルオール水素酸亦類似ノ病變ヲ發セシムルモノナリ。

(九) 傳染病ノ傳播

工場ハ傳染病傳播ノ一源泉ニシテ結核菌含有ノ咯痰乾燥シ塵埃ト共ニ飛揚シ肺結核ヲ傳播スルノ危險アリ、此ノ事實ヲ證明スルハ至難ナリト雖、各工場ニ於ケル唾壺ノ配置、普カラス、假令普及スルモ職工ノ之ヲ使用スルモノ少數ニシテ往々床上ニ咯痰ヲ散見スルコトアリ、之ニ依リテ推考スルニ病毒ノ傳播アルコトハ確實ナリ。又、繼續ノ選別、打綿等ノ工場ニ於テハ結核、疥癬、痘瘡(ベスト、トラホーム、脾脱疽等)ノ病原ヲ傳播スルコトアリ。

之ヲ要スルニ工業ト健康障害トハ最モ密接ナル關係ヲ有スルヲ以テ、人力ノ及フ限り成ル可ク其ノ危害ヲ減少スルハ、工業主及職工カ各自ニ努ムヘキ所ナリト雖、各種ノ事情ニ妨ケラレ到底其ノ實行ヲ望ムコト能ハサルモノ多シトスレハ、一定ノ法現ヲ制定シテ工業上ノ規則ト節制トヲ強要スルハ、政府ノ當ニ爲スヘキ所ナリト謂フ可シ。

第二項 罹病及其ノ原因

各國工場法制定ノ沿革ヲ見ルニ工業地方ニ於ケル過度ノ労働其ノ他工場設備ノ不完備等ニ起因スル不衛生ノ状態ヲ改善シ、其ノ之ニ原因シテ發生スル社會上



ノ慘禍ヲ豫防セントスルノ動機カ法律制定ニ至ル主要ナル原因ナリシコトハ茲ニ絮說スルヲ須キサル所ナリ工業上ノ競争激甚ニシテ其ノ操業ノ狀態亦甚々集約的ナル歐洲ノ工業社會ニ若シ今日ニ至ル迄工場法ノ制定莫カリシナラハ假令職工組合等カ如何ニ自家防衛ノ爲資本主ニ對抗シテ自家ノ利益ヲ留保スルコトヲ努メタリトスルモ職工階級ノ衛生狀態ハ今日ニ比シ一層不良ナルヘキコトハ想像スルニ餘リアリ。翻テ我國ニ於ケル工業ノ狀態ヲ見ルニ輸入工業(輸入品防起リタル外)ノ側ニ在リテハ水火ノカヲ以テ機械ヲ運轉セル場内ニ在リテ塵埃粉末若ハ有害瓦斯ノ間ニ日夜操業セシムル事實アリト雖我在來工業ノ側ニ在リテハ寒暑ノ調節ニハ遺憾アルモ通風ノ關係ハ比較的良好ナル木造家屋内ニ在リテ半ハ手工業若ハ家内工業ニ準スヘキ狀態ニ於テ操業スルモノ多キニ居ルヲ以テ之ヲ其ノ外觀ヨリ判斷スルトキハ我工業狀態ハ彼先進國ニ比シテ決シテ急調過激ナリト謂ヒ難キモノノ如シ然ルニ我國職工ノ罹病率ハ一般ニ歐洲諸國ニ比シテ高キ事實アルハ何ソヤ今左ニ統計的基礎ニ依リテ其ノ大綱ヲ叙述スヘシ。

職工ノ罹病 之ニ關シテハ兩方面ヨリ調査ヲ試ミタリ其ノ一ハ工場ヲシテ自

ラ之ヲ届出テシムル方法ニシテ其ノ二ハ工場生活ヲ離レ歸郷シタル女工ニ付其ノ歸郷ノ原因ノ何レニ在ルヤヲ裏面ヨリ調査スル方法はナリ

第一ノ方法ニ依ル調査 明治三十九年ヨリ四十一年ニ至ル三箇年間平均ニ付之ヲ見ルニ平均一年ニ病者ハ男工千人ニ付八百五十七人女工千人ニ付千八十人通計千六十一人ト爲ルナリ而シテ病者ノ多數ナルハ紡績毛斯倫木綿絨麻ノ織物工業及陶磁器セメント等ノ工業ニシテ比較的少數ナルハ製絲絹織物ノ工業ナリ而シテ二三ノ工業ヲ除クノ外ハ女工ニ多キヲ常トス。

其ノ病類ハ一般ニ消化器病其ノ他營養器病最モ多ク之ニ亞クハ呼吸器病眼病脚氣皮膚病泌尿生殖器病レウマチス等ニシテ結核性諸病ハ紡績工場ニ於テ僅ニ一プロセント内外ヲ算シ表面少數ナルカ如シト雖多クノ工場ニ於テハ慢性諸病及豫後ノ疑ハシキ者ハ成ル可ク速ニ解備スル傾アルヲ以テ之ヲ罹病表中ニ編入セサルモノト認メサルヘカラス。

工場内職工死亡者及未治解雇者ニ就テ其ノ原因ヲ調査スルニ其ノ約半數ハ肺結核肺結核ノ疑アルモノ其ノ他ノ結核性疾患ニシテ之ニ亞クハ脚氣神經系疾患



等ナリトス

如上ノ調査ハ内務省令ヲ以テ各工場ヨリ届出テシメタル結果ヲ綜合シタルモノナルカ(第一參考資料)如何ナル程度ニ於テ此ノ數字ヲ信據ス可キモノナルヤハ別ニ考慮ヲ要スルモ、罹病ノ事實ハ休業又ハ病室收容ニ至ルヘキモノ又ハ服藥若ハ受療四日乃至七日以上等ノ標準ヲ以テ計上セルモノト認メテ差支ナカルヘク又工場ヨリスル届出ハ其ノ多キニ出ツルヨリモ少キヲ裝フノ傾向アルハ事實ナルヲ以テ實際ニ於テハ尙是以上ノ罹病者アルヘキハ推測スルニ難カラス

調査吏員等ノ現場ニ就テ調査シタル所ニ依レハ紡績織物等ニ在リテハ職工千人ニ付甚シキハ一箇月間ニ四百人以上ノ病者ヲ出ス所アリ、而シテ職工千人ニ付一日ノ診察數七八十人ヲ算スルモノ稀少ナリトセス、故ニ前記ノ推定ハ小ニ失スルモ大ニ失スルコトナカルヘシ。

比較ノ基礎ト爲ル可キ罹病ノ標準又ハ之ヲ表示スル數字ハ必シモ其ノ適實ナルコトヲ豫斷スルヲ得サルモノアリト雖、假リニ此ヲ以テ實數ト看做シ(一)全國ノ監獄ニ於ケル在監者罹病率並(二)公衆罹病率及(三)外國工場ニ於ケル罹病率ト比較

スレハ次ノ如シ

(一)在監人トノ比較 明治三十七年ヨリ四十一年ニ至ル五箇年平均ニ依レハ全國ノ在監人千人中一年間ノ病者ハ休役患者及病監患者千人中四百二十四人ニシテ、之ヲ工場ノ罹病率ニ比スルトキハ其ノ半數ニモ滿タサルヲ見ル(第一參考資料)又之ヲ病類ニ分テハ胃ノ疾患、下痢及腸炎等ノ消化器病最モ多ク之ニ亞クハ呼吸器病、皮膚病等ナリ。

(二)公衆罹病率トノ比較 ヲ見ルニ公衆間ニ於ケル一年間ノ罹病數ハ、ベツテンコトフエル氏ノ大數ニ就テ調査シタル統計ニ依レハ一年間ノ死亡數ニ三十四ヲ乘シタルモノニシテ、例ヘハ人口千ニ付死亡二十トセハ一年間ニ約七百ノ病者アル割合ナリ(茲ニ謂フ病者トハ疾病ノ爲ニ就テ又ハ休業ヲ要ス)本邦ニ於テハ未タ這般ノ關係ヲ認ムルニ足ルヘキ正確ナル統計ナシト雖、近時施療病院、水害避難所等ニ於テ健康診斷ヲ施行シタル地域等ニ於テ調査シタル成績ハ略ベ氏ノ原則ト合致スルヲ見ルナリ。余輩ハ茲ニ於テ職工罹病率カ單ニ公衆罹病率ヨリ大ナルコトノミニ注目シテ止ムヘキニ非ス、何トナレハ職工ト公衆トノ年齡關係ヲ考フル



ニ職工ノ多數ハ壯年者ニシテ公衆中ニハ罹病率及死亡率共特ニ大ナル小兒及老年者ヲ包含セリ壯年者ノ罹病率カ一般公衆ノ其レニ比シテ少數ナルヘキハ各性年齡別死亡比例ノ統計ニ照ラスモ明ナル所ナリ於是カ本邦職工ノ罹病率カ公衆罹病率ヲ超過スルコト頗ル大ナルモノアルヲ知ルヘシ。

(三)外國職工ノ病傷數ニ關シテ「シユール」及「ブルクハルト」氏カ瑞西ニ於テ調査シタル所ニ依レハ職工千人ニ付各業ノ平均二九二・九ナリ、又「ラウハベルグ」氏ノ調査シタル維納疾病保險金庫ニ於テハ被保人千人中一年間ノ罹病者人員ハ平均四二三ナリ。尙獨逸國疾病保險局ノ報告ニ依レハ千九百三年ニ於テ三八二・九ニシテ千九百四年ニ於テハ四〇六・六ナリト謂フ其ノ他英國「マンチエスタ」ニ於ケル職工ノ各年齡別罹病調查表ハ十六歳乃至十九歳ニ於テ二八六・六二十歳乃至二十四歳ニシテ二四四五トナリ、二十五歳乃至二十九歳ニシテ二三四九トナリ、五十歳乃至五十四歳ニ至ル迄ハ總テ三百未滿ナルコトヲ示セリ。

以上ノ數字ハ罹病者ト見ルヘキ標準ノ異ナルニ從ヒ根柢ニ多少ノ異同アルヘシト雖假リニ數字上ノミヨリ云フトキハ彼ハ我ニ比シテ實ニ三四分ノ一ノ少數

ニ當レリト謂フ可シ。余輩ハ罹病ノ標準ヲ一定セスシテ單ニ數字ノミヲ比較スルノ無益ナルヲ知ラサルニ非ス然レトモ以上述ヘタル所ニ依リテ所謂震ヲ隔テテ山ヲ見ルカ如ク多少此ノ間ノ消息ヲ窺ヒ得可シト信スルナリ。

第二ノ方法ニ依ル調査 第一ノ方法ニ依ル調査ハ未タ職工ノ健康状態ニ關シテ確實ナル材料ト認ム可カラサルモノアルヲ以テ既ニ工場勞働ヲ終リテ歸郷シタル者ニ付其ノ歸郷原因ヲ調査スルノ必要アルヲ感シ重ナル女工供給地ト認ムヘキ新潟外十一縣ニ於テ明治四十二年中女工ノ出稼者數歸郷者數歸郷ノ原因疾病ノ種類歸郷後ノ状態等ヲ調査シタルニ、同年中前記十二縣ヨリ他地方ニ出稼シタル者合計二萬五千六百人ニシテ、歸郷シタル者九千八百六十八人中歸郷事由ノ判明セル者八千三百人中、疾病ノ爲歸郷シタル者千五百九十六人、疾病ノ爲歸郷シタルニ非スト雖歸郷後重病ニ罹リタル者二百七十五人、病死シタル者四百六十三人計二千三百三十四人ニシテ歸郷事由判明者ノ二割八分一厘ニ當レリ、而シテ其ノ内結核性疾患又ハ結核性疾患ト認メラル可キ者ハ六百二十五人(不明ナルニ)ニシテ、病者及死者(同上ニ縣ヲ除ク)ノ三割七分二厘ニ相當ス。由是觀之、工場生活ノ裏面



ニハ最モ憂慮スヘキ事實ノ存在スルヲ知ルヘシ。(參考資料)  
 罹病ノ原因 以上述ヘタル所ニ依リ我國職工ノ罹病率カ外國ノ職工其ノ他ニ  
 比シテ果シテ大ナリトスレハ更ニ其ノ原因ノ何レニ在ルヤヲ攻究セサルヘカラ  
 ス今其ノ主要ナルモノニ付之ヲ概述スヘシ。

(一) 無制限ノ勞働 前ニモ陳ヘタルカ如ク工場ノ建設及設備ニ關シテハ從來地  
 方應ニ於テ出來得ル限リ其ノ取締ヲ爲シ來リタリト雖職工ノ雇入及傭使ニ關ス  
 ル規定ニ至リテハ之ヲ設クルモノ殆ント無キヲ以テ工場主ハ安價多量競争ノ結  
 果事業ノ性質上許ス限リ勞銀ノ低廉ナル婦女幼年者ヲ雇入レ之ヲシテ身體ノ  
 耐ヘ得ル限勞働セシムルカ如キ状態ト爲リ職工就業時間ハ他國ニ類例ナキ過長  
 ノモノトナルニ至レリ。即チ製絲織物ノ工場ニ於テハ一日十七時間以上ニ達シ、  
 一定ノ休憩又ハ休日ヲ設ケサルアリ、且作業ヲ職工ノ賃銀競争ニ委スルヲ以テ食  
 事ノ際ノ如キ最終ノ嚙下ハ半坐半立ノ状態ニ於テ爲スヲ常トス、又紡績業ノ如キ  
 ハ歐米各國ニ於テハ嘗テ其ノ例ヲ見サル晝夜連續作業ヲ行ヒ女工ヲシテ徹夜業  
 ニ從事セシムルモノ殆ント其ノ全部ヲ占メ、職工一人一日ノ就業時間ハ十二時間

ナリト雖徹夜ニ原因スル疲勞甚シキノミナラス、睡眠不足ナルト身體ノ發育上至  
 大ノ關係アル日光ヲ受クルコト少ナキトニ依リ、女工ノ多クハ營養不良貧血ニ陥  
 リ、體量ノ減少ヲ來スニ至ル。數種ノ工場ニ於テ徹夜業ト體重増減トノ關係ヲ調  
 査シタル成績ニ依レハ、夜業一週内ニ於ケル體量ノ減少少キモ數十匁ニ達シ甚  
 シキハ二百匁ヲ超過スルモノアリ、而シテ一週間ノ晝業ニ依リテ恢復スル量目ハ  
 夜業ニ依リテ失フ所ヲ補フニ足ラサルヲ例トシ、其ノ他晝夜交替シテ徹夜業ヲ爲  
 ス工場中事業ノ繁忙ナルニ際シテハ晝夜各組ノ就業時間轉換ノ際尙半日ノ居殘  
 早出就業即チ十八時間ノ就業ヲ爲サシムルコトアリ、而カモ職工ノ長幼又ハ男女  
 ノ間ニ區別ヲ設ケサルコト勿論ナリ、職工ニシテ連續徹夜業ニ從事センカ身體ノ  
 量目ハ漸減スルヲ以テ、斯ノ如キ操業カ長期ニ亘ルトキハ無期限ニ減食ノ刑ニ處シ  
 終リニ飢餓死ニ至ラシムルニ異ナラス、連續徹夜業ニ從事スル者ハ之カ爲ニ身體  
 ノ抵抗力ヲ弱メ疾患ニ罹リ易キハ當然ニシテ疾患ニ罹ラサル者ト雖モ數箇月ヲ  
 出テサルニ既ニ其ノ職ニ堪ヘ難ク工場ヲ去ラサルヘカラサルニ至ルハ爭フヘカ  
 ラサル事實タリ。又職工ノ年齢ヲ見ルニ憐寸、紡績硝子、段通、口金、鉚等ノ金屬品具



釦、印刷、卷煙草等ノ諸工場ニ於テハ七八歳乃至十二三歳ナル幼者ヲ傭使シ之ヲシテ成年者ト同様長時間ノ勞働ニ從事セシメ中ニハ徹夜業ニ從事セシムルモノアリ。

(二) 工場設備 多數ノ職工ヲ收容シテ操業セシムル工場ハ特別ノ構造ヲ具備スル必要アルニ拘ハラズ、在來ノ住宅ヲ之ニ使用スルモノアリ新ニ建設スル工場ト雖其ノ設備極メテ不完全ナルモノ尠カラズ。即チ空氣拔ヲ設クルカ如キモノハ極メテ稀ナルノミナラス、窓ノ如キモ僅ニ採光ニ差支ナキヲ期シ、換氣ノ點ヨリ窓ノ配置構造ニ注意ヲ加フルモノ甚タ少シ、從テ室内ノ空氣ハ汚レ或ハ塵埃有害瓦斯ノ室内ニ停滯セル所アリ、特ニ纖維工場ニ於テハ操業上通風ヲ忌ムコトアルヲ以テ、換氣ノ點ニ於テ不充分ナルモノ多シ。其ノ他セメント工場、製紙工場、製帽工場、製油工場、紡績工場等ノ或部分ニ於テハ多量ノ塵埃粉末ヲ飛散シ、近隣又ハ職工徒弟ニ危害ヲ生スルノ虞多キモ之カ豫防ノ設備方法完カラサルモノ多シ、加之職工徒弟ハ場内ニ塵埃充滿シテ咫尺ヲ辨セサルニ至ルモ僅ニ手拭ヲ以テ鼻口ヲ覆フニ過キス紡績工場ノ混綿、打綿、梳綿及紡績室等ニ於テハ纖維ノ飛散甚シキモ之

ヲ排除スルノ設備ヲ爲スモノ稀ナルハ勿論、周圍ノ窓ハ操業上支障アリトノ故ヲ以テ曾テ之ヲ開クコトナク或ハ之ヲ箝メ殺シト爲セルモノアリ、其ノ他刷子工場ノ削骨室ニ於ケル除塵器ノ如キ設備ナキニ非サルモ要スルニ此ノ種ノ危害ニ對スル豫防ノ方法ハ極メテ不完全ナリト謂フヘシ。

(三) 寄宿舎 ニハ女工殊ニ幼少年者最モ多ク寄宿スルヲ常トス、大工場ニ於ケル寄宿舎ノ構造設備ハ概ネ稍々整頓セルモノノ如シ。然レトモ寄宿者ノ多數ナルニ比シ建物ノ規模小ニシテ氣容ノ不足ナル所アルト、掃除清潔法ノ十分ナラサルト、傳染性疾病豫防ニ關スル注意ノ一般ニ不十分ナルト、避難ノ設備不完全ナルトハ免レ難シ。小工場ノ寄宿舎殊ニ工場ノ一部分又ハ普通ノ住家ヲ使用スルモノハ概ネ皆不完全極マレリ、手織物工場、硝子工場、印刷工場等ノ小ナルモノニ在リテハ殊ニ甚シトス。女工ヲ收容セル寄宿舎ニ於テ室ノ面積及寢具ノ不足ノ爲ニ二人ヲ一床ニ眠ラシムル所少カラス、此ノ如キ所ニテハ女工ノ安眠ヲ妨ケ、疲勞休養ヲ不充分ナラシメ、風紀ヲ亂シ併セテ結核ノ傳播ヲ容易ナラシムルモノニシテ其ノ害タルヤ蓋シ尠少ナラサルヘシ。



(四) 飲食物 大工場ニ在リテハ良好ナル水ノ供給ニ注意シ又ハ濾過煮沸等除害ノ施設ヲ爲スモノアリト雖小工場ニ在リテハ這般ノ注意ヲ缺クコト少カラス。其ノ他食物ノ如キモ亦少數ノ大工場ヲ除キテハ概シテ粗惡ニシテ其ノ養價保健ノ標準以下ニ至ルモノ多キカ如シ。加之、生活ノ狀態從前ニ異リタルト、勞働ノ過度ナルト、休憩時間ノ少キ等ニ因リ食機ノ不振ヲ來シ、到底充分ナル營養ヲ取ルコト能ハサルモノ多シ。

(五) 醫療 數百人ノ職工ヲ寄宿セシムル工場ニ於テハ病者ニ對シ相當ノ病室ヲ設ケ醫師看護婦ヲ常置スルノ必要アルニ拘ラス、寄宿舎ノ一部ヲ以テ病室ニ充テ附近ノ開業醫ニ特約シテ其ノ來診ヲ求ムルニ過サルモノ多シ。中ニハ醫師看護婦ヲ常置シ、特別ノ病室ヲ設ケ又普通病室ノ外別ニ隔離室等ヲ設クルモノアレトモ、醫務ノ設備及病室ノ管理ハ概ネ不完全ニシテ爲ニ傳染性ノ疾病ヲ傳播スルノ虞アルモノ多シ。

以上ノ外向本邦職工ノ罹病率ヲ大ナラシムル原因多々アリト雖大凡以上述ヘタル所ニ依リ類推シ得可キモノト思考スルヲ以テ茲ニ之ヲ省略ス。

第三項 罹災及其ノ原因

工場ニ於テ負傷者ヲ生スルハ殆ント原動力ヲ使用スル工場ニ限ルト云フモ可ナリ、尤モ原動力ヲ使用セサル工場ニ於テモ、火風震災等ノ場合ノ外爆發性、發火性ノ物品ヲ取扱フ場合ニ、往々負傷スルモノナキニ非スト雖其ノ數少シ。原動力ヲ使用スル工場ニ於テ多數ノ負傷者ヲ生スルハ機械工場中造船、造兵、車輛、機械製造等ノ工場、金屬精鍊工場及纖維工場中紡績工場、力織機工場等ヲ主トス。化學工場ニ於テハ爆發性、發火性ノ物品ヲ製造スル工場硝子工場等ニ於テ火傷等ノ負傷者ヲ生スルコト少カラサルモ、重大ナル負傷ハ前記工場ノ如ク多カラス、然レトモ化學工場ニ於テハ有害ノ料品ヲ取扱フモノ多キヲ以テ長日月間ニ健康ヲ害スルノ虞多キハ勿論ナリトス。

罹災率モ亦本邦工場ニ於ケルモノハ外國ニ比較シテ高キカ如シ、即チ工場ノ届出ニ依ル罹災率ハ明治三十九年及四十一年ノ三箇年平均ニ於テ職工千人ニ付負傷數男女平均四十六人三分ニシテ男工百十八人、女工四十人ヲ算シ其最モ多キハ三百五十人以上ニ達シタリ(參考資料 第一參照)今之ヲ外國ニ於ケル負傷數ニ比較スルニ千



九百六年獨國ニ於テハ最モ負傷者多キ製粉、製材及製鐵等ニ於テモ十五人、七三ヨリ十人、四五ノ間ニ在リ、又奧國ニ於テハ最モ負傷者多キ木製品機械器具、銃砲、武器工業ニ於テモ四十人、一、二ヨリ十九人、五三ノ間ニ在リ、而シテ佛國ニ於テハ統計上獨塊ニ比シテ遙カニ大ナルモ普通金屬品加工業、化學工業、窯業ニ於テ五十五人、九乃至九十七人、八ナレハ我國ニ比シテ少シ。此等ノ計數固ヨリ負傷ト認定スルノ標準必シモノナラサルヲ以テ探テ以テ確乎不動ノ比例ト爲スヲ得スト雖、大體ニ於テ本邦ニ於ケル負傷ノ比較的多キコトヲ窺知スルヲ得ンカ、本邦工場ニ職工罹災多キ原因モ亦罹病者多キ原因ニ準シテ之ヲ推知スルコト容易ナル可キヲ以テ、茲ニハ其ノ主要ナル諸點ヲ舉示スルニ止ムヘシ

(一) 工場ノ構造設備 建物ノ設計並施工ノ方法等ニ缺クル所アルモノ例ヘハ大ナル建物ニシテ内部ニ柱ノ少キモノ即チ屋根ノ重量ニ對シ下部ノ釣合、當ヲ得サルモノ等アリ、殊ニ二階以上ノ工場若ハ在來ノ屋根ヲ工場ニ更メタル所ニハ不完全ナルモノ多シ、又大ナル傳動軸ヲ過少ナル梁ニ取付ケ、若ハ動力ニ對スル設備ヲ缺クモノアリ。

避難ノ設備ハ概シテ不完全ナリ、就中纖維工場、製紙工場、印刷工場、燐寸工場等ニ於テハ多數ノ職工殊ニ女工幼少工ヲ傭使シ、二階以上ニ執業場ヲ設クルニ拘ハラズ、出入口、非常口、通路階段、戸ノ配置、個數、構造等ニ避難ノ注意ヲ爲スモノ甚タ少ク時トシテハ非常口アルモノ之ニ堅固ナル鎖鑰ヲ施シ通路ニ貨物ヲ堆積シ階段ニ板ヲ並ヘテ貨物ヲ上下輻輳セシメ窓ハ凡テ鐵棒ヲ以テ籍メ殺シト爲セル等不時ノ災厄起ルトキハ危險ノ虞アルモノ少シトセス。其ノ他防火及消火ノ設備モ亦不完全ナリ、紡績工場其ノ他大工場殊ニ火災保險ヲ附シタル工場ハ暫ク之ヲ別トスルモ燐寸工場、石油工場其ノ他發火性又ハ易燃質ノ物品ヲ取扱ヒ若ハ竈爐ヲ用ウル工場殊ニ其ノ小ナルモノニ在リテハ防火ノ設備ヲ缺クモノ多ク、消火ノ器具ヲ備フルモ不完全若ハ箇數少ク不時ノ際實用ヲ爲ササル感アルモノ尠カラス。又煙突ニ關シテモ煉瓦煙突ノ地形不完全ナル爲傾斜ヲ來シ、或ハ煉瓦積ノ厚サ不充分ナル爲若ハ粘接料ノ不適當ナル爲龜裂ヲ來シテ、風災震災等ノ際倒壞スルモノアリ又鐵製煙突ニ在リテハ鐵板薄キハ數年ナラスシテ腐蝕シ爲ニ倒壞スルコトアリ、又煙突ノ掃除不行届ナル爲火災ヲ起スコトアリ。



(二) 汽罐ノ保管 小工場ニ於テ使用スル汽罐ハ概ネ設計、製作、据付共ニ不完全ニシテ附屬品ノ規整ヲ缺キ就中汽壓計、安全瓣、給水器、驗水器等ノ如キ主要ナル物ニ付テモ其ノ規整ニ注意セサルモノアリ。又罐内ノ掃除行届カス湯垢ノ堆積スルヲモ顧ミス、爲ニ局部ヲ過熱シテ脹出ヲ生セシメタルモノアリ、斯ノ如キ状態ナルヲ以テ往々汽罐ノ破裂損壞ヲ招クコトアルナリ、

(三) 汽機及機械 運轉部就中勢輪曲柄十字頭其ノ他動力傳導ノ車軸、調車、調帶又ハ調索、齒車ノ喰合「ロール」等ニシテ其ノ位置構造等ニ依リ、殊ニ危險ノ虞多キニ拘ハラス、危害豫防ノ裝置ヲ設ケサルモノアリ。又力織機ニ杆止ナク、機械鋸ニ被覆ノ設ケナク、尙起重機、捲揚機械、昇降機等ニ危險豫防ノ裝置ナキ爲、職工ノ負傷スル場合少カラス。外國製ノ機械ヲ用ウル場合ニ於テハ製作圖ノ法規慣例ニ依リ被覆ヲ備フルモノアルモ中ニハ此ノ被覆サヘ取外シタルモノアリ、之ヲ要スルニ機械ノ運轉ニ伴フ危險ノ豫防ニ注意スルモノハ甚ダ稀ナルカ如シ。

(四) 有害料品ノ取扱 鹽酸、硫酸、硝酸、磷、鹽酸加里、水銀、鉛及鉛合金、鉛丹、鉛白、晒粉、亞鉛等有害ノ料品ヲ製造シ又ハ使用スル工場ニ於テ職工徒弟ノ爲ニ特ニ工衣ヲ給

シ食堂ヲ設ケ洗滌所、浴場等危害豫防ノ方法ヲ設ケサルモノ多キノミナラス、小ナル工場主ハ其ノ物品ノ性質スラ知ラス、僅ニ人體ニ宜シカラサルモノナリト心得ル位ナレハ職工徒弟ニシテ其ノ物質ノ何タルヲ解セサルハ勿論、時々之ニ依リテ不慮ノ災害ヲ惹起スルコトアリ。尙其ノ他ノ原因ヲ掲クルトキハ、本邦ニ於ケル職工ノ勤續期間短クシテ工場内ノ操業ニ習熟スルニ至ラサルニ、既ニ他ノ工場ニ移リ又ハ轉業スルモノ多キヲ以テ、不慣ノ職工ハ比較的多數ナルコト、及工場主中職工ニ教育ヲ施スカ如キ心掛アル者少キ爲、職工ノ無智無識カ原因ト爲リテ災害ヲ惹起スルニ至ルコトアリ、或ハ又工業主ノ不注意ナル僱使即チ原動力ヲ使用スル工場ニ於テ幼少者及婦女ヲシテ運轉中機械ノ危險ナル部分ノ掃除、調帶、調索ノ取外シ等、危險ナル業務ヲ爲サシムルコトアリ。其ノ他、一般ニ工場ノ規律整頓セサルヲ以テ、操業上各種ノ不調和ヲ生シテ災害ヲ醸スカ如キコトアリ、即チ幼少者婦女又ハ未熟者ニシテ自己ノ擔當以外ノ仕事ニ手ヲ出シ爲ニ死傷スルコト少カラス、傳動軸ニ卷上ケラレ悲惨ノ死ヲ遂ケ又ハ腕ヲ斷タルカ如キ重大ナル負傷ヲ受クル者等是ナリ要スルニ此等ノ現狀ハ本邦工場ノ全部ヲ通シテ皆然リト云



フニ非尤ルモ、中等以下ノ工場ニ在リテハ往々見聞スル所ナリトス。工場ノ物質的取締ハ前章ニ述ヘタルカ如ク、廳府縣警察部ニ於テ之カ取締ヲ爲セリト雖、經費ノ都合其ノ他ニ依リ未タ完全ニ取締ヲ施行シ得サルモノナキニ非ス、左レハ、今後益々行政上ノ取締ヲ進メ、工業主ニ十分ノ注意ヲ喚起シ以テ罹災ヲ未發ニ防ク爲完全ナル制度ヲ確立スルノ必要ヲ生ス可キヤ言ヲ俟タサル所ナリ。

(附)工場カ外部ニ與フル害

工場ノ建設及設備ノ不完全ナル爲、工場内部ニ於テ職工ノ健康ヲ害シ又ハ不慮ノ災害ヲ惹起スル事實ハ、同時ニ外部ニ於ケル公衆ニ危害ヲ及ホスノ原因ト爲ルモノニシテ、或ハ振動騒響或ハ粉塵ノ散布有害瓦斯又ハ汚液ノ流布等ニ依リ公安問題又ハ衛生問題ヲ發生スルニ至ルモノトス。

### 第三節 風紀

職工中自家ヨリ通勤スル者ハ其ノ品行不良ナル者比較的少キモ、都會ノ地其ノ他多數ノ工場ノ集中セル地方ニ在ル工場附屬ノ寄宿舎ニ寄宿スル工女ノ風紀ハ、

概シテ紊亂セルカ如シ、多數ノ工場ニ於テハ職工ノ風紀ニ注意スルモ多クハ機械的ノ檢束ニ止マリ其ノ効果ノ見ルヘキモノナキヲ例トス。固ヨリ彼等ノ郷里タル地方ノ風紀ハ必シモ良好ナルモノノミニ非サルヘキモ、郡村ニ於ケル子女ハ一度品行ヲ紊ル者ト雖結局一家ヲ作り能ク其ノ生ヲ終ルヲ常トス、然ルニ工場所在地ニ來リテ一旦品行ヲ紊リタル者ハ、多クハ遂ニ墮落シ了スルナリ、是即チ工場組織ニ伴フ風紀ノ紊亂ヨリ殊ニ恐ルヘキ結果ヲ生スル所以ナリ。加之、職工徒弟ノ風紀ハ延テ地方一般ノ風紀ヲ紊ルノ事實アルハ、工業ノ隆盛ナル地方ニ於テ往々之ヲ認ムル所ニシテ亦甚憂フヘキモノトス。

寄宿舎及下宿屋ノ生活カ工女ノ品性風紀ニ及ホス其ノ他ノ影響ハ、所謂女子ノ身嗜ナルモノヲ失ヒ、殊ニ炊事洗濯等家事ニ關スル事ハ、一切無頓着ナルヲ以テ他日一家ヲ作り、子女ヲ養育スルカ如キ素養ト氣質トヲ缺クニ至ル。(參考資料 第四參照)

### 第四節 傷病死者ノ扶助

單純ナル個人主義若ハ契約自由ノ主義ヨリ之ヲ見ルトキハ、職工カ業務ニ因リ



テ負傷シ疾病ニ罹リ又ハ死亡スルコトアルモ、其ノ死亡ノ原因ニシテ工場主ノ故意又ハ過失ニ因ルニ非サル限り、工場主ニ於テ何等賠償的ノ給付ヲ爲スヲ要スルモノニ非サルナリ。之レ理論ノ示ス所ナリト雖理論ト實際トハ甚シク相背馳シ、事實ニ於テ職工ハ工場主ニ對シ對等ノ個人格トシテ自由意思ニ依リ契約ヲ爲シ得ルモノニ非ス、換言スレハ法律上ハ兎モ角經濟上ニ於テ職工ハ著シク弱者ノ位置ニ在ルモノナルヲ以テ、就職ノ初ニ當リテ正當ニ其ノ欲スル所ヲ以テ工場主ヲ要約シ得サルヲ例トス、特ニ外國ニ於ケルカ如ク労働者ノ組合モ無ク、又婦女幼少年職工ノ多數ナル我國ニ於テハ、職工ト工業主トノ契約關係ハ地主ト小作人又ハ家主ト借家人トノ間ニ於ケルヨリモ尙一層ノ自由ヲ缺クモノアリ。是ニ於テカ工業主ハ職工ノ傷病死ニ對シテ、何等扶助ノ義務ヲ約束スルコトナキヲ常トス、或種ノ大工場ニ於テハ死傷者ニ對スル扶助ノ方法備ハリ、或ハ一定ノ扶助規則ヲ定メ或ハ病傷共濟組合ノ如キ仕組ヲ設ケ、平時ヨリ工業主及職工ニ於テ醜金ヲ爲シ、以テ不時ノ用ニ供スルモノアリ然トモ、此等ノ工場中遺憾ナク其ノ實績ヲ擧ケタル所ハ鮮少ナル如カシ。而シテ大多數ノ工場ハ何等ノ方法ヲモ設クルコトナク

事アルニ當リ工場主ヨリ多少ノ扶助金ヲ支出シ、同時ニ職工中ヨリモ亦醜金シテ少額ノ金額ヲ給與スルヲ例トス、其ノ金額ハ即死或ハ重大ナル負傷ニ對シテモ通常二三十圓多キハ五六十圓ヲ出ササル實況ナリ。又業務上ノ疾病ニ關シテハ寄宿者ニ對シテハ、大抵治療ヲ受ケシムルモ通勤者ニ對シテハ疾病扶助ノ事例殆ト之ナシ、稀ニ附屬ノ醫局ヲ設ケタル工場ニ於テ、通勤者ニ對シ無料診察及廉價ノ藥劑ヲ給スルモノアルヲ見ルノミ。紡績工場ニ於テハ寄宿者ノ治療費ヲ工場主ヨリ支辨スルモノ少カラサルモ、其ノ他ノ工場ニ於テハ概シテ無給ノ徒弟ニ付テハ工場主治療費ヲ負擔スルモ普通ノ職工ニ付テハ賃金中ヨリ漸次實費ヲ辨償セシム、尤モ疾病ノ長キニ渉ル者、若ハ其ノ重キ者ハ國元ニ送還スルヲ常トス、其ノ送還ニ付テハ相當ノ手續ヲ盡ス者アルモ其ノ多クハ無責任極マルヲ常トス。又寄宿舎ニ於テ死亡シタル者ノ埋葬其ノ他ノ取扱ハ動モスレバ酷薄ト看做スベキ場合ナキニ非ス。

夫レ職工ハ工業主ニトリテハ之ヲ生産用具ノ一種ト看做スヘキモノナリ、機械ニ破損ヲ生スレハ工業主ノ負擔ニ於テ之ヲ修繕スルハ當然ナリ、然ルニ無償ニテ



收容シタル職工ニ對シテハ、以上述フルカ如キ事實アリトスレハ、速ニ一定ノ制度ヲ立テテ職工ノ病傷死ニ對シ、扶助ノ義務ヲ負擔セシムルハ妥當ナリト信ス。

### 第五節 雇人解雇及周旋ニ關スル弊害

職工雇入ノ場合ニ於テハ、形ノ上ニ於テノミ工業主側ニ利益アル嚴重ナル契約ヲ爲スヲ例トスルモ、當事者タル子女ハ勿論其ノ父兄ノ多數モ亦契約ノ何物タルヲ解セサレハ、如何ナル條件ノ契約書ニモ所謂「盲判」ヲ捺ス代リニ之ヲ履行スルノ意思ハ毫モアルコトナク、工場主モ亦工女等ノ到底履行シ得サルモノト知リツツ不當ノ條件ヲ列記シテ之ヲ約諾セシムルノ形式ニ甘ンセントス。其ノ他、貧賤ナル工女ノ父兄ハ眼前ニ些少ノ前借金ヲ得ンカ爲、其ノ子女ヲ年期奉公ニ入レ人身賣買ニ類スルコトヲ承諾スルモノアリ、如斯狀況ナルヲ以テ雇傭ノ基礎確實ナラス、結局工場主ハ機械的ニ壓抑ヲ試ミ工女等ハ隙ヲ見テ逃出セントスルカ如キ種々ノ弊害ヲ生スルナリ、雇入ノ狀況既ニ此ノ如シ左レハ解雇ニ關シテモ同様何等規律ノ之ヲ節調スルモノナキハ想像スルニ難カラス。

職工ノ募集ニ關スル弊害ハ甚シキモノアリ、職工殊ニ工女ニシテ始メテ募集ニ應ジテ田園ヨリ出テ來ル者ハ、何レモ皆多少募集人又ハ周旋人等ノ口車ニ載セラレタル形跡アリ、即チ彼等募集人等ハ假リニ積極的虚偽ノ言辭ナシトスルモ工女ノ利益トナルヘキコトノミヲ鼓吹シ不利益ナル事ヲ隱蔽セルヲ以テ子女及父兄等ハ容易ニ之ヲ信スルヲ常トス、中ニハ多少ノ疑ヲ挾ムモノアルモ募集人ハ若シ間違アラシニハ歸還スルコトヲ得ヘシト稱スルヲ以テ是等ノ甘言ニ信賴シテ父兄ノ承諾ヲモ經ス應募スル者モ亦尠カラス、加之、工女ノ募集ニハ工女一人ニ付十分ナル料金ヲ懸ケテ百方妙齡ノ女子ヲ搜索セシムル場合多シ、此ニ於テ土地ノ博徒無賴漢惡婆等ハ誑詐百端往々誘拐ノ手段ヲ用キ然ラサルモ甘言ヲ以テ子女父兄ヲ欺キ以テ手数料ヲ貪ルナリ、又新ニ職工ヲ募集スル場合ノミナラス事業ノ好況ニシテ職工ニ不足ヲ告クル場合ニハ、工場相互ノ間ニ職工ヲ爭奪スル弊大ナルモノアリ、殊ニ職工紹介業者等ニシテ種々ノ手段ヲ以テ職工ヲ誘惑シ其ノ間ニ利ヲ貪ルノ例多シ。



## 第六節 結論

大凡國家富源ノ涵養ハ潤澤ナル資本ノ適當ナル投下ト健全ニシテ持久力アル熟練勞働者ノ富贍ナル供給トヲ以テ其ノ最大要件トス、然ルニ從來我國富ノ増進ヲ説ク者勞働供給ノ餘リニ豐カナルコトヲ誇稱スルト共ニ資本ノ供給ヲ一層容易ナラシムルノ必要ノミニ重キヲ置キ、健全ニシテ持久力アル熟練勞働者ヲ保護養成スルノ方面ニ於テハ比較的之ヲ寬假シタル傾ナキヲ得ス。之ヲ政府ノ立法事蹟ニ徵スルモ經濟上ノ三要素タル土地ニ關シテハ耕地整理法ヲ首メ其ノ他之カ利用改善ニ關スル法令少カラス、又金融ニ關シテハ各種銀行法其ノ他之ニ關スル助長行政ヲ規定スル法規尠カラズ、然ルニ勞働力ノ保全ニ關シテハ從來何等ノ規定ナカリシナリ。是ヲ社會政策上ノ見地ヨリ見ルモ勞働者ノ生計上唯一ノ資料ト爲ルモノハ身體ノ健康ト修得シタル職業トニシテ、彼等ハ父祖ノ遺産アルニ非ス親戚知人ノ頼ルヘキモノアルニ非ス只健康ナル身體ヲ勞役シテ衣食住ノ計ヲ爲スノ外他ニ其ノ途ナキヲ常トス、是ヲ以テ心身ノ健康ハ勞働者ニ取リテハ一

層緊切ナル生存條件ニシテ若シ之ニ缺クル所アラシカ、彼等及彼等ノ妻子ハ窮民ノ伍ニ入ルノ外ナキモノナリ、是ヲ以テ勞働者ノ健康ヲ保全スルハ獨リ彼等ヲ保護スル所以ノミニ非スシテ國家ノ繁榮進歩ヲ期スルカ爲必要ナルコトトス若シ之ヲ放任センカ國家ハ多額ノ經費ヲ投シテ多數ノ貧民ヲ救助セサル可カラサルニ至ラン。加之勞働者ノ健康ハ直接ニ國民一般ノ健康ニ影響ヲ及ホスヲ以テ國家衛生ノ基礎ハ之ヲ勞働社會ニ置カサル可カラズ、夫ノ各種ノ傳染病カ先ツ勞働社會ニ發シテ然ル後一般ニ傳播スル事實ハ此ノ理ヲ説明シテ餘リアルモノナリ。其ノ他職工ノ風紀ノ維持、雇入等ニ關スル弊害ノ艾除、扶助義務ノ設定等一トシテ帝國經濟ノ發展ニ資シ社會ノ基礎ヲ鞏固ナラシムル上ニ必要ナラサルモノナシト謂フヘシ。

本章各節ニ述ヘタル所ニ依リ本邦ノ工場勞働ニ對シ法律ヲ以テ一定ノ規律ヲ強制スルノ根據ハ略々明ニスルコトヲ得タリト信ス、果シテ然リトセハ(一)工場法ハ苟モ工場ノ名アルモノ若ハ工場ノ名ナシトスルモ加工製造ノ實アルモノノ總テニ對シテ之ヲ適用スヘキモノナルヤ(二)幼少年者ノ工場ニ就業スルコトヲ禁止又



ハ制限ス可キモノトスレハ如何ナル程度ニ於テ其ノ限界ヲ定ムヘキヤ(三)婦女幼少年者ノ過度ノ勞働ヲ節制スル爲ニハ就業時間ノ制限ハ之ヲ如何ニ定ムヘキヤ(四)徹夜業ノ禁止ハ如何ナル程度ニ於テ之カ實行ヲ期スヘキヤ(五)休憩休日ノ關係ハ如何(六)婦女幼少年者ニ禁止又ハ制限スヘキ業務ノ種類ハ如何(七)工場設備ノ改善ノ爲ニハ如何ナル規定ヲ設クヘキヤ(八)扶助ノ程度ハ如何(九)雇入解雇周旋ニ關スル弊害矯正ノ途如何等ノ問題ヲ生ス。此等ノ問題ハ單純ナル理論ヨリ之カ解決ヲ試ムルハ甚シキ困難ニ非ルヘシト雖、從來著シキ制限ヲ受ケスシテ作業シツツアリシ工場ニ對シ新ニ制限ヲ設定スルニハ、法律カ實際ニ於テ勵行セラルルコトト、之ヲ勵行シテ工場ノ現状ニ激動ヲ與ヘサルコトヲ期セサル可カラス、之レ工場法制定ニ關シテ最モ難問題トスル所ナリ、依テ更ニ章ヲ改メテ此等ノ各事項ニ付論究スル所アラントス。

## 第四章 工場法ノ内容

### 第一節 工場及職工

#### 第一項 工場ノ概念

工場ノ概念ハ一見甚ダ明瞭ナルガ如クニシテ而カモ之ヲ具體的ニ定ムルコトハ頗ル至難ノ業ナリ。學者ノ著書ヲ參見スルモ工場制工業(Factory System, Fabrikssystem)ニ關スル定義ハ多數アリト雖、工場(Factory, Fabrik)ニ關スル定義ハ極メテ稀ナリ。唯諸國ニ於ケル工場法令ヲ見ルニ二三定義様ノ規定アリ、今之ヲ參考ノ爲摘錄スレハ左ノ如シ。

英國

英國工場及手工場條例ニ於テハ、法律適用ノ便宜上工場ヲ纖維工場非纖維工場、貸工場及手工場ノ四種ニ大別シテ、同法第百四十九條ニ依リ其ノ意義ヲ明ニセリ。纖維工場トハ家屋内又ハ其ノ敷地若ハ徑路ニ於テ蒸氣、水力其ノ他ノ機械力ヲ



使用シテ綿羊毛、毛、絹絲、亞麻、大麻、黃麻、麻屑、椰子ノ纖維及其ノ他之ト同様ノ材料ヲ別々ニ、又ハ混同シ若ハ他ノ材料、又ハ此等ノ物ヨリ製出セル他ノ纖維類ヲ混同シテ製造若ハ製造準備又ハ製造ニ附屬セル手續ニ使用スル場所ヲ謂フ、但捺染業、晒布染色業、レース業、抄紙業、亞麻打柔業、製綱業及帽子製造業ハ纖維工場ト看做サス。非纖維工場トハ

- (イ) 本條例附則第六第一編ニ指定セル職業及ヒ倉庫、爐、機械場、鑄造所等ヲ謂フ
- (ロ) 附則第六第二編ニ指定セル家屋又ハ場所ノ敷地、徑路若ハ境界ニ蒸氣力、水力其ノ他ノ機械力ヲ使用シテ製造手續ヲ營ムモノヲ謂フ
- (ハ) 家屋内又ハ其ノ敷地、徑路又ハ境界ニ於テ職業ノ爲、又ハ利益ノ目的ニ依リ左ノ手工業又ハ之ト附屬セル職業ヲ營ミ又ハ其ノ製造事業ノ爲メニ蒸氣力、水力其ノ他ノ機械力ヲ使用スルモノヲ謂フ
- (一) 物品ノ全部又ハ一部ヲ製造スル業
- (二) 物品ノ改造、修覆、粧飾及仕上ケヲ營ム業
- (三) 物品ヲ販賣スルニ適セシムル業

「工場」トハ纖維工場又ハ非纖維工場若ハ工場タルヘキ性質ヲ有スルモノヲ謂フト爲シ、其ノ附則第六第一編及第二編ニ於テ捺染所、燐寸製造所、製鑛所、製紙所等二十餘個ノ工場名ヲ列舉セリ。

貸工場及手工場ニ付テモ定義規定ヲ設ケタリト雖、要スルニ工場トハ前述ノ如ク纖維工場又ハ非纖維工場若ハ工場タリ得ヘキ性質ヲ有スルモノトシ、列舉主義ヲ採レリ。貸工場手工場ノ如キハ工場ノ一變態ニシテ工場條例ノ適用ヲ受クルニ過キス、此ノ英國工場條例ニ於ケル工場ノ定義ハ、抽象的ニ工場ノ意義ヲ定メタルモノニ非スシテ、寧ロ法律ノ力ニ依リテ法律適用ノ範圍ヲ規定シタルモノト謂フヘシ。

印度 (千九百九年印度工場法第二條)

工場トハ蒸氣力、水力其ノ他ノ機械力ヲ用キ物品又ハ其ノ一部ヲ製造、變形、修繕、裝飾、完成其ノ他使用ニ適セシムル一切ノ加工ヲ爲シ、又ハ之ヲ運搬シ、販賣スルニ用ウル建物ノ謂ニシテ、住宅ヲ除ク外何レノ部分ヲモ之ヲ工場ト看做ス、但シ左記ノ數種ハ本定義中ニ含まサルモノトス。



(イ) 製藍工場

(ロ) 茶又ハ咖啡栽培場ニ存在シ其ノ目的ニ用キラル、建物  
(ハ) 一日中同時ニ就業セシムル職工五十人ニ滿タサル工場  
和蘭 (千八百八十九年三月五日ノ法律)

工場又ハ手工場ト稱スルハ製作變更修繕裝飾其ノ他物品及原料ノ使用又ハ販賣ノ爲製作スル場所ヲ謂フ。

飲食物ヲ直接ニ飲食スル爲調理スル庖厨及之ニ類似ノ場所並藥劑店ハ之ヲ例外トス

瑞西 (千八百七十七年三月二十三日ノ法律)

工場トハ多數労働者カ其ノ住居以外ノ圍繞セラレタル一定ノ場所ニ於テ、全時ニ且規律的ニ執業スル各種工業上ノ主造物ナリ、尙又工業上ノ營造物ニシテ工場ナリヤ否ヤニ付疑問アルトキハ聯邦參議院之ヲ裁定ス。

以上各國ノ法律ニ現ハレタル定義様ノ規定ヲ通覽スルニ、學理的ニ工場ノ概念ヲ定ムルコトヲ目的トシタルモノニ非スシテ、寧ロ其ノ國其ノ時代ノ經濟狀態ニ

應シテ工場及職工ニ關スル法律適用ノ便宜上工場ノ概念ヲ專斷的ニ規定シタルモノナルカ如シ。左レハ本邦ニ於テモ學術的ニ工場ノ概念ヲ論スルコトナク、寧ロ立法ノ精神ニ基キ本邦工場法ニ於ケル工場ノ概念ヲ探求セサル可カラス、然レトモ之レ至難ノ業ナリ、依テ茲ニハ唯大體ノ見込ヲ想定スルニ止メ、確定的ノ論斷ハ之ヲ他日ノ研究ニ委セサルヲ得ス。

工場トハ物品ノ全部又ハ一部ノ製造、改造、修覆裝飾、精製、仕上其ノ他ノ加工及之ニ準スヘキ作業ヲ爲ス所ニシテ電氣又ハ瓦斯等ノ發生並供給業ヲ營ム場所ヲ包含スルモ、飲食物ヲ直接ニ飲食スル爲調理スル庖厨及之ニ類似ノ場所及藥劑店ノ如キハ之ヲ除外スヘキモノナラン、左レハ工場法ニ於テ取締ヲ要スヘキモノノ中ニハ、大凡左記ノ建設物ヲ包含スルモノノ如シ。

一 目的ノ作業及附屬作業ヲ爲ス場所

一 煙突、水又ハ瓦斯タンクノ如キ高架ノ建設物

一 爆發性、發火性、引火性、易燃性ヲ有スル如キ危險ナル物品ノ貯藏場及荷造場

一 寄宿舍、食堂、休憩場、炊事場、病室、浴室、娛樂場、便所其ノ他職工ノ生活並慰安ノ用



ニ供スル建物

一以上ノ建物ニ準スヘキモノ

工場ノ意義及範圍ノ問題ハ、尙繼續シテ十分ノ研究ヲ爲スヘキモノニシテ、工場法ノ實施ト共ニ之ヲ制定スルノ要不及可否等ニ付テモ、亦豫メ考慮スヘキ事項ナルヘシ、尙本問題ノ研究資料トシテ或ル作業場カ工場ナルヤ否ヤニ付具體的ノ研究ヲ爲スヘキモノノ事例ヲ左ニ掲クヘシ、而シテ此等ノ事例ニ對シテハ工場ト見ルヘキヤ否ヤニ付假リニ斷定ヲ試ムルモ此等ノ決定ハ別段法令上ノ根據アルニアラス、唯立法當時ニ在リテ關係者カ研究ノ結果ヲ記録シタルニ止マルモノニシテ、尙此ノ上ノ研究ヲ重ヌルトキハ或ハ之ニ變更ヲ生スルコトアルヘキモノナレハ幸ニ此ノ意ヲ諒セラレンコトヲ請ハサルヲ得ス。

(一) 建築場及橋梁等ノ普請場。單ニ建築又ハ之ニ附隨スル加工等ヲ爲スニ止マルモノハ之ヲ工場ニ非ストスルヲ穩當トス、然レトモ特ニ設備シタル一定ノ場所ヲ一定期間専用シテ建築材料、普請材料ノ製造又ハ加工ヲ爲スモノハ其ノ特定ノ場所ハ之ヲ工場ト爲ス可キカ如シ、此ノ結果トシテ建築場又ハ普請

場ニシテ或ハ工場ヲ包含スルコトアリ、或ハ然ラサルコトアリ。

(二) 和船建造場。前項ニ準ス。

(三) 石切場。工場ニ非ストスルヲ穩當トス、然レトモ第一項ニ準シ特ニ設備シタル場所ヲ専用シテ切出シタル石ニ加工ヲ爲ストキハ其ノ場所ハ之ヲ工場ト見ルヘキモノノ如シ。

(四) 貯水及配水場並瓦斯及油ノ貯藏場。工場ニ非ストスルヲ穩當トス、然レトモ特ニ機械的設備ヲ有シ一定ノ作業ヲ爲スモノハ工場ト爲スヘキカ如シ。

(五) 大商店ニ附屬スル荷造場。前同斷。

(六) 河原ノ酒場。前同斷。

(七) 監獄及勞役場。勞役者ハ職工ニアラサレハ之ヲ工場ト看做ササルヲ穩當トス。

(八) 養育院又ハ精神病院内ニ於ケル作業場。前同斷。

(九) 學校ノ作業場及官公私立試驗場。前同斷。

(十) 屠獸場。同時ニ畜産製造ヲ爲ササルモノハ工場ニ非ストスルヲ穩當トス。



(十一) 養蠶場。前項ニ準ス。

(十二) 鐵山ニ於ケル坑内作業ハ勿論坑外作業ト雖選鑛精煉選炭場ノ如キハ鑛業法ノ支配ヲ受ケ工場法ノ適用範圍ニ入ラス、但シ、コークス製造場ノ如キハ假令鑛山業ノ附屬事業トシテ行ハルルト雖鑛業法ノ支配ヲ受ケス獨立ノ工業トナルヲ以テ工場法ノ適用ヲ受クヘキモノナリ。

以上ノ外尙ホ工場ト看做スヘキヤニ付仔細ノ研究ヲ要スルモノ多シ左ニ其ノ事例ヲ掲ク

- (一) 船渠、浮船渠。英國工場法ハ明文ヲ以テ之ヲ規定セリ。
- (二) 發電、變壓、配電所、發電變壓ハ製作ト見ルヘク、配電ハ加工ニ準スヘキモノナランカ
- (三) 襪、紙等ノ選別所
- (四) 蠶種製造所
- (五) 獨立セル消毒所
- (六) 獨立セル生糸ノ仕上包裝荷造所

(七) 痘苗又ハ血精製造場。

以上述ヘ來リタル所ニ依リ、工場ノ觀念ヲ概括的又ハ抽象的ニ定ムルコト甚タ困難ナルト共ニ箇別的ニ工場非工場ヲ區別スルコトモ亦容易ナラサルモノアルヲ見ルニ足ルヘシ、惟フニ法律施行ニ當リテハ行政官廳執レモ工場ノ解釋ヲ公定スルニ於テ尙一層調査ヲ要スルモノアルヘシ、然レトモ茲ニ注意ヲ要スルハ工場ノ意義若ハ範圍ヲ定ムルノ問題ト實際上工場法ノ適用範圍ヲ決定スルノ問題トハ自ラ別問題ニ屬スルコト是ナリ。何人モ認メテ以テ工場ト爲スモノト雖之ニ工場法ヲ適用スヘキヤ否ヤハ第一條第二項及第二十四條ノ問題ナリ、詳言スレハ第一條第二項ハ工場法ノ適用ヲ必要トセサル工場ハ勅令ヲ以テ之ヲ除外スヘシト規定シ、第二十四條ハ第一條ニ依リ工場法ヲ適用セサル工場ト雖、主務大臣ノ見込ニ依リ原動力ヲ用ウルモノニ限り工場法中ノ或ル規定ヲ適用スルコトアルヘキヲ規定セルヲ以テナリ。結局、法律ノ實際上ノ適用ニ關シテハ、必ス明確ナル區域ヲ畫シ、當業者ヲシテ十分了解セシメ得ヘキモノナリト信ズ。

第二項 職工ノ概念



職工ノ概念モ亦工場ノ概念ト同シク極メテ困難ナル問題ナリ、参考ノ爲一二ノ立法例ニ表ハレタル定義様ノ規定ヲ摘録スヘシ。

英國

工場及手工場條例第五十二條ハ職工ノ定義ヲ左ノ如ク定メタリ。  
賃銀ニ依ルト依ラサルトヲ問ハス製造ノ手續又ハ手工業ニ使役スルカ、若ハ製造ノ手續又ハ手工業ノ爲ニ使用シタル工場又ハ手工場ノ部分ノ掃除ノ爲ニ使役スルカ若ハ機械ノ掃除注油ノ爲ニ使役スルカ若ハ製造ノ手續又ハ手工業若ハ物品製造或ハ製造ノ手續又ハ手工業ニ伴フ他ノ事業ニ關係若ハ附屬セル事業ノ或ル種類ニ使役スルモ凡テ工場若ハ手工場ニ勞働スル女工、少年工又ハ幼年工ハ本條例ニ於テ特別ノ規定アルニアラサレハ本條例ノ意味ニ於テ使役セラル、モノト見做ス。

印度

給料ヲ受クルト否トニ拘ラス、工場内ニ於テ器械又ハ手工工ニ依リ其ノ製造ヲ助ケ、又ハ工場内ノ製造ニ使用セル部分ヲ掃除シ、又ハ器械ニ油ヲ注入シ、或ハ掃除ス

ルカ如キ、其ノ他方法ノ如何ヲ問ハス其ノ工場ノ製造ニ關係スル者ハ凡テ之ヲ使用人ト稱ス。

其ノ他ノ立法例ニ於テハ職工ニ關スル定義様ノ規定ヲ設ケスト雖、叙上二個ノ定義規定ト本邦工場法ノ精神トヲ參酌シテ職工ノ意義ヲ述フレハ凡左ノ如キモノナルヘキカ。

工場主ト雇傭契約ノ有無ニ關ラス勞役ニ對スル報酬ノ種類ト其ノ仕拂方法ノ如何ヲ問ハス、又定備ナルト臨時備ナルトヲ論セス、工場ノ目的トスル作業及其ノ附屬作業ニ從事セシムルノ目的ヲ以テ工場ニ使用スル者ヲ職工トスルハ勿論工場ノ掃除、機械ノ掃除、注油、工場内又ハ工場間ニ於テ目的作業ニ關係ヲ有スル物品ノ運搬ニ用ユル者ノ如キヲ職工トス但シ事務所ニ於ケル給仕、守衛ノ如キ者、建物ノ修繕ニ從事スル大工、臨時傭入ル、煙突、煙道、溝渠ノ掃除夫ノ如キ者ハ例外ナリ。要之職工トハ工場内ニ於テ工業主ノ指揮監督ヲ受ケ主トシテ身體的勞役ニ從事スル者ニシテ勞役ノ目的ハ工場ノ主要目的タル製造加工仕上及之ニ附屬スル作業例ヘハ荷造リ、材料製品等ノ運搬(工場内)並工場設備ノ掃除修繕其ノ他ノ手入レ



ヲ爲スニ在リ故ニ飯炊キ洗濯又ハ風呂炊キノ如キ雜役勞働ニ服スル者ヲ包含セス、家族ハ通常之ヲ職工ト看做サスト雖、若シ雇傭ノ關係アリテ賃錢ヲ受クルトキハ之ヲ職工ト看做スヘキモノト思料ス。

以上職工ニ關スル説明モ亦工場ノ意義範圍ニ關スルモノト同シク、他日一層ノ調査ヲ遂クヘキモノニシテ、茲ニハ唯立法當時ノ研究ノ顛末ヲ參考ノ爲摘録シタルニ過キサレナリ。

## 第二節 適用範圍

工場法ヲ適用スヘキ工場ノ範圍ニ關シテハ立案ノ沿革上數次ノ變遷ヲ經タリ、即チ或ハ五十人以上ノ職工徒弟ヲ使役スルコトヲ以テ條件ト爲シタルコトアリ、(明治三十一年案)或ハ常時三十人以上ノ職工徒弟ヲ傭使スルモノト爲シタルコトアリ(明治三十五年案)或ハ全ク使用人員ヲ標準トセス(イ)原動力機ノ裝置ト(ロ)事業ノ性質危險ナルカ又ハ衛生上有害ノ虞アルコトヲ以テ主タル條件トシタルコトアリ(第二十六議會提出案)惟フニ明治三十一年案及明治三十五年案カ五十人又ハ

三十人ヲ以テ境界ト爲シタルハ主トシテ中以上ノ大工場ヲ取締ルコトニ重キヲ置キタルモノナルコトヲ知ルヘク、第二十六議會提出案カ全ク人員ノ標準ヲ撤去シタルハ、先進國ニ於テ工場法ノ制定ヲ促スニ至リタル原因カ、用機工業及化學工業ノ發達ニ在ルコトニ留意シ、抽象的ニ適用ノ標準ヲ定メント期シタルモノナルヘシ。適用範圍ニ關スル立案ノ内容カ、斯ノ如キ變動ヲ來シタルノ事實ハ適以テ本問題カ立法上最モ重要ナル關係ヲ有シ而カモ絶對的ニ斷案ヲ下シ難キ問題ナリシコトヲ想見スルニ難カラス。最後ニ公表セラレタル法案ハ提出案ノ後ヲ承ケテ、原動力ノ使用ト危險又ハ不衛生ノ事業タルコトヲ條件トスルト同時ニ、當時十人以上ノ職工ヲ使用スルモノハ總テ法律ヲ適用スヘキモノトセリ。此ノ修正ハ法律適用ノ範圍ヲ擴張スルモノナルヲ以テ、施行上ノ困難ヲ增加スヘキハ豫期セラレタル所ナリト雖、斷然此ノ標準ヲ採用スルニ至リタルハ、惟フニ職工ノ使用待遇等ニ關スル弊害ハ、比較的少數ノ職工ヲ傭使スルモノニ於テ其ノ甚シキモノアルノミナラス、既ニ十人以上ノ職工ヲ傭使スルトキハ、其ノ工場ノ状態ハ家内の工業ノ状態ヲ脱シ、職工相互間ニ操業上ノ競争ヲ生シ、其ノ他群集の生活ニ伴フ



各般ノ弊害ヲ生スルニ至ルヘク、且十人以上ノ職工ヲ使用スル工場ハ織物生絲等其ノ種類頗ル多ク、之ニ従事スル職工ノ員數亦尠カラス、此等多數職工ノ健康保全風紀ノ維持ハ決シテ等閑ニ付ス可ラサルモノアルト同時ニ、千九百六年勞働者保護萬國會議ニ於テモ亦十人以上ヲ使用スル工場ニ付條約ノ規定ヲ適用スヘキ旨ヲ規定セルニ據ルモノナリ。尤モ事業ノ性質ヨリスルモ、又集團トシテノ危害モ比較的少ク且全國ニ於ケル工場數モ多カラスシテ、之ヲ除外スルモ他ニ何等影響ヲ及ホササルカ如キモノハ、別ニ適用ノ範圍外ニ置クヘキ旨ヲ指定セントスルノ精神ナリシナリ。

右適用範圍ニ對スル諮問答申ハ、百十六(生産調査會ヲ含ム)ノ中、二十人ト修正スヘシト爲シタルモノ十五、三十人ト爲スヘシト爲シタルモノ五ニ過キサリキ、斯ノ如ク大體ニ於テ十人ヲ可トセリト雖、當時之ニ對シテ有力ナル反對說ヲ發表セラレタルハ、戶田博士ニシテ、其ノ要旨ハ原動力ヲ用キサル小工場ニ工場法ヲ適用スルハ非常ニ困難ナルノミナラス、之ヲ適用スルトキハ種々ノ原因ヨリ利害相償ハサル不良ノ結果ヲ生セサルヲ得ス、故ニ原動力ヲ用キサル工場ニ對シテハ二十人以上ノ職工

ヲ使用スルモノニ之ヲ適用スルヲ至當トス云々ト謂フニ在リタリ(日本の經濟、五〇)此ノ說ハ日本工業協會カ、十人ヲ以テ最低限ト爲ストキハ、動モスレハ家内工業ト抵触シ、從來簡易經濟的ニ發達シタル家内工業ヲ阻害スル憂アリ、故ニ二十人以上ト改メ可及的家内工業以上ノ工場ヲ以テ本法取締ノ範圍ヲ定ムルヲ要スト答申シタルト理由ノ一部及結論ニ於テ一致スルモノナリ。然レトモ

(一)二十人未滿ノ工場ト雖家庭的工業ノ範圍ヲ脱シテ工場組織ヲ有スルモノアルノミナラス、十人以上ノ工場ニ在リテハ既ニ副業ノ性質ヲ脱シテ專業トシテ經營スルモノ多シ

(二)二十人未滿ノ小工場ニハ規律ナク節制ナキモノ多ク、或ハ無制限ニ職工ヲ使役シ、職工疲勞シテ業務ヲ執ルニ堪ヘサルニ及ンテ、或ハ之ヲ鞭撻シ、或ハ之ヲ拘禁シ、其ノ疾病用ニ堪ヘサルニ至リテ之ヲ放逐スル等、保安警察ノ注意ヲ要スルモノ多シ

(三)殊ニ我國ニ最モ多數ヲ占ムル織物工場ノ如キハ同業者間ノ競争激甚ナル爲、不知不識ノ間ニ不當又ハ不法ニ職工ヲ僱使スルニ至ルコトアリ



以上ノ事實ハ、法律適用ノ範圍ヲ二十人以上ニ限ルニ至ラサリシ根據ナリシナリ(左表參照)

適用範圍ニ關スル工場及職工比較表

工場數	職工總數	十六歳未満職工數
十人以上	六九四、一七一	
十五人以上	一〇、〇三四	
二十人以上	七、二二〇	
	男 二〇四、四一三	男 一八、五六七
	女 四二四、七八七	女 九六、八五四
	計 六二九、二〇〇	計 四四三、三五四
	男 一八、九三七	男 一六、二二六
	女 四〇〇、七〇七	女 九一、八八一
	計 五八二、六四四	計 四一六、九三三

尙又十人以下ノ工場ハ原動力ヲ使用スルノ理由ノミニ依リ工場法ノ全部ヲ適用スルハ、適以テ家庭的手工業ヨリ半工場的用機工業ニ推移シツアル我工業發達ノ趨勢ヲ阻止スルモノナルヲ以テ、此ノ種ノ工場ニ對シテハ單ニ原動力ヨリ生スル危害ノ取締ヲ爲スニ止メ、職工ノ備使其ノ他ノ制限ハ一切之ヲ適用セサルコ

トトスヘシトノ意見アリ、此說ハ生産調査會等ヨリ提出セラレ、第二十七議會提出法案ハ此ノ趣意ヲ以テ修正セラレタリ、此ノ點ニ付テハ左表ヲ參照スヘシ。

同上原動機ノ有無ニ關スル比較表

工場總數	十人以上	三十人以上
原動力ヲ有スルモノ	一六、八〇二	一五、四二五
原動力ナキモノ	二、四三二	六、七二三
計	一四、三七〇	八、七〇三
十人以上	一、一七九	

法律適用ノ範圍ハ以上陳フルカ如キ經過ト研究トヲ經テ議會ニ提出セラルルニ至リタリ、然ルニ衆議院ハ十人ヲ十五人ニ修正シタリ、此ノ修正ニ關シテハ何等理由トシテ公然論議セラレタルモノナシト雖、余輩ノ付度スル所ヲ以テスレハ大凡左ノ諸點ニ歸スルモノノ如シ。

一 十人内外ノ工場ハ未タ準家庭工業ノ域ヲ脱セサルモノ甚タ多シ、之ニ本法ヲ適用スルトキハ實施上少ナカラサル困難ヲ生スヘク、又最初ノ立法トシテ是迄取締ル必要ヲ認め難シ。

一 十人内外ノ工場ノ大多數ハ農家ノ副業トシテ經營セラルルモノ甚タ多シ。



之ニ對シ本法ヲ適用セハ爲ニ多數小民ノ副業ノ發達普及ヲ妨ケ、延イテ小民ノ生活上ニ思ハサル結果ヲ生スルカ如キ虞ナシトセス。

一本法案ノ内容ヲ見ルニ就業時間、夜間勞働其ノ他ノ制限ノ如キハ豫定主義ヲ取レルモノ多キヲ以テ、本法ノ適用ヲ受クル大工場ハ當分現狀ノ儘操業シ得ル爲格別苦痛ヲ感ゼス、換言スレハ大工場ハ恰モ法ノ適用外ニ立ツト同一ナレハ十五人以下ノ小工場モ亦當分適用ヲ除外スルヲ妥當ナリトス。

一加之十五人以下ノ小工場ニ本法ヲ適用スルコトハ實施上少カラサル困難ヲ生シ、延イテ法律ノ威信ヲ損スルカ如キ不結果ヲ來スコトナキヲ保セス、左レハ實施上ノ周密ヲ期スル上ニ於テモ十五人ヲ相當ト爲スヘク、又十五人トナレハ自然專業のト爲リ、工場組織ヲ完備セル工場ニ適用スルコトトナラン。

之ヲ要スルニ、副業的又ハ家庭的工場多キ我國ノ現狀ニ照シ、又中小民ノ副業ノ普及發展ヲ圖リ以テ社會ノ健全ナル發達ヲ期スルコトノ特ニ急要ナル今日ノ時勢ニ鑑ミ、更ニ又實施上ノ關係ニ鑑ミ、適用ノ程度ヲ十五人以上ニ縮ムルヲ得策ナリト信ス。而シテ十五人以下ト雖危險又ハ衛生上有害ナル工場並原動力ニ就テ

ハ別ニ取締ノ途アルヲ以テ、此程度ニ於テ工場ノ取締ヲ爲スハ最初ノ立法トシテハ最モ適切ナルモノナリ。

今左ニ工場法ノ明文ニ依リ其ノ適用範圍ニ付少シク詳細ニ述フル所アルヘシ。  
(工場法第一條及第二十四條)

(甲) 常時十五人以上ノ職工ヲ使用スル工場

常時十五人以上云々ノ意義ハ一見明瞭ナルカ如キモ具體的ノ適用ニ關シテハ種々異說ヲ立テ得ル場合アルヘシ、茲ニハ假リニ現時余輩ノ想定スル所ノモノヲ記述シテ參考ニ供スヘシ。

常時十五人云々ハ平常原則トシテ十五人以上ヲ備使スルノ謂ナリ、即チ一箇年ヲ通シテ作業ヲ爲スモノニ在リテハ一箇年、又或季節ニノミ作業ヲ爲スモノニ在リテハ其ノ季節ノ間常ニ日々十五人以上ノ職工ヲ使用スルノ謂ナリ。固ヨリ茲ニ謂フ十五人ノ使用トハ同時ニ使用スルコトヲ謂フモノニシテ例ヘハ午前七人、午後八人ヲ使用スル者ハ加ヘテ十五人トナルモ本條ノ所謂十五人ニ非サルナリ。此ノ如ク通常ノ作業日ニ十五人以上ヲ使用スルコトヲ原則ト爲スモノニ適用ス



ル意味ニシテ各日各時ニ於ケル現實ノ就業職工數ニ依リテ本法適用ノ有無ヲ決スルノ趣旨ニ非スト思考ス、例セハ作業上平素既ニ十五人以上ヲ僱使スルモノタルニ於テハ病氣其ノ他ノ事由ニ依リ或日ニ於テ現實ノ就業者ハ僅ニ二人ニ過キスト雖其ノ工場ハ其ノ日ニ於テモ猶本法ノ適用ヲ受ケツ、アルモノニ外ナラス又平常原則トシテ七人ヲ使用スルモノカ益暮正月鎮守ノ祭等ノ前數日間特ニ繁忙ヲ極ムル爲ニ三十人ヲ使用スルコトアリトスルモ此ノ工場ハ本法ノ適用ヲ受クルモノニ非サルナリ、之ヲ要スルニ常時十五人以上ヲ使用スルヤ否ヤヲ各工場ニ付具體的ニ定メントセハ工業主ノ意思設備ノ大小機械ノ數其ノ他從來ノ狀況等ヲ參酌シテ之ヲ判定スルノ外ナシト雖法律ノ精神ハ平素引續キ通常ノ作業狀態トシテ十五人以上ヲ使用スルト謂フ意味ニ外ナラスト思考ス。

農商務省工務局ノ調査明治四十四年末現在ニ依レハ常時職工十五人以上使用スル工場ハ全國ヲ通シテ一萬〇五百十五箇所ナリ、尙其ノ府縣別及業務別數ニ付テハ附録工場數調査表第二表甲及第三表ニ之ヲ掲ケタリ。

(乙) 事業ノ性質危險ナルカ又ハ衛生上有害ノ虞アル工場

例ヘハ毒性、劇性、發火性ノ物品ヲ取扱フ工場又ハ骨角、襪、綿麻等ノ粉塵若ハ毒性瓦斯ヲ發散スルカ如キ工場ヲ謂フ。此等ノ工場ニ於テハ管ニ場内ノ職工ニ對シ有害ナルノミナラス外部ニ對シテモ亦危害ヲ及ホスノ虞アルヲ以テ、縱令十五人未滿ノ職工ヲ使用スルモノト雖原則トシテ本法ヲ適用スルヲ至當トス、

今工場法第一條第二號ニ該當スルヤ否ヤニ付研究セラルヘキ工場ノ種類ヲ試ニ列舉スレハ概ネ左ノ如キモノナランカ

燐寸頭藥調合塗付乾燥工場、漂白工場、金屬品工場、窯業工場、發火物工場、製油製蠟工場、脂肪酸工場、製藥工場、防水布、擬革、護膜製品工場、染料、塗料、顏料工場、人造肥料工場、瓦斯工場、コロヂウム、セルロイド、炭化石灰工場、烟草工場、剝製品工場、獸皮、獸骨取扱工場、玉石、牙骨、介甲及角製品工場、發電變壓配電工場、刷毛、刷子工場、鍍金工場、電解工場、硝子鏡工場、硝子腐蝕砂吹工場、金屬精煉工場、打綿工場、襪、獸毛、紙屑、綿類ノ撰別工場、石灰セメント工場、

然レトモ職工十五人以下ノ工場ハ勿論十五人以上ノ工場ト雖事業ノ性質ヨリ



スルモ又集團トシテノ危害モ最少ク且全國ニ於ケル工場數少クシテ之ヲ除外スルモ他ニ何等影響ヲ及ホササルカ如キモノハ總テ本法適用ノ範圍外ニ立ツコトト爲ルヘキカ今工場法第一條第二項ノ除外例ニ該當スルヤ否ヤニ付研究スヘキ工場ヲ例示スレハ大凡左ノ如キモノナランカ。

(一)原則トシテ五人以下ノ工場尤モ左記ノ如キ工場ハ五人以下ト雖除外スヘキモノナルヤ疑ハシキ部類ニ屬ス

剝製工場、煙火、導火線、硝化綿工場、燐製造工場、揮發油ヲ製造又ハ使用スル工場、硝子腐蝕砂吹工場、玉石牙骨介甲及角研磨工場、石灰製造工場、

(二)常時十五人以上ノ職工ヲ僱使スル工場ト雖モ大凡左記ノ如キモノハ除外セラルル場合アルヘキ乎ト考フ尤モ職工ハ何レモ一定數未滿タルヘキカ

小賣商品ヲ其ノ商店内ニ於テ製造又ハ加工スル如キ輕易ナル工業例セバ精穀、菓子製造、湯葉、麵類、豆腐調味料品製造、籠、簾、傘、骨、柳行李、其ノ他竹、蔓、莖類ノ製品業、建具、指物、履物、家具類製造加工、靴、背囊、馬具等ノ皮革製品業、筆類、刷毛、刷毛、楊子ノ毛植、被服其ノ他布帛類裁縫及組物製造、鼻緒、雪駄、笠、爪革、小間物、

袋物類製造、織物紋紙、形紙、紙函類製造、屏風、扇子、團扇、提灯、傘製造ノ如キモノ之レナリ。

又左記工場ノ如キモノモ右ニ準スヘキヤ否ヤニ付研究ノ價值アルモノナルヘシ、清酒、酢、味噌、醬油製造、製茶、寒天製造、經木及麥稈眞田製造

職工十五人未滿ニシテ而カモ本法第一條第二號ニ該當スヘシト爲ス工場ハ明治四十四年農商務省工務局調査ニ依レハ全國ヲ通シテ一萬三千八百九十三箇所内職工五人以上十五人未滿ノモノ三千五百七十八箇所ニシテ職工五人未滿ノモノハ一万三千十五箇所ナリトス。尙又其ノ府縣別及業務別數ノ詳細ハ附録工場數調査表中第一表乙及第三表ニ之ヲ掲ケタリ。

(丙)原動力ヲ用ウル工場

第一條ニ該當セサルニ依リテ本法ノ適用ヲ受ケサル工場ト雖、苟モ原動力ヲ用ウルモノナルトキハ其ノ原動力機及之ニ依リテ運轉セララル機械ニ危險アルヲ以テ斯ル工場ヲ以テ全然本法ノ適用以外ニ放置スルノ不可ナルコトハ謂フ迄モナシ、故ニ其ノ危險ヲ豫防スルニ必要ナル程度ニ於テ主務大臣ハ本法ノ一部ヲ適



用シ得ヘキ旨ヲ定メテ本法制定ノ目的ヲ全フセシコトヲ努メタルナリ(第二十四條)但シ原動力ヲ用ウル工場ト雖左ノ如キモノハ之ヲ除外スルヤ否ヤニ付研究ヲ遂クヘキモノナラン

(一) 風車ヲ用ウルモノ

(二) 水車ノ小ナルモノヲ用ウルモノ

(三) 小ナル電氣モートルヲ用ウルモノ

明治四十四年末農商務省工務局ノ調査ニ依レハ常時十五人未満ノ職工ヲ使用シ而カモ危険又ハ衛生上有害ノ虞ナキ工場ニシテ原動力ヲ用ウル工場ハ全國ヲ通シテ二万三千百七十九箇所ナリ、之ヲ馬力數ニ依リテ分類スレハ左ノ如シ

五馬力以上ノモノ

五、六一八

五馬力未満ノモノ

一七、五六一

合計

二三、一七九

又之ヲ職工數ニ依リテ分類スレハ

十人以上十五人未満ノモノ

二、七一〇

五人以上十人未満ノモノ

三、九五六

五人未満ノモノ

一六、五三一

合計

二三、一七九

ナリ、尙原動力使用工場數ノ府縣別及業務別數並原動機ノ種類別及馬力別數ニ付テハ附録工場數調査表中第二表丙及第四表ニ之ヲ掲ケタリ。

以上(甲)(乙)(丙)ニ陳フル所ニ依リ本法ノ適用ヲ受ル工場ニ付大體ノ見込ヲ立テタリ、尙第一條第二項ニ依リ本法ノ適用ヲ除外サルヘキ工場乃チ附録別表ニ掲クル諸表ノ計數ヨリ削除スヘキモノ果シテ幾何ニ達スヘキヤ明確ナラサルモ、工場法ノ適用ヲ受クヘキ工場數ハ大約三萬數千ニ達スヘシ、但シ此ノ數ハ私立工場ノミニシテ官公立工場ハ一切此ノ計數中ニ含マレサルナリ、本節ヲ終ルニ蒞ミ官公立工場ト本法トノ關係ニ付テ一言スヘシ、元來工場法ノ規定ハ官公立ノ工場ニモ之ヲ適用スルヲ當然トスルヲ以テ之ニ關スル規定第二十五條ヲ設ケタリ。而シテ官立工場ニ在リテハ所轄官廳ニ於テ本法施行上ニ付監督官廳ノ職務ヲ行フコトトセリ。但シ此ノ場合ニ於テ工場管理人ニ關スル規定及罰則ヲ除外セルハ蓋シ



本規定ノ性質上當然ナリト謂フヘシ、元來工場管理人ノ制度ハ法人ニ對スル刑責ヲ事實支配權ヲ有スル自然人ニ負ハシムルコトガ基礎ノ理由ニシテ、自然人ノ經營スル工場ニ於テ之ヲ認メタルハ偶々法人トノ權衡ヲ顧慮シタルニ在リ、官公立工場ニ對シテハ罰則ノ適用ナシ、從ツテ刑法問題ニ關聯セル工場管理人規定ノ不要ナルハ言フ須キス。

### 第三節 就業制限

#### 第一項 保護職工ノ範圍

保護職工ノ範圍ハ年齡並男女別及健康狀態ニ依リテ定ム、最後ノ公表案ニ依レハ女工ハ其ノ年齡ノ如何ヲ問ハス總テ之ヲ保護職工トシ、男工ハ十二歳未滿ニ對シ工場勞働ヲ禁止シ、十二歳以上十六歳未滿ノ者ヲ保護職工トセリ。此ノ標準モ我工場法制定ノ經過ニ於テ多少ノ動搖ヲ免レサリキ、即チ明治二十年案ニ於テハ男女ノ職工ヲ十歳以上十四歳未滿十四歳以上十七歳未滿及未丁年職工ノ三階級ニ區別シ、十歳未滿ヲ以テ禁止年齡トシ、丁年未滿ノ者ノ就業ヲ制限シ、女工ニ付テ

ハ十四歳未滿ノ者ト同シク徹夜業ヲ禁止シタル外、其ノ他ノ點ニ付テハ格別ノ保護ヲ與ヘサルコトトシタリ。而シテ三十一年案ハ大體ニ於テ此ノ主義ニ依リ、三十五年案ニ於テ始メテ、女工ハ其ノ年齡ノ如何ヲ問ハス總テノ點ニ於テ幼少年男工ト同一視スルノ主義ヲ採リタルモ、徹夜業ニ關スル制限ハ三十二年以降ノ案ハ之ヲ撤廢セリ。其ノ他健康狀態ノ如何ニ依リテ保護ノ制ヲ開キタルハ四十二年案ニ於テ始メテ之ヲ見ル。

第一年齡 工場勞働禁止年齡ヲ十二歳未滿ト爲スコトニ付テハ當業者ノ側ヨリ格別ノ反對ヲ見サリシト雖、社會政策學會其他五六ノ商業會議所及教育者ノ多數ハ之ヲ十三歳ト爲スヘキ意見ヲ發表セリ。其ノ理由トスル所ハ我國現行小學校令ニ依レハ十二歳ニシテ小學校ヲ卒フル者ハ殆ントナク、十二歳乃至十四歳ノ者多數ヲ占ム。故ニ工場法ノ規定ハ宜シク小學校令ノ精神ヲ參酌シ十三歳未滿ヲ以テ禁止年齡ト爲スヘシト謂フニ在リ。此ハ最モ穩健ナル意見ニシテ理論上異議ヲ挾ムノ餘地ナシト雖、我國ノ工業家ハ從來職工雇入ニ關シ何等ノ制限ヲ受ケサリシヲ以テ、十二歳未滿ノ職工ヲ僱使スル者少カラス、而シテ其ノ之ヲ僱使ス



ル工業ノ種類ハ通常營業上ノ競争甚タシク寧ロ利得少キ部類ニ屬スルヲ以テ一朝ニテ之ヲ全禁センカ、業務上ノ影響大ナルヘキヲ顧慮シタルト、又職工ノ側ニ在リテモ父母又ハ兄弟タル者ハ幼少者ヲ伴フニ非サレハ工場ニ通勤スルヲ得サルカ如キ家庭ノ事情アル者尠カラサルヲ想ヒ、暫ク此ノ寛大ナル規定ヲ以テ忍ンテ過渡ノ時代ヲ經過セント期シタルモノナリ、參考トシテ年齢別職工數ニ關スル二表ヲ掲ク

第一表

十人以上ノ工場ニ於ケル職工數及年齢調(四十二年末調)

工場數	直 接 作 業		從 事 者		計
	男	女	男	女	
二十歳以上	一〇,七〇〇	一八,八三六	一五,一四五	七,七七七	六三,三〇七
十六歳以上 二十歳未満	三,二〇〇	三,五〇〇	二,一八八	一,〇三三	一〇,九二一
十四歳以上 十六歳未満	五,五三三	三,三六九	〇,九二一	五,三三四	一〇,八五七
十二歳以上 十四歳未満	一,〇八二	一,〇八二	〇,九二一	五,三三四	六,四〇七
十人以上ノ工場	一,〇八二	一,〇八二	〇,九二一	五,三三四	六,四〇七
計	一六,九〇〇	二二,四一八	一六,一〇六	一三,一四四	五二,五六八
百分率	三二,〇	四二,〇	三〇,〇	二四,〇	一〇〇,〇

第二表

十二歳前後ヲ多數ニ使用スル工場及職工ノ數(十人以上ノ工場)

業 別	職工總數	十二歳未満總數ニ對ス		十四歳未満(同上)	
		十二歳以上	十四歳未満	十二歳以上	十四歳未満
橋 寸	一六,七四九	一,〇八二	六,五〇	一,九一七	二,九九九
硝 子	六,六三五	二二〇	三,三〇	八五五	一,〇七五
製 糸	一八四,三九七	三一五	一,一七	八,八七六	九,一九一
紡 績	一〇二,九八六	一,六六五	一,一六	八,一三八	九,八〇三
織 物	一二七,四四一	八九〇	〇,七	七,八四五	八,七三五
印刷製本	一八,五〇六	一〇〇	〇,五	一,二七七	一,五七七
計	四五六,七四四	四,二七二	一四,一四三	二八,九〇八	三三,一八〇
備考	十二歳トアルヲ十三歳ト修正スルト假定シ十二歳未満ノ人員ヲ對比スレハ左ノ如シ	四,二七二	一五,八三五	三三,一八〇	三三,一八〇
	十三歳未満ノ職工數ハ十二歳以上十四歳未満ノ職工人員ノ四割ニ十二歳未満ノ者ヲ加ヘテ算出セリ	一五,八三五			

歐米各國ノ工場法ニ於テモ職工ノ最低年齢ヲ定メ、此ノ年齢以下ノ者ニ對シテハ工場労働ヲ禁止スルヲ常トス、是國民教育及國民衛生上ノ必要ニ基クモノニ外ナラス、彼ノ義務教育制度ヲ採用セル諸國ニ於テ學齡ノ最終年齢ヲ以テ職工ノ最低年齢ト爲セルカ如キハ國民教育普及ノ目的ヲ達スル爲當然ノ措置ナリト謂フヘシ又幼者ハ衛生上最モ細心ノ注意ヲ要スル者ニシテ未タ十分發育セサル時ニ



於テ工場生活ヲ爲サシメンカ、其ノ勞働條件ハ莫大ナリトスルモ到底健全ナル發達ヲ爲スコト能ハサルヘシ。而シテ斯ル兒童ニシテ益、其ノ數ヲ増加センカ將來ニ於ケル勞力ノ供給ヲ減少シ、國民ノ生産力ヲ減殺スルノミナラス、延イテ國民全體ノ健康ヲ害スルニ至リ、遂ニ國家ノ存在ヲ殆フスルニ至ル虞アルヘシ。現ニ各國ニ於ケル工場法制定ノ由來ヲ見ルニ、之カ制定ニ關スル強力ナル主張者ノ一部ハ、陸海軍當局ニ在ルノ事實ヲ以テスルモ其ノ一斑ヲ知ルニ足ルヘシ。余ハ茲ニ各國工場法ニ就キ職工ノ最低年齢ヲ抄録セン。

英吉利	十二歲
獨逸	十三歲
佛蘭西	十三歲
和蘭	十二歲
白耳義	十二歲
瑞西	十四歲
奧太利	十四歲
奧太利	十二歲

奧太利 第一種工業

十二歲

匈牙利	十二歲
西班牙	十歲
瑞典	十二歲
諾威	十二歲
露西亞	十二歲
丁抹	十二歲
伊太利	十二歲
新西蘭	十四歲
印度	九歲
北米合衆國紐育州	十四歲
北米合衆國ハ各州ニ依リテ法律ヲ異ニスルモ、大多數ハ最低年齢ヲ十四歲ト定メタリ。	

本邦工場法ニ於テハ前述ノ理由ニ基キ最低年齢ヲ十二歲未滿ト規定セリ、然ルニ十三歲論者中往々十二歲主義ハ小學校令ノ規定ト抵觸スル立法ナリト非難ス



ル者ナキニ非ザリシモ、工場法ハ十二歳以上ノ者ニ對シテハ工場労働ノ制限ヲ加ヘサルニ止マルヲ以テ、必シモ義務教育ノ精神ト背馳セサルノミナラス、小學校令第三十五條ニハ、尋常小學校ノ教科ヲ修了セサル學齡兒童ヲ雇備スル者ハ其ノ雇備ニ依リ兒童ノ就學ヲ妨クルコトヲ得ス。ト規定セルヲ以テ、工場労働ノ自由ヲ認メタルノ一事ハ必シモ學齡兒童ノ就學ヲ阻止スルモノニ非サルナリ。

上述ノ職工最低年齢タル十二歳ヨリ十五歳未滿迄ノ年齢ヲ以テ保護年齢トセリ、明治四十三年十月本法案ニ付生産調査會ニ諮問シタルトキ男工保護年齢ノ最高限ヲ十六歳トセリ、此ノ點ニ關シテハ極メテ少數ヲ除ク外異見ヲ發表シタルモノナシ。之レ當ニ然ルヘキ所ニシテ本來本邦幼少者ノ身體發育ノ状態ヲ見ルニ、男女共ニ滿十二歳ニシテ漸ク其ノ體重ハ成年者ノ半ハ即チ七貫餘(身長四尺二寸)ニ達シ、之ヨリ十六歳ニ至ル間ニ於テ急速ノ發育ヲ爲シ、體重十一貫餘(身長男子ハ五尺一分、女子ハ四尺八九寸)ニ達シ爾後發育稍緩徐トナリテ十八歳ニ至リ、男子ハ十三貫五百目(身長五尺二寸)、女子ハ十二貫六百目(身長五尺)ヲ算シ成年者ト大差ナキニ至ル。故ニ叙上ノ發育状態ニ照セハ職工保護ノ年齢界限ヲ十八歳以上ト爲スヲ至當ト認ムルモ、工業ノ現況ニ鑑ミ之ニ

亞ク程度ノ十六歳ヲ以テ界限ト定メタルモノナリ。

此ノ點ニ付テハ左表ヲ一覽セハ自ラ明カナルヘシ

本邦幼少年者身體發育表

男				女			
年	齡	體重	身長	年	齡	體重	身長
七	年	四、六六七	三、五六	七	年	四、四八〇	三、五三
八	年	五、〇九三	三、六九	八	年	四、九〇七	三、六六
九	年	五、五七三	三、八八	九	年	五、三六〇	三、八一
十	年	六、一〇七	四、〇一	十	年	五、八六七	三、九六
十	年	六、六四〇	四、一五	十	年	六、二七	四、一一
十	年	七、一七三	四、二九	十	年	七、一七	四、二八
十	年	七、七〇七	四、四三	十	年	七、七〇	四、四〇
十	年	八、二四〇	四、五七	十	年	八、二八	四、五七
十	年	八、七七三	四、七一	十	年	八、八二	四、六七
十	年	九、三〇七	四、八五	十	年	九、三六	四、七八
十	年	九、八四〇	四、九九	十	年	九、九〇	四、八八
十	年	一〇、三七三	五、一三	十	年	一〇、四六	五、〇〇
十	年	一〇、九〇七	五、二七	十	年	一〇、五五	五、一七
十	年	一一、四四〇	五、四一	十	年	一一、〇四	五、二八
十	年	一二、〇三	五、五五	十	年	一二、一三	五、四〇
十	年	一二、五六七	五、六九	十	年	一二、二二	五、五二
十	年	一三、一〇〇	五、八三	十	年	一二、三一	五、六四
十	年	一三、六三三	五、九七	十	年	一二、四〇	五、七六
十	年	一四、一六七	六、一一	十	年	一二、四九	五、八八
十	年	一四、七〇〇	六、二五	十	年	一二、五八	六、〇〇
十	年	一五、二三三	六、三九	十	年	一二、六七	六、一二
十	年	一六、〇〇〇	六、五三	十	年	一二、七六	六、二四
十	年	一六、五三三	六、六七	十	年	一二、八五	六、三六
十	年	一七、〇六七	六、八一	十	年	一二、九四	六、四八
十	年	一七、六〇〇	六、九五	十	年	一三、〇三	六、六〇
十	年	一八、一三三	六、九〇	十	年	一三、一二	六、七二
十	年	一八、六六七	七、〇四	十	年	一三、二一	六、八四
十	年	一九、二〇〇	七、一八	十	年	一三、三〇	六、九六
十	年	一九、七三三	七、三二	十	年	一三、三九	七、〇八
十	年	二〇、二六七	七、四六	十	年	一三、四八	七、二〇
十	年	二〇、八〇〇	七、六〇	十	年	一三、五七	七、三二
十	年	二一、三三三	七、七四	十	年	一三、六六	七、四四
十	年	二一、八六七	七、八八	十	年	一三、七五	七、五六
十	年	二二、四〇〇	八、〇二	十	年	一三、八四	七、六八
十	年	二二、九三三	八、一六	十	年	一三、九三	七、八〇
十	年	二三、四六七	八、三〇	十	年	一四、〇二	七、九二
十	年	二四、〇〇〇	八、四四	十	年	一四、一一	八、〇四
十	年	二四、五三三	八、五八	十	年	一四、二〇	八、一六
十	年	二五、〇六七	八、七二	十	年	一四、二九	八、二八
十	年	二五、六〇〇	八、八六	十	年	一四、三八	八、四〇
十	年	二六、一三三	九、〇〇	十	年	一四、四七	八、五二
十	年	二六、六六七	九、一四	十	年	一四、五六	八、六四
十	年	二七、二〇〇	九、二八	十	年	一四、六五	八、七六
十	年	二七、七三三	九、四二	十	年	一四、七四	八、八八
十	年	二八、二六七	九、五六	十	年	一四、八三	九、〇〇
十	年	二八、八〇〇	九、七〇	十	年	一四、九二	九、一二
十	年	二九、三三三	九、八四	十	年	一五、〇一	九、二四
十	年	二九、八六七	九、九八	十	年	一五、一〇	九、三六
十	年	三〇、四〇〇	一〇、一二	十	年	一五、一九	九、四八
十	年	三〇、九三三	一〇、二六	十	年	一五、二八	九、六〇
十	年	三一、四六七	一〇、四〇	十	年	一五、三七	九、七二
十	年	三一、〇〇〇	一〇、五四	十	年	一五、四六	九、八四
十	年	三二、〇三三	一〇、六八	十	年	一五、五五	九、九六
十	年	三二、五六七	一〇、八二	十	年	一五、六四	一〇、〇八
十	年	三三、一〇〇	一〇、九六	十	年	一五、七三	一〇、二〇
十	年	三三、六三三	一一、一〇	十	年	一五、八二	一〇、三二
十	年	三四、一六七	一一、二四	十	年	一五、九一	一〇、四四
十	年	三四、七〇〇	一一、三八	十	年	一六、〇〇	一〇、五六
十	年	三五、二三三	一一、四二	十	年	一六、〇九	一〇、六八
十	年	三五、七六七	一一、五六	十	年	一六、一八	一〇、八〇
十	年	三六、三〇〇	一一、七〇	十	年	一六、二七	一〇、九二
十	年	三六、八三三	一一、八四	十	年	一六、三六	一一、〇四
十	年	三七、三六七	一二、〇〇	十	年	一六、四五	一一、一六
十	年	三七、九〇〇	一二、一四	十	年	一六、五四	一一、二八
十	年	三八、四三三	一二、二八	十	年	一六、六三	一一、四〇
十	年	三八、九六七	一二、四二	十	年	一六、七二	一一、五二
十	年	三九、五〇〇	一二、五六	十	年	一六、八一	一一、六四
十	年	四〇、〇三三	一二、七〇	十	年	一六、九〇	一一、七六
十	年	四〇、五六七	一二、八四	十	年	一七、〇〇	一一、八八
十	年	四一、一〇〇	一二、九八	十	年	一七、〇九	一二、〇〇
十	年	四一、六三三	一三、一二	十	年	一七、一八	一二、一二
十	年	四二、一六七	一三、二六	十	年	一七、二七	一二、二四
十	年	四二、七〇〇	一三、四〇	十	年	一七、三六	一二、三六
十	年	四三、二三三	一三、五四	十	年	一七、四五	一二、四八
十	年	四三、七六七	一三、六八	十	年	一七、五四	一二、六〇
十	年	四四、三〇〇	一三、八二	十	年	一七、六三	一二、七二
十	年	四四、八三三	一三、九六	十	年	一七、七二	一二、八四
十	年	四五、三六七	一四、一〇	十	年	一七、八一	一二、九六
十	年	四五、九〇〇	一四、二四	十	年	一七、九〇	一三、〇八
十	年	四六、四三三	一四、三八	十	年	一七、九九	一三、二〇
十	年	四六、九六七	一四、五二	十	年	一八、〇八	一三、三二
十	年	四七、五〇〇	一四、六六	十	年	一八、一七	一三、四四
十	年	四八、〇三三	一四、八〇	十	年	一八、二六	一三、五六
十	年	四八、五六七	一四、九四	十	年	一八、三五	一三、六八
十	年	四九、一〇〇	一五、〇八	十	年	一八、四四	一三、八〇
十	年	四九、六三三	一五、二二	十	年	一八、五三	一三、九二
十	年	五〇、一六七	一五、三六	十	年	一八、六二	一四、〇四
十	年	五〇、七〇〇	一五、五〇	十	年	一八、七一	一四、一六
十	年	五〇、二三三	一五、六四	十	年	一八、八〇	一四、二八
十	年	五〇、七六七	一五、七八	十	年	一八、八九	一四、四〇
十	年	五〇、八〇〇	一五、九二	十	年	一八、九八	一四、五二
十	年	五〇、八三三	一六、〇六	十	年	一九、〇七	一四、六四
十	年	五〇、八六七	一六、二〇	十	年	一九、一六	一四、七六
十	年	五〇、九〇〇	一六、三四	十	年	一九、二五	一四、八八
十	年	五〇、九三三	一六、四八	十	年	一九、三四	一五、〇〇
十	年	五〇、九六七	一六、六二	十	年	一九、四三	一五、一二
十	年	五〇、一〇〇	一六、七六	十	年	一九、五二	一五、二四
十	年	五〇、一三三	一六、九〇	十	年	一九、六一	一五、三六
十	年	五〇、一六七	一七、〇四	十	年	一九、七〇	一五、四八
十	年	五〇、二〇〇	一七、一八	十	年	一九、七九	一五、六〇
十	年	五〇、二三三	一七、三二	十	年	一九、八八	一五、七二
十	年	五〇、二六七	一七、四六	十	年	一九、九七	一五、八四
十	年	五〇、三〇〇	一七、六〇	十	年	二〇、〇六	一五、九六
十	年	五〇、三三三	一七、七四	十	年	二〇、一五	一六、〇八
十	年	五〇、三六七	一七、八八	十	年	二〇、二四	一六、二〇
十	年	五〇、四〇〇	一八、〇二	十	年	二〇、三三	一六、三二
十	年	五〇、四三三	一八、一六	十	年	二〇、四二	一六、四四
十	年	五〇、四六七	一八、三〇	十	年	二〇、五一	一六、五六
十	年	五〇、五〇〇	一八、四四	十	年	二〇、六〇	一六、六八
十	年	五〇、五三三	一八、五八	十	年	二〇、六九	一六、八〇
十	年	五〇、五六七	一八、七二	十	年	二〇、七八	一六、九二
十	年	五〇、六〇〇	一八、八六	十	年	二〇、八七	一七、〇四
十	年	五〇、六三三	一八、一〇	十	年	二〇、九六	一七、一六
十	年	五〇、六六七	一八、二四	十	年	二〇、一〇五	一七、二八
十	年	五〇、七〇〇	一八、三八	十	年	二〇、一四四	一七、四〇
十	年	五〇、七三三	一八、五二	十	年	二〇、一八三	一七、五二
十	年	五〇、七六七	一八、七六	十	年	二〇、二二二	一七、六四
十	年	五〇、八〇〇	一九、〇〇	十	年	二〇、二六一	一七、七六
十	年	五〇、八三三	一九、二四	十	年	二〇、二六〇	一七、八八
十	年	五〇、八六七	一九、四八	十	年	二〇、三〇〇	一八、〇〇
十	年	五〇、九〇〇	一九、七二	十	年	二〇、三三九	一八、一二
十	年	五〇、九三三	一九、九六	十	年	二〇、三七八	一八、二四
十	年	五〇、九六七	二〇、二〇	十	年	二〇、四二七	一八、三六
十	年	五〇、一〇〇	二〇、四四	十	年	二〇、四六六	一八、四八
十	年	五〇、一三三	二〇、六八	十	年	二〇、五〇五	一八、六〇
十	年	五〇、一六七	二〇、九二	十	年	二〇、五四四	一八、七二
十	年	五〇、二〇〇	二一、一六	十	年	二〇、五八三	一八、八四
十	年	五〇、二三三	二一、四〇	十	年	二〇、六二二	一八、九六
十	年	五〇、二六七	二一、六四	十	年	二〇、六六〇	一九、〇八
十	年	五〇、三〇〇	二一、八八	十	年	二〇、七〇〇	一九、二〇
十	年	五〇、三三三	二二、一二	十	年	二〇、七三九	一九、三二
十	年	五〇、三六七	二二、三六	十	年	二〇、七八八	一九、四四
十	年	五〇、四〇〇	二二、六〇	十	年	二〇、八二七	一九、五六
十	年	五〇、四三三	二二、八四	十	年	二〇、八六六	一九、六八
十	年	五〇、四六七	二三、〇八	十	年	二〇、九〇五	一九、八〇
十	年	五〇、五〇〇	二三、三二	十	年	二〇、九四四	一九、九二
十	年	五〇、五三三	二三、五六	十	年	二〇、九八三	二〇、〇四
十	年	五〇、五六七	二三、八〇	十	年	二一、〇二二	二〇、一六
十	年	五〇、六〇〇	二四、〇四	十	年	二一、〇六〇	二〇、二八
十	年	五〇、六三三	二四、二八	十	年	二一、〇九九	二〇、四〇
十	年	五〇、六六七	二四、五二	十	年	二一、一三八	二〇、五二
十	年	五〇、七〇〇	二四、七六	十	年	二一、二二七	二〇、六四



十八年	一三、五五〇	五、二九	二、六四	十八年	三、五九〇	四、九六	二、六〇
十九年	一三、九七〇	五、三三	二、六六	十九年	三、七〇〇	四、九五	二、六三
二十年	一四、二四〇	五、三四	一、七三	二十年	三、八八〇	四、九六	二、六三
二十一年	一四、四三〇	五、三四	二、七三	二十一年	三、八八〇	四、九五	二、六三

(備考) 本表ハ全國小學校、中學校、高等女學校、男女師範學校、男女實業學校生徒ノ明治四十、四十一年兩年度體格検査成績ヲ平均シタルモノナリ(日本帝國文部省年報第三十五第三十六年報ニ據ル)

尙又精神機能ノ發達モ身體ノ發育ニ並行スルモノニシテ、十六歳未満ノ者ニ在リテハ未ダ自保ノ概念完カラス、故ニ危險物又ハ有害料品ノ取扱等ニ付テモ亦之ヲ保護スル必要アル所以ナリ。

四十三年案カ十六歳ヲ以テ最高限ト爲シタル理由以上述フルカ如シ。然ルニ生産調査會ニ於テハ、之ヲ十五歳ニ修正スヘキモノナリトノ意見ヲ答申セリ。其ノ理由トスル所ハ我國ニ於テ滿十五歳ト云ヘハ即數ヘ年ニテ十七歳ニ達スル者尠カラス、男子十七歳ニ達スレハ古來ノ慣習ニ依リ所謂一人前ト見ルヘキモノナレハ、必スシモ之ヲ十二歳近クノ者ト同一視スル必要ナシト謂フニ在リタリ。惟

フニ幼少年職工保護ノ程度ヲ二ニ區別シ、幼年工及少年者ノ別ヲ設ケサル以上ハ此ノ意見モ亦一應ノ理由アルノミナラス、最近ノ統計ニ依レハ十五歳以上十六歳未満ノ男工ノ數ハ約七八千人ニ過キス、而シテ男工ノ筋力又ハ技能ヲ要スル工業ニ在リテハ、法律ノ制限ヲ俟タスシテ從來十六歳以上又ハ十七歳以上ヲ最低年齢ト定ムルヲ例トセルヲ以テ、此ノ修正ヲ採用スルモ實際上ニ於テハ大ナル影響ヲ生スヘキモノニ非ストシ、議會提出ノ際ニハ此ノ趣旨ヲ以テ修正シ議會亦之ニ對シテ何等論議スル所ナカリシナリ。

各國ノ立法例ヲ按スルニ保護ノ程度ニ依リテ職工ヲ數種ニ分類セリ、其ノ分類方法ニ大凡三種アリ、

第一 千八百九十年ノ伯林國際會議ノ決議ニ基ケル分類方法ニシテ全決議ハ十二歳ヲ以テ最低年齢トシテ職工ヲ五種ニ分類セリ。即チ

- (一) 十二歳以上十四歳未満ノ幼年工、之ニ對シテハ一日六時間以上ノ勞働ヲ禁シ又半時間ノ休憩時間ヲ與ヘ徹夜業日曜勞働ヲ禁シ且不健康ニシテ危險ナル業務ニ從事セシムルコトヲ得ストセリ



- (二) 二十四歳以上十六歳未満ノ少年工之ニ對シテハ一日十時間ヲ最高限トシ一時間半ノ休憩時間ヲ與ヘ、徹夜業日曜労働ヲ禁シ又不健康ニシテ危険ナル業務ニ從事スルコトヲ禁セリ
  - (三) 十六歳以上十八歳未満ノ少年工之ニ對シテハ不健康ニシテ危険ナル業務ニ從事スル場合ニハ特別ナル保護規定ヲ設クヘシトセリ
  - (四) 十六歳以上ノ女工之ニ對シテハ一時間十一時間ヲ最高限トシ一時間半ノ休憩時間ヲ與ヘ、徹夜業、日曜労働ヲ禁シ不健康ニシテ危険ナル業務ニ從事スルコトヲ禁シ、又分娩後四週間ハ絶対ニ労働セシムルコトヲ禁セリ
  - (五) 成年男工之ニ對シテハ特別保護ノ制ナシ
- 第二 職工ヲ幼年工、少年工、成年女工及成年男工ノ四種ニ分類スルモノ。
- 第三 職工ヲ分チテ幼年工、成年女工及成年男工ノ三種ト爲スモノナリ。多クノ場合ニ於テ幼年工者ニ付テハ男女ヲ區別セシテ同一保護ヲ加フルモ一定ノ年齢以上ノ者ニハ男女ヲ區別シテ保護ノ程度ヲ異ニセリ。
- 本邦工場法ハ第三種ノ分類法ヲ採リ、幼年工ト少年工トノ間ニ全ク區別ヲ設ケ

ス之ヲ幼年工ト爲シ、成年職工ヲ分チテ成年女工、成年男工ト爲シ、成年女工ニハ幼年工ト全一保護ヲ與フルコトト爲セルナリ。

第二種ノ分類法ヲ採用セル國ハ左ノ如シ、

國名	幼年工	少年工	成年女工	成年男工
英	至自	至自	十八歳以上	十八歳以上
佛	至自	至自	十八歳以上	十八歳以上
伊	至自	至自	十八歳以上	十八歳以上
丁	至自	至自	十八歳以上	十八歳以上
瑞	至自	至自	十八歳以上	十八歳以上
諾	至自	至自	十八歳以上	十八歳以上
露	至自	至自	十八歳以上	十八歳以上
西	至自	至自	十八歳以上	十八歳以上
匈	至自	至自	十八歳以上	十八歳以上
獨	至自	至自	十八歳以上	十八歳以上
瑞	至自	至自	十八歳以上	十八歳以上
牙	至自	至自	十八歳以上	十八歳以上
班	至自	至自	十八歳以上	十八歳以上
西	至自	至自	十八歳以上	十八歳以上
利	至自	至自	十八歳以上	十八歳以上
西	至自	至自	十八歳以上	十八歳以上
利	至自	至自	十八歳以上	十八歳以上
吉	至自	至自	十八歳以上	十八歳以上

第三種ノ分類法ヲ採用セルハ左ノ諸國ナリ、



和	白	日	蘭	義	太	本
自	自	自	女	第	第	第
十	十	十	十	二	二	二
六	六	六	六	六	六	六
歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲
以	以	以	以	以	以	以
上	上	上	上	上	上	上
十	十	十	十	十	十	十
六	六	六	六	六	六	六
歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲
以	以	以	以	以	以	以
上	上	上	上	上	上	上

第二性 男工ハ十五歳未満ノ者ヲ保護スルモ女子ニ付テハ十五歳未満ノ者ハ勿論年齢ノ如何ヲ問ハス總テ之ヲ幼少年ノ男工ニ準シテ之ヲ保護ス第三條第四條第七條第九條第十一條。此ノ主義ニ關シテハ少數者ノ異論ナキニ非ス其ノ要旨ハ田舎ニ於ケル日本ノ女子ハ都會ニ於ケル男子ニ比シテ纖弱ナリト謂フヲ得サルノミナラス勞働ニ對スル忍耐力ノ如キモ遙カニ男子ヲ凌クニ足ル者アルハ往々ニシテ見聞スル所ナリ故ニ女子ノ保護年齢ハ之ヲ二十歳未満トスルヲ以テ至當トスト謂フニ在リ。此ノ說ハ一應理由アルカ如シト雖女子ノ體質カ男子ニ比シテ強健ナリト謂フヲ得サルコトハ殆ント説明ヲ俟タサル所ニシテ抵抗力薄

弱ニシテ過勞ノ弊ニ陷ルノミナラス一般ニ成年男子ノ如ク意思強固ナラス外圍ノ事情ニ制セラレ又ハ各種ノ威力ニ動サレ自衛スルコト能ハサル場合多ク且女子固有ノ天職ニ基ク生理上ノ變態並母體ノ健康狀態カ其ノ子孫ニ及ホス影響等ヲ考慮シ又他方ニ於テ工場ニ通勤スル女工ハ自ラ家政ノ荒廢幼兒ノ疾病等ヲ顧ル能ハサルニ至リ其ノ弊ヤ遂ニ家族制度ノ動搖ヲ來タスニ至ルヘキヲ憂フルトキハ未來ニ於ケル國民ノ母ニシテ且主婦タルヘキ女子ヲ十五歳未満ノ男工ニ準シテ保護スルノ必要ハ自ラ明カナルヘシ。左レハ此ノ點ニ關シテハ格別ノ論議ナクシテ確定ヲ見ルニ至リタリ。之ヲ諸國ノ成例ニ照スモ成年男工ニ付テハ労働時間ノ制限夜業禁止等ノ特別保護ヲ設ケタルモノハ尠シト雖成年女工十六歳以上ノ國アリ又十八歳以上ノ國アリハ少年工十四歳以上十六歳未満又ハ十八歳未満ト全一ニ看做シ又幼年工ト少年工トニ區別ヲ設ケサル二三ノ國ニ在リテハ之ヲ幼少年工ト全一ニ看做シテ特別保護ヲ與ヘタリ。尤モ匈牙利西班牙瑞典挪威及露西亞等五六ノ國ニ於テハ婦女ノ保護ニ關シ何等特別規定ノ存スルヲ見ス尙詳細ノ説明ハ第六章ニ譲リ茲ニ之ヲ畧ス。



第三健康状態 健康ナル幼少年男工及女子ヲ保護スル以上ハ健康不良ナル職工ニ對シテ、或ハ工場労働ヲ禁止シ、又ハ之ヲ制限スヘキハ當然ナリ。而シテ病者殊ニ傳染性ノ疾患ヲ有スル職工ノ如キハ本人及工場ノ爲ニハ勿論公衆衛生ノ上ヨリモ之ヲ禁止スル必要アルコトハ言フ俟ス。其ノ他傳染性ニ非ストスルモ疾病ノ性質程度ニ應ジ職工ノ使用方法ニ制限ヲ要スルモノアルヘシ。

例ヘハ左記ノ如キ患者ニ付テハ其ノ就業ヲ制限又ハ禁止スルノ必要アルヘシ。

- (一) 肺結核、癩又ハ精神病患者ハ其ノ就業ヲ禁止スヘキモノナリ
- (二) 急性傳染性病(丹毒、再歸熱、麻疹、產褥熱、流行性腦脊髓膜炎、炭疽熱、馬鼻疽等)又ハ熱性患者其ノ他ノ就業ノ爲病症増悪スルノ虞アル患者(急性泌尿生殖器病、心臟病、脚氣、關節炎、髓腦炎等)ハ治療ニ至ル迄就業セシメサルヲ可トス
- (三) 傳染性皮膚病(梅毒、疥癬等)又ハ傳染性眼炎(トラホーム、淋毒眼炎等)患者ハ其ノ病況ニ依リ醫師ニ於テ適當ナル傳染豫防ノ處置ヲ爲シタル者ニ非サレハ工場ニ於テ就業セシメサルヲ可トス
- (四) 第二ニ掲ケタル症病其ノ他ノ重病ニ罹リタル者ハ、症候消失シタル後ト雖身

體ノ衰弱回復セサル期間ハ就業セシメサルヲ可トス、但シ醫師ノ意見ニ依リ短時間輕易ナル業ニ就カシムルハ此ノ限ニ在ラサルヘシ。

産婦ノ攝生ハ最モ注意ヲ要スルモノナルニ拘ラス往々無理ヲ爲シテ工場ニ出勤スル者アルヲ以テ分娩後一定ノ時期ヲ限り工場労働ヲ制限シ、又ハ之ヲ禁止スルハ國民ノ保護政策上最モ必要ノ措置ナリト謂フヘシ、而シテ其ノ期間ニ付テハ各國其ノ制ヲ一ニセス、少ナキハ二週間ニシテ多キハ六週間ニ及ヘリ、瑞典、挪威ノ如キハ此ノ期間最モ長キノミナラス、尙分娩前二週間ノ工場労働ヲ禁止セリ、又瑞西ニ於テハ分娩前後八週間ノ就業ヲ禁シ、分娩後少クトモ六週間ハ工場労働ニ從事スルコトヲ得ストセリ。千八百七十六年英國ニ於ケル工場法調査委員會報告ニ依レハ工業都市ニ於テ死亡率ノ非常ニ大ナル原因ニ種々アリト雖就中最大ナルモノハ女工カ分娩後間モ無ク工場労働ニ従事スル爲ナリト謂フ、蓋シ之ヲ爲ニ女工ハ自己ノ健康ヲ害スルノミナラス、幼兒ノ保育ニ關シ十分ノ注意ヲ爲スコト能ハスシテ其ノ死亡ヲ見ルコト多ケレハナリ、左レハ工場法ニ於テ産婦ニ對シ其ノ労働ヲ禁止シ又ハ之ヲ制限シ得ヘキコトヲ規定セシハ至當ノ事ナリ。其ノ期



間ニ付テハ工場法施行細則ノ規程ヲ待ツニ非サレハ之ヲ知ルコト能ハスト雖、産後四週間位ヲ以テ適當トスヘシ、但シ三週間ヲ經過シテ醫師ニ於テ健康上危害ナキコトヲ證明シタル者ニ就テハ就業ヲ許スモ可ナランカ(第十二條)。

然レトモ此ノ禁止又ハ制限ハ分娩後ニ於テノミ行フヘキモノニシテ、分娩前ノ保護ハ到底不可能ノ事タルヘシ、實ハ此ノ妊婦ニ關スル特別保護ヲ認メサリシコトハ衛生學者其ノ他ヨリ非難ヲ受ケタル所ナルモ、妊婦ハ産婦ニ比シテ工場労働ノ苦痛ヲ自覺シ易ク從テ自制スル場合多カルヘク、又出産ノ期ヲ定メ難キ場合アルヘキヲ以テ出産前一定ノ期間ヲ劃シテ禁止又ハ制限ヲ行フコトハ取締上容易ナラサルモノアリ、左レハ此ノ點ハ工場主ノ注意ニ依頼シ法律ヲ以テ之ヲ禁止セサルコトニ決定シタリ、元來此ノ出産ニ關シテハ労働者ノ家計上特別ノ費用ヲ要スルニモ拘ラス其ノ前後ニ於テ長ク労働ヲ禁止又ハ制限スルコトハ著シク労働者ノ經濟状態ヲ困難ナラシムルモノニシテ其ノ實行容易ナラサル規定ナリ。故ニ其ノ實行ヲ確實ナラシムル爲ニハ他面ニ於テ之カ救済ノ方法ヲ講セサルヘカラス、獨逸ニ於テハ分娩ヲ以テ一種ノ疾病ト看做シ、疾病保險ニ依リテ之カ救済ヲ

行ヒ、丁抹工場法ニ於テハ婦女カ分娩後労働ヲ禁止セラレタル爲窮民救助院ニ入ルモ之カ爲ニ窮民救助ヲ受ケタル者カ被ルヘキ權利剝奪ノ規定ヲ適用セスト定メオレリ。

第二項 時間ニ關スル制限

幼少年工及女工ニ對シテハ就業時間ニ關スル制限ヲ行フ、其ノ就業時間トハ職工カ専ラ作業ニ従事スル時間即チ正味ノ労働時間ニ休憩時間ヲ合算シタルモノナリ。就業時間ニ關スル制限ハ之ヲ分ツテ三種トナス(一)一定時間以上ノ労働禁止、(二)休憩休日ノ強制(三)深夜労働ノ禁止之ナリ。

第一十二時間労働問題、凡ソ過長ノ労働時間ハ業務ノ如何ニ係ラス衛生上有害ナルコトハ固ヨリ言フ俟タズ、殊ニ工場労働ニ於テ其ノ弊害顯著ナリトス、換氣法ノ不完全ナル室内ニ於テ空氣ハ濕潤シ、塵埃ハ飛散シ、加フルニ器械ノ騒響器々タル場内ニ在リテ過長ノ労働ヲ爲シ不知不識ノ間ニ其ノ心身ノ健全ヲ害スルコト實ニ大ナリ、成年男工ニ在リテハ其ノ身體精神共ニ成熟シ自由ノ意思ヲ以テ外部ノ強制ニ抵抗シ自衛ノ途ヲ圖ルコトヲ得ンモ、幼少者及婦女ニ至リテハ其ノ心



身共ニ薄弱ニシテ抵抗力ニ乏シキ爲其ノ健康ヲ害スルコト尠カラス斯ノ如ク此ノ種ノ職工ニ對シテハ其ノ衛生上特ニ保護ヲ要スルモノアルヲ以テ第三條ニ於テ就業時間ノ制限ヲ規定セリ。然ルニ本條ノ目的ハ直ニ職工ノ作業効率ヲ増加セシムルニ非スシテ幼少年工及女工ノ健康ヲ保護シテ間接ニ労働効率ノ増進ヲ圖ルモノナレハ特定ノ作業ニ於テハ却テ一時其ノ効率ヲ減スヘシ。

就業時間ノ制限ニ付テハ各國ノ工場法ハ職工ノ種類ニ依リテ其ノ規定ヲ異ニセリ之ヲ概言スレハ幼少年工及少年工ニ對シテハ各國共ニ適當ノ制限ヲ附シオレリ唯獨リ伊太利ニ於テ少年工ニ對シテ何等ノ制限ヲ附セサルコトアルノミ、成年女工ニ對シテハ相當ノ制限ヲ設ケタル所ト全ク之ヲ設ケサル所ト殆ント相半ハセリ。而シテ成年男工ニ對シテハ何等ノ制限ヲ附セサルモノ多數ニシテ只例外トシテ瑞西、埃太利、露西亞、及佛蘭西ノ四國アリ、今左ニ各種ノ職工ニ付テ各國ノ規定セル就業時間ノ制限ヲ略述セン。

幼年女ニ對スル就業時間ノ制限ハ六時間乃至十時間ヲ通例トス、英國ニ於テハ幼年工ノ就業時間ニ付一種ノ特例ヲ設ケテ他ノ諸國ノ如ク一定ノ制限規定ヲ以

テ之ヲ律スルコトナク午前若ハ午後ニ於テ六時間ヲ限リ労働ヲ許ス所ノ方法即チ半日制及隔日ニ十二時間ノ労働ヲ許ス所ノ方法即チ隔日制ノ二種ノ方法ヲ設ケ尙纖維工場手工場及家内工場ニ依リテ多少其ノ適用ヲ異ニシ各工場主ヲシテ任意ニ其ノ一ヲ撰擇セシムル制ヲ採レリ、獨逸、丁抹、諾威、匈牙利、瑞典等モ亦六時間ヲ以テ其ノ制限トセリ。他ノ佛蘭西、白耳義、伊太利、等ノ諸國ハ大概十時間乃至十二時間トシ、唯西班牙一國ノミハ一日五時間以上ノ労働ヲ禁止セリ。

少年工ニ對スル制限ハ西班牙ノ八時間及白耳義ノ十二時間ヲ別トシ各國共ニ十時間乃至十一時間ナリ。

成年女工ニ對スル制限ハ各國ノ法律ニ於テ少年工ニ對スルモノト殆ント其ノ趣ヲ一ニセリ、唯露西亞、匈牙利、瑞典、等五、六ノ國ニ於テハ何等制限の規定ヲ設ケス。成年男工ニ對スル制限ニ付テハ議論甚タ多ク其ノ利害未タ明ナラス、學者中工場法ヲ以テ成年男工ニ對スル労働時間ヲ制限スルハ之ニ依リ労働効率ノ増進ヲ圖ラントスルニアリトシ、或ハ「ブレンタノ」教授ノ言ヲ引キ或ハ「シユルツグバトニッツ」ノ英國木綿工業ニ於ケル實地研究及「エルンスト、アベ」教授ノ「ツアイス」工



場ニ於ケル實驗等ヲ引例シテ論證スルモノアリト雖之レ全然誤解タルヲ免レス、前述ノ如ク本法ニ於ケル労働時間ノ制限ハ主トシテ健康上及社會政策上ノ必要ニ基クモノニシテ直接ニ個人經濟上ノ目的ヲ有スルモノニ非サルコト明ナリ、斯ノ如ク積極的ニ労働ノ效率ヲ増進セシムルコトヲ目的トスル時間ノ制限ノ如キハ、全ク工場主ノ自由意志ニ任セテ可ナルヘク法律ヲ以テ之ヲ規定スルノ理由ヲ見出ス能ハサルナリ、單ニ衛生上ノ目的ヨリスルモ成年男工ハ幼少者婦女ト異リ、自衛力ヲ有シ其ノ自由意志ニ依リテ工場主ト適當ナル労働時間ノ契約ヲ締結シ得ルヲ以テ、強テ法律ヲ以テ干渉スルノ必要ナク寧ロ其ノ自由契約ニ一任スルノ勝レルニ若カサルナリ。

左レハ各國ノ工場法ニ於テモ成年男工ノ労働ニ對シテハ一般的制限ヲ設ケタルハ、埃太利、瑞西、露西亞、新西蘭等少數ノ國ニ止マリ、其ノ他ノ諸國ハ唯特種ノ場合若ハ特殊ノ業務ニ限り制限規定ヲ設クルコトトシ、一般的業務ニ於テハ全ク自由契約ニ一任セリ、例ヘハ英國ニ於テハ千九百八年ノ法律ヲ以テ、鑛山労働者ニ八時間半ノ労働制限ヲ加ヘタル外全ク無制限トシ、佛蘭西ニ於テハ幼少者婦女ト共ニ

労働スル場合ニ限り成年男工モ亦同一ノ制限ヲ受クルモノト爲セリ、又新西蘭ニ於テハ一週四十八時間ヲ超ユル労働時間ニ對シテハ特別賃銀ヲ要求シ得ヘキコトヲ定メタリ、獨逸ニ於テハ何等制限の規定ナシ、猶詳細ハ第六章ニ於テ之ヲ表示スヘシ。

次ニ本邦工場法ハ此ノ問題ニ付如何ナル主義ヲ採リシカヲ概論セン、抑モ一時ニ筋骨ヲ勞セサル種類ノ労働ハ、疲勞ヲ來スコト急激ナラサルヲ以テ自然長時間ニ互リ之ヲ繼續スル傾アルヲ免レス、其ノ結果ハ年月ノ經過ト共ニ漸次身體ノ發育ヲ害シ、不知不識ノ間ニ各種ノ疾病ニ侵サレ、易キ體質ヲ馴致スルモノナリ。

製鐵其ノ他鐵關係ノ工業少クシテ、纖維工業(製絲紡績)ノ盛ナル我國ニ於テ労働時間ノ十二時間以上ニ互ルモノ尠カラサルハ實ニ之ニ起因スルモノナリ。本邦工場ノ實況ヲ見ルニ多數ノ婦女ヲ使用スル所ハ必ス多數ノ幼少者ヲ使用シ、是等婦女幼少者ト成年工トノ労働時間ニ差別ヲ設ケス、十一二時間ノ労働ヲ爲サシムルハ普通ニシテ、工場ノ種類ニ依リ十五時間以上ノ労働ヲ爲サシムル所少カラス。其ノ甚シキニ至リテハ一日十七時間以上(朝五時ヨリ夜十時マテ)ノ労働ヲ爲サシムルモノアリ。



本邦職工ノ勞働狀態ハ外國ニ於ケルカ如ク嚴正ナル規律ナキヲ以テ、其ノ心身ヲ勞スルコト比較的大ナラサルカ如キ觀アルニ拘ラス、工場勞働ヲ永續スルモノ少ク、其ノ出入ノ頻繁ナルハ前ニモ述ヘタルカ如ク、勞働時間ノ過長ニシテ數箇月勤續ノ後ハ、體力ノ到底之ニ耐ヘサルニ至ルコトモ、其ノ原因ノ一タルコト疑フ容レズ。故ニ工場法ハ工業ノ種類又ハ業務ノ性質如何ヲ問ハス、何人モ最長ト認ムヘキ十二時間ヲ以テ勞働時間ノ限度ト爲シ、全國ヲ通シテ一齊ニ之ヲ遵守セシメントシ、工業主ニ對シテハ此ノ最長限ノ範圍内ニ於テ、適宜ニ操業ノ種類職工ノ年齢及體質等ノ如何ヲ顧ミ必要ナル斟酌ヲ加フルコトヲ希望シタルナリ。乃チ歐米諸國ニ於テ唱導シ來レル所ノ八時間勞働ノ問題我國ニ於テハ十二時間問題トシテ久シク論議セラレタリ。今之ヲ立案ノ沿革ニ徵スルニ二十年案ニハ年齢十四歲未滿ノ者ニ對シ六時間以上、十七歲未滿ノ者ニハ十時間以上ノ勞働ヲ禁止シ、最モ嚴格ナル案ヲ立テタリ。然ルニ三十一年案ハ單ニ十四歲未滿ノ者ニ對シ十時間以上ノ勞働ヲ禁止スルニ止メタリ。三十五年案ハ十六歲未滿ノ者及女子ニハ十二時間以上ノ勞働ヲ禁止スルヲ以テ原則トシタルモ、勅令ヲ以テ十箇年ノ猶豫

期間ヲ設定シ、勞働輕易ナル工場ニ在リテハ施行後五箇年間、十五時間迄ヲ許シ、其ノ後ノ五箇年間ニ於テハ、十三時間ニ短縮シ、十年後ニ於テ十二時間ノ原則ニ立チ戻ルヘキ旨ヲ定メタリ。然ルニ四十二年案以後ノ諸案ハ斷然十二時間制限ヲ初メヨリ施行スヘキコトヲ定メ、製糸工場ノ如キ特殊ノ工場ニ限リ主務大臣ニ於テ二時間以内ノ延長ヲ特許シ十四時間迄ノ勞働ヲ爲サシムルコトヲ得ルノ主義ニ改メタリ。然ルニ生産調査會ハ此ノ特許ノ期間ヲ永久ニスルヲ不可ナリトシ、之ヲ十五年ニ制限スルノ意見ヲ發表シ、政府及議會ノ容ル、所トナリ、斯クシテ現行法ノ規定ヲ見ルニ至リシナリ。

十二時間ノ勞働ハ決シテ短シトセス之ヲ以テ最長期トスルハ世界ニ類例ナキ所ナリ。然ルニ本邦ニ於テハ製糸業又ハ織物業ノ如キ從來ノ慣行上往々十五六時間以上ニ互リテ作業ヲ爲スモノアリ。特ニ製糸業者ニシテ冬期間休業スルモノ、如キハ、十七時間以上ニ互ル場合ナキニ非ス、是ニ於テカ此等ノ當業者ノ多數ハ舉テ此ノ制限ニ反對シ、特ニ製糸業者ノ一部ハ第三條第二項ニ依リ十四時間迄ノ勞働ヲ特許サルヘキモノナルコトヲ示サレタルニ拘ラス、最後迄反對ヲ繼續シ



タリ。其ノ主張ノ要領ハ生糸工業ハ作業ノ性質職工ニ何等ノ危険ナク、又衛生上有害ト爲スヘキ理由ナシ、殊ニ冬期間ハ休業スルモノニ對シ現状ヲ少シニテモ變革スルハ事業上著シキ打撃ヲ與フルモノナリト謂フニ在リ。此ノ意見ニ對シテハ製糸女工カ水蒸氣充滿シテ體溫ノ調節ヲ阻止セラレタル場所ニ於テ、身體ヲ屈曲シテ深呼吸ヲ爲スヲ得サル状態ニ在リテ、長時間操業スルコトハ健康上有害ナルコトヲ反覆論證説明シタリト雖、遂ニ其ノ說ノ撤回ヲ見ルニ至ラサリシカ如シ。製糸業者ノ外十四時間又ハ十三時間ヲ以テ原則ト爲スヘシトノ意見ヲ發表シタルモノハ三四ノ商業會議所ノミニシテ、十二時間ノ労働ハ過長ナルヲ以テ、之ヲ八時間ニ短縮スヘシトノ意見ハ帝國教育會ヨリ發表セラレタリ。

法案ノ議會ニ提出セラルニ及ンテ議會ハ十二時間ノ原則ニ對シテハ格別ノ論議ナカリシモ、大日本蠶糸會ノ發表シタル意見ヲ容レ、第八條ニ季節ニ依リ業務繁忙ナル事業ニ付テハ、工場主ハ一定ノ期間ニ付豫メ行政官廳ノ許可ヲ受ケ、其ノ期間中一年ニ付百二十日ノ割合ヲ超エサル期間就業時間ヲ一時間以内延長スルコトヲ得ル旨ノ規定ヲ新ニ挿入シタリ。尤モ此ノ場合ニ於テハ、避ク可カラサル事

由ニ因リ、必要アル場合ハ一月ニ付七日ヲ超ヘサル期間ニ對シ、二時間以内就業時間ノ延長ヲ爲スコトヲ得トノ規定ヲ適用セサルコトトセリ。之ヲ要スルニ製糸業者ハ前ニ述ヘタル特典ノ上ニ尙一年百二十日ヲ超エサル期間ハ一日一時間ノ就業時間ヲ増加スルコトヲ得ルコトトナリタルモノニシテ、大凡十五時間ノ労働ヲ認メラレタルコトトナルヘシ。是實ニ當業者ノ熱心唱導ノ結果ナリト雖、其ノ果シテ生産上ノ必要ト労働力保存ノ必要トノ間ニ調和ヲ得タルモノナリヤ否ヤハ、實施後ノ成績ニ徴シ尙研究ノ餘地アルモノト謂フヘシ(第八條)

前記ノ季節ニ依リ繁忙ナル事業トハ如何ナルモノナルヤヲ見ルニ大凡左ノ如キモノナランカ

(一) 原料關係ニ因ルモノ

(二) 製糸業

(三) 農産製造業

(四) 水産製造業

(五) 木蠟業



(二) 氣候ノ關係ニ因ルモノ

(一) 醸造業

(二) 寒天製造業高野豆腐製造業

(三) 製氷業

(三) 社會事情ニ因ルモノ

(一) 印刷製本業

(二) 帽子製造業

尙本條ニハ同一日ニ二箇所以上ノ工場ニ於テ就業セシムル場合ニハ、各工場ニ於ケル就業時間ノ通計カ此ノ制限以内タルヘキコトヲ規定セリ、例ヘハ甲工場ニ於テ既ニ八時間ノ労働ヲ爲シタル職工ハ、乙工場ニ於テハ四時間以上就業セシムルコトヲ得サラシメ、以テ規定ノ精神ヲ貫徹セントス(第三條第三項)

第二休日及休憩ノ強制。  
長時間ノ連續就業ハ心身ノ疲勞ヲ來シ、其ノ健康ヲ害スルハ勿論製品ノ産額及出來榮ニ影響ヲ及ホスヘキヲ以テ一定ノ休憩時間及休日ヲ與フルノ必要アルハ

言ヲ俟ス。而シテ本邦ノ工場中既ニ此ノ休日休憩ノ制度ヲ實行セルモノ多シト雖、中ニハ終日連續シテ職工ヲ使役シ、而モ一日ノ休暇ヲモ與ヘス、職工カ病氣其ノ他ノ事由ニ依リ休業セントスルモ強テ之ヲ勞役ニ就カシムルカ如キ事例ハ往々小工場ニ於テ見ル所ナリ。是幼少年者及婦女ニ對シテ休憩及休日ヲ與フヘキ旨ヲ規定スル必要アル所以ナリ。之ヲ外國ノ事例ニ徵スルニ幼少年者婦女ニ對シテハ五六時間ノ労働ニ對シ一時間乃至二時間ノ休憩ヲ與フルヲ通則トナス、而シテ成年男工ニ對シテハ休憩時間ヲ與フルコトヲ強制スル所ハ極メテ稀ニシテ、奧太利、瑞西、印度等ニ、三ノ例アルノミ。

定期休業日ニ關シテハ西班牙伊太利等二三ノ例外アルモ各國概ネ其ノ軌ヲ同フシ、幼年工少年工並成年女工ニ對シテハ祭日ハ勿論每週必ス一日ノ休暇ヲ與フルコトヲ強制シオレリ、然レトモ成年男工ニ對シテハ或ハ之ヲ強制スル所アリ或ハ之ヲ強制セサル所アリテ二者相半ハスルモノノ如シ、但シ英國ノ如キハ法律ヲ以テ之ヲ強制サセルモ國民ノ慣習ニ基キテ日曜休業ハ自行ハレツ、アリ、然レトモ之ヲ以テ直ニ本邦ニ適用スルヲ得サル事情アリ。我國工場中休日又ハ休憩



時間ノ制ヲ設クルモノニ在リテハ、毎月二日ノ休日ヲ與フルコトト爲シ、休憩時間ハ十時間ノ労働ニ對シテ約三十分以上、十二時間ノ労働ニ對シテハ約一時間ト定ムルモノ多シ。依テ此ノ現状ニ鑑ミ、其ノ最下限ヲ以テ全國一般ノ工場ニ強要セントス。即チ婦女幼少者ニ對スル休日ハ普通ノ場合ニ於テハ毎月少クトモ二回トシ、職工ヲ二組ニ分チ交替ニ夜間就業セシムルモノ及二組以上ノ交替法ニ依ラシテ第五條第二號ノ如ク夜間ノミ就業セシムルモノハ、其ノ時間ノ長短ニ拘ラス、心身ノ疲労大ナルヘキヲ思ヒ、此等ニ對シテハ毎月少クトモ四回ノ休日ヲ與フヘシト定メタリ。而シテ毎回ノ休日ハ繼續シタル二十四時間以上タルコトハ勿論ニシテ、休日ハ一日及十五日トスル如ク相當ノ間隔ヲ保タシメ、二回ノ休日カ相接近セサルコトヲ要スルハ勿論ナリ、然レモ毎月ノ休日ハ必スシモ一定ナルヲ要セス、地方ノ祭日工場ノ紀念日等ヲ之ニ流用シ得ルモノ、如シ。又休憩時間ハ一日ノ就業時間カ六時間ヲ超ユルトキハ少クトモ三十分、十時間ヲ超ユルトキハ少クトモ一時間ノ休憩時間ヲ就業時間中ニ於テ設クヘキコトヲ規定セリ、而シテ此ノ休憩時間ハ就業時間中ニ適當ニ配置スルコトヲ要シ、之ヲ就業時間ノ前後兩端ニ

置クコトヲ許サス、例ヘハ就業時間カ十二時間ナルトキハ食事時間三十分ヲ以テ之ヲ折半シ、前後各六時間ノ中間ニ十五分宛ノ休憩時間ヲ設ケ、又就業時間カ十時間以内ナルトキハ始業後五時間前後ニ於テ三十分ノ休憩時間ヲ設クルカ如キハ其ノ一例ニシテ此等休日及休憩ニ關スル詳細ノ事項ハ工場法施行命令中ニ規定セラルヘキモノナリ(第七條第一項)

休日ニ關シテハ製絲業者ノ一部ヨリ異議ヲ申出タリ。理由トスル所ハ冬期間休業スルカ如キ業態ニ在リテハ、職工ハ此ノ休業期間自由ニ心身ヲ休養スヘキヲ以テ、營業上急速ノ作業ヲ要スル時期ニ於テ休日ヲ與フルカ如キハ生産額ヲ少ナラシムルノ結果ヲ生シ、事業ノ利潤ヲ少カラシメ、延テ本邦ニ於テ最モ重要ナル産業タル製糸業ノ基礎ヲ殆クスルモノナリト謂フニ在リ。右ハ從來永年ノ慣行ニ基キ立論セル所ニシテ先入主ト爲リテ又拔クヘカラサル論者少カラス、反復ノ辯明モ容易ニ其ノ主張ヲ撤回セシムル能ハサル場合アリタリ、然レモ議會ニ於テハ此ノ點ニ關シテハ別段ノ論議ナクシテ之ヲ通過セシメタリ。

猶又職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ夜間就業セシムル場合ニ於テハ夜(又ハ午前)



ノ組ニ屬スル職工ハ疲勞其ノ他衛生上ノ不利益大ナルヲ以テ本條ニ於テハ一週  
間以內ニ各組ノ就業時間ヲ相互轉換スヘキコトヲ命シタリ(第七條第二項)

第三徹夜業禁止問題

幼少者及女子ノ保護ハ單ニ一定時間以上ノ就業ヲ禁止シ就業時間中一定ノ休  
憩時間ヲ與ヘ又ハ一定ノ休日ヲ與フルコトノミヲ以テ足レリトセス。假令十二  
時間ヲ超エサル勞働ナリトスルモ何人モ睡眠ヲ採ルヘキ安靜ナル夜間殊ニ深夜  
ヲ徹シテ勞働シ、四周喧噪ニシテ安眠ヲ妨害スヘキ晝間ニ睡眠セントスルカ如キ  
ハ管ニ睡眠不足ヲ來シ易キノミナラス、身體ノ新陳代謝ニ最モ必要ナル日光ノ作  
用ヲ受クルコトヲ妨ケ、食事其ノ他ノ關係ニ於テモ健康上著シキ障害ヲ受クルヲ  
免レス。殊ニ身體ノ發育未タ十分ナラサル幼少者及抵抗力薄弱ナル女子ニ對シ  
テハ其ノ影響最モ大ナリトス。

加之徹夜業ハ管ニ之ニ從事スル職工ノ健康上害アルノミナラス該職工ニシテ  
母タル場合ニハ彼等ノ小兒保育ヲ妨害スルモノナリ、即チ徹夜業ヲ爲スコト久シ  
キニ及ヘハ母體ハ次第ニ衰弱シ終ニ貧血症ニ陥リ乳ハ漸次減少シ小兒ノ營養ハ

益々缺乏スルニ至ルヘシ、假令晝間ハ托兒所ニ托スルコトヲ得ヘシトスルモ夜間  
ニ於テハ此ノ種ノ設備ナキヲ以テ小兒ハ一層可憐ノ狀況ニ陥ルヘシ。

又佛國工場監督官「ラガ」氏ノ報告ニ依レハ徹夜業ヲ爲ス女工ハ早産ヲ爲スコ  
ト多ク、幸ニ月滿チテ分娩スルモ其ノ兒童ハ二歳以下ニテ死亡スル者多シ、此ノ事  
實ニ基キテ某地方ノ職工ハ徹夜業ヲ稱シテ「小兒ヲ喰フモノ」ト云ヒツツアルヲ聞  
ケリト謂フ。

以上ノ事實ヲ綜合スルニ徹夜業カ幼少年者並婦女ニ對シテ衛生上有害ナルコ  
トハ固ヨリ言フ俟タズ、又徹夜業カ業務上ノ危害ノ原因タルコトハ苟モ工場生活  
ヲ知レル者ノ周ク認ムル所ナリトス、之レ徹夜業ニ於テハ職工ハ氣力弱ク、注意薄  
ク、加フルニ屢々睡魔ノ襲フ所トナリ、不知不識ノ間ニ機械其ノ他ノ裝置ノ危険ナ  
ル部分ニ觸レ危害ニ罹ルヲ免レサルナリ、尙社會風教ノ點ヨリ徹夜業ヲ觀察スル  
モ其ノ弊ヤ實ニ言フニ忍ヒサルモノアリト聞ク、更ニ又晝夜交代ノ就業方法ヲ採  
レル工場ニ在リテハ夫ハ晝間ノ勞働ヲ了リ薄暮家ニ歸レハ妻ハ已ニ夜業ノ爲ニ  
工場ニ赴ケリ、妻ニシテ翌朝家ニ歸ランカ夫ハ更ニ工場ニ赴カサルヲ得ス、此ノ如



キ生活ニ於テハ家庭團欒ノ快樂ヲ望ムコトヲ得ス、風紀ノ頽廢從テ生スルモ亦已ムヲ得サル所ナルヘシ。

徹夜業カ工場經濟ニ及ホス影響ニ付テハ議論頗ル多岐ニ分レダリト雖、綿絲紡績工業ニ付農商務省ノ調査シタル所ニ依レハ徹夜業ハ機械ノ破損ヲ招キ易ク從テ其ノ保存期間ヲ減縮シ又生産品ノ品質ヲ著シク低下スルヲ以テ精巧ナル綿絲ヲ製造スルコト能サルモノ、如シ。

由是觀之、衛生上ヨリ又風教上ヨリ觀察シテ徹夜業ノ害タルヤ尠少ナラスト謂ハサルヘカラス、又工場經濟上ヨリ觀察スルモ徹夜業ノ禁止ハ或ハ一時産額ヲ減少スルノ虞アリトスルモ、機械損耗ノ減却及労働効率ノ増進ニ依リテ實際營業上ノ利益ヲ減少スルノ程度ハ左迄多大ナラサルヘシト信ス、左レハ歐米各國ノ工場法ニ於テハ徹夜業禁止ノ目的ヲ以テ夜間一定ノ時間例ヘハ午後八時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於ケル労働ヲ禁止セリ、禁止職工ノ範圍ニ付テハ各國ノ立法例一ナラスト雖幼年工ニ對シテハ各國等シク之ヲ禁止シ、少年工及女工ニ對シテハ少數ノ例外アルモ概シテ之ヲ禁止セリ、瑞西ニ於テハ成年男工ニモ原則トシテ禁止ヲ

實行セリ、斯ノ如ク歐米諸國ハ孰レモ皆國法ヲ以テ婦女幼少者ノ夜間労働ノ禁止ヲ規定セルノミナラス、職工保護ニ關スル萬國會議ヲ(千九百一年及千九百五年並六年)瑞西、ベルン市ニ開キ條約ノ規定ヲ以テ幼少年者及女子ノ夜業ヲ禁止スルコトト爲シ歐洲各國概ネ之ニ加盟セリ。我國モ將來該條約ニ參加スヘキヤ否ヤハ姑ク之ヲ措クモ早晚夜業ヲ制限又ハ禁止スルノ必要アルコトハ之ヲ否認スルコトヲ得ス。

惟フニ本邦工場労働ノ改善ニ關シ最モ重要ナル問題ハ幼少年工及女工ノ徹夜業禁止問題ナルヘシ、而シテ最多數ノ幼少年工及女工ヲ徹夜業ニ使用スルハ棉絲紡績業ナリトス、今統計ニ依リ各種工業ニ於ケル十六歲未滿ノ幼少年工及女工ノ數ヲ示サン(農商務省調査明治四十二年末現在)

工業種別	工場數	十六歲以上		十六歲未滿		計	合計
		男	女	男	女		
織維工場	八、三〇一	二九〇、七五〇	五四、八七七	九〇、五二三	六〇、八九六	三八一、二七三	四四二、一六九



工業種別	十六歳以上		十六歳未満		計
	男	女	男	女	
機械及器具工場	一、〇九二	四八、三二四	二、五〇六	三、五三九	五一、八六三
化學工場	一、五七九	三七、一六一	一七、五五七	五、五〇七	二、九四七
飲食物工場	二、三九六	四二、六五四	一七、九八五	一、一九五	四二、六六八
雜工場	一、九四五	一七、五三一	三二、三八九	三、四六九	二一、四五四
特別工場	一一三	三、六二五	一七、五三一	六、一三七	二二、六六八
計	一五、四二六	二一九、〇三〇	三、六二五	一八	二四一、四八四
		三四六、三七六	一〇六、三一	四五二、六八七	六九四、一七一

以上ノ統計ニ依レハ我國工場工業ニ従事スル全職工六十九万四千餘人ニ對シ  
 纖維工業ニ従事スル者ハ四十四萬二千有餘ヲ占メ其ノ中女工三十八萬千二百七  
 十三人ニシテ十六歳未満ノ男工六千十人ナリ、今更ニ纖維工場ノミニ付幼年工

及女工ノ數ヲ見レハ左ノ如シ、

工業種別	十六歳以上		十六歳未満		計
	男	女	男	女	
製糸工業	九、〇五八	一六六、八六五	五五三	一七四、七八六	一八四、三九七
紡績工業	一九、四七一	五八、七〇七	一、八七六	二一、三四七	一〇二、九八六
撚糸工業	八三七	三、二二二	一一一	九五八	五、二四七
織物工業	一五、四三二	八三、五五三	二、二一六	一七、六四八	一二七、四四一
組物工業	一、三一七	二、三二四	二三四	一〇九、七九三	四、七八〇
			八〇五	三、二二九	

是等各種ノ纖維工業中製糸織物組物撚糸等ハ徹夜業ヲ實行スルコト稀ニシテ  
 實際徹夜業ノ廣ク行ハル、ハ紡績工場ナリ、是ニ於テ徹夜業禁止ノ影響ヲ受クヘ



キ業務ハ綿糸紡績業ナリト謂フモ不可ナシ、即チ幼少年工及女工ノ徹夜業禁止ハ紡績業ニ使役セラルル幼少年工及女工ノ合計八万有餘人ニ關スル問題ニシテ其ノ禁止カ職工ノ衛生及經濟上如何ナル影響アルヤニ付農商務省ハ詳細ノ調査ヲ爲シ綿糸紡績職工事情第三章ニ於テ之ヲ發表セリ、右ハ略十年前ノ調査ニシテ爾後統計ニ著シキ移動アリト雖大體ノ事實ハ今日ニ於テ異ルコトナシ左ニ其ノ大要ヲ摘録スヘシ

徹夜業カ衛生上有害ナル事ハ争フヘカラサル事實ニシテ今某紡績工場ニ就キ調査シタル結果ヲ示セハ左ノ如シ、

(一) ○○紡績株式會社 (第一表)

職工ノ總體量(八十一人)	七百九十一貫八百七十匁	九三、二五封度
一人平均	九貫七百七十六匁	四二、三三七基瓦
夜業一週間後ニ減セシ總體量	十三貫七百五十匁	一〇、八一五封度
一人平均	百七十匁	一〇、八一五封度
夜業一週間後ニ減セシ總體量	五貫六百二十匁	二一、〇七五基瓦
一人平均	九十五匁	二一、〇七五基瓦

以上ハ寄宿女工七十人社宅幼年女工十一人ニ就キ晝業夜業十二日間ヲ通シテ検査シタルモノナリ。社宅幼年工ハ寄宿工ト稍生活ノ状態ヲ異ニスト雖、其ノ數少ナキト、検査ノ結果其ノ傾向ヲ同フスルヲ以テ附加計算セリ。今前表ヲ案スルニ工女ノ體重ハ夜業時ニ於テ減シ、晝業時ニ於テ増加スルノ經過ヲ示セリ。而シテ總體量ニ於テ八貫百三十匁一人平均百一匁(〇、八三封度)ハ晝業五日間ニ於テ恢復シ能ハサル減量ナリ。

(二) 同社 (第二表)

總體重(八十三人)	九百十四貫三百六十匁	九三、二五封度
一人平均	十一貫二百九十匁	四二、三三七基瓦
晝業一週間後ニ減セシ總體量	二貫九百匁	一〇、八一五封度
一人平均	三十五匁	一〇、八一五封度
夜業五日後ニ減セシ總體量	七貫八百九十匁	六四、八八封度
一人平均	九十五匁	二九、四九基瓦



前表ヲ案スルニ總量ニ於テ十貫七百九十匁、一人平均百三十匁(〇、一七四封度)ハ晝夜業十二日間ニ於テ減セシ量ナリ、而シテ夜業時ノ減量ハ晝業ニ比シ約三倍ナルヲ見ルナリ。

(三) 〇〇〇紡績株式會社

總體重(五十九人)五千九百四十四九封度

一人平均 一〇〇、八封度

四五、七二基瓦  
十二貫百九十二匁

夜業一週間後ニ減セシ總量七十四、七封度

一人平均 一、二七封度

〇、五七六基瓦  
百五十四匁

晝業一週間後ニ増セシ總量六十六封度

一人平均 一、一二封度

〇、五〇八基瓦  
百三十五匁

前表モ亦工女ノ體重ハ夜業時ニ於テ減シ、晝業時ニ於テ増加シタルコトヲ示セリ。而シテ總量ニ於テ八、七封度、一人平均〇、一五封度(〇、〇六八基瓦)ハ晝業一週間ニ於テ恢復シ能ハサル減量ナリトス。

前陳ノ試験ニ依リ工女ノ年齢ト體重ノ増減トノ關係ニ就キ審按スル所ニ依

レハ、十四五歳以下ノ幼者ハ夜業ノ後ニ體量ヲ減スルコト多ケレトモ晝業ノ際ニ回復スルコト多ク、十七八歳以上ノ者ハ夜業ニ由リテ減量スルコト少ナケレトモ晝業ノ後之ヲ回復スルコト亦少キモノ、如シ。

以上ノ事實ハ大體ニ於テ生理上ノ學說ト相背馳セサルノ結果ヲ示スモノト謂ヒ得ヘシ

徹夜業カ職工ノ健康ヲ害スルコト上來述ヘタル如シ。今風紀ノ點ヨリ徹夜業ヲ觀察センカ徹夜業カ風紀紊亂ノ一因タルコトハ固ヨリ爭フ可ラサル事實ナリトス、抑モ工場内ノ深夜ハ工場監督ノ最モ不完全ナル時ナリ、某工場ノ女工曾テ語テ曰ク、夜業ハ晝業ヨリモ氣樂ナリ、蓋シ晝業ニ於テハ監督嚴重ナルカ故ニ機械ノ掃除ニ、執業ノ方法ニ十分ノ注意ヲ爲サ、ル可ラスト雖、夜業ニ於テハ技師以下ノ見廻リ少キカ故ニ幾分骨ヲ休ムルコトヲ得ヘシト。修飾ナキ該少女ノ言ハ以テ深夜ニ於ケル監督ノ狀況ヲ知ルニ足ル。尤モ工場内ニ於テ非行ヲ敢テスル者ハ稀ナルカ如キモ、監督ノ疎漏ナル深夜ニ於テ其ノ種子ノ蒔カルハ、コトアリ。願フニ徹夜業カ風紀紊亂ノ一原因タルコトハ否ム可ラサル處ナ



リ。徹夜業ノ工場經濟ニ及ホス利害ハ交互錯雜セルモノアリ、計數ヲ以テ之ヲ現ハスコト甚タ難シト雖、工場經濟ノ實況ヲ調査シ且當業者ノ所説ヲ參酌シ其ノ要點ヲ擧クレハ左ノ如シ。

(一) 機械ノ効果及其ノ保存期間。

徹夜業ヲ行フトキハ職工等ハ機械ノ取扱ニ周到ナル注意ヲ加ヘス殊ニ職工ノ交替ニ依リ晝夜毎ニ機械ノ擔任者ヲ異ニスルヲ以テ職工ハ自己ノ責任ヲ輕ンシ、自然掃除其ノ他機械ノ取扱ヲ粗忽ニシ、爲ニ毀壞スルコト多シ。又工場主モ完全ニ機械ノ修繕ヲ行フ違ナク、或ハ之ヲ等閑ニ附シ、或ハ姑息ノ修繕ニ甘ンスルヲ常トス。或ハ曰ク現時我紡績工場ニ就テ概言スレハ紡績機械ハ本來歐米ニ於ケル新式ノモノニシテ他ニ讓ル所ナキモ其ノ取扱ノ不完全ナルカ爲、精銳ナル機械ハ其ノ生理的ノ運轉ヲ爲サシテ、病的ノ状態ニ在リ、是ヲ以テ絲切レ多ク、從テ多數ノ職工ヲ要シ、多重ノ屑物ヲ生ス、必シモ責ヲ原綿ノ良否ノミニ歸ス可ラサルナリト。夫レ或ハ然ラン。而シテ今若シ徹夜業ヲ廢止スルトキハ是等ノ弊害ハ矯正シ得ヘキカ故ニ、大ニ機械ノ效果ヲ増シ、且其ノ保存期限ヲ

長クスルコトヲ得ルヤ言フ俟タス。而シテ此ノ場合ニ於テ晝夜交替業ヲ行フニ比シテ如何ナル程度迄保存期限ヲ延長シ得ルヤ、此ノ問題ニ就テハ未タ一定ノ説ナシ、或ハ曰ク徹夜業ヲ廢スルトキハ機械ノ取扱及其ノ保存ニ付周密ナル注意ヲ爲スコトヲ得ルカ故ニ、機械ノ使用時間ノ割合以上ニ其ノ保存期限ヲ延長スルコトヲ得ヘシト、或ハ必スシモ然ラスト云フモノアリ。之ヲ要スルニ晝夜交替業ヲ行フトキハ機械ノ保存期限ハ約十五年内外ナルヘク、今之ヲ晝業ノミトセハ縱令二倍以上ニ達セサルモ多ク之ニ下ラサルヘシ。若シ又假リニ徹夜業ヲ廢止スルモ、晝業ヲ全廢セシテ晝業ニ加フルニ幾分ノ晝業ヲ爲スモノトセンカ、晝夜交替業ニ比シ、機械ノ保存期限ハ大ニ之ヲ延長スルヲ得ルヤ言フ俟タス。

(二) 製絲額。

徹夜業廢止ノ製絲額ニ及ホス影響ヲ按スルニ、元來晝業ト夜業トハ其ノ勞働時間ハ同一ナルモ、其ノ産額ニ多少ノ差アルヘキモノナリ、是晝業ニ於テハ晝業ニ比スレハ職工ノ缺席多ク、執業監督亦不十分ナルニ因ル。然ルニ今各工場ニ



就テ晝業ト夜業トニ付綿絲ノ生産額ヲ比較センカ、二者ノ間ニ著シキ差異ナキヲ見ン。然レトモ晝業ノ成績ト夜業ノ成績トハ單ニ綿絲ノ生産額ノミヲ以テ論定シ難キモノアリ。何トナレハ紡績ノ業タル原綿ヨリ管絲ニ至ル迄數多ノ工程ヲ經、數晝夜ノ日時ヲ費スヲ以テナリ。今假ニ粗紡精紡ノ兩部ノミニ就テ之ヲ述ンニ、夜業ニテ製出スル處ノ管絲ハ、晝間ニ製セラレタル粗紡籐ノ精紡機ヲ經タルモノニシテ、其ノ産額比較的多ク、夜間ニ作ラレタル粗紡籐ハ晝業ノ精紡機ニ用キラル、ヲ以テ、其ノ成績比較的不良ナル場合多シ。抑モ夜業ノ製品ノ粗雜ニ流ル、ハ獨リ精紡ニ於テノミ然ルニアラス、粗紡其ノ他ノ前工程ニ於テモ亦然リ。而シテ是等前工程ノ良否ハ粗紡等ニ於ケル製品ノ産額及品質ニ最大ナル關係ヲ有スルモノナリ。是故ニ夜業ニ於テ粗雜ニ製シタル半製品ヲ晝業ニテ使用スルカ爲ニ、自ラ晝業ノ粗紡籐及管絲ノ製出額ヲ減スルコトアルヘク、又晝業ニテ作ラレタル比較的良好ノ半製品ヲ夜業ニ使用スルカ爲ニ、夜業ニ於ケル此等ノ製出額ヲ増加スルカ如キ事情モアルヘシ。要スルニ現時ノ晝業生産額ヲ以テ夜業廢止後ニ於ケル晝業ノ生産額ト同一視スルコト能ハサル

ナリ。

夜業廢止後ニ於ケル晝業ノ生産額ハ、晝夜交替業ヲ行フ場合ニ於ケル晝業ノ生産額ニ比スレハ、幾分ノ増加ヲ來スヘキハ言フ俟タス。其ノ原因ノ重ナルモノヲ舉ンカ機械ノ取扱及修繕ニ一層ノ注意ヲ加ヘ得ヘキヲ以テ機械ヲシテ完全ナル活動ヲ爲サシメ、其ノ効果ヲ増スヲ得ヘシ。蓋シ夜業ニ於テハ機械ノ取扱亂暴ニ流レ、注意ノ周到ナラサル爲、其ノ破損ヲ來ス場合多シ、且其ノ修繕ニ就テモ晝夜交替業ヲ行フトキハ、之カ爲ニ執業時間ノ幾分ヲ殺カサルヘカラスト雖徹夜業廢止セラレハ此ノ憂ナシ。若シ夫ノ職工ノ勞働効果ニ至リテハ下ニ述フルカ如ク徹夜業ヲ廢止スルトキハ、其ノ身體精神ヲ强健ナラシメ、其ノ缺勤數ヲ減シ、且熟練工ヲ養成シ得ル望ミアルヲ以テ、勞働ノ効果ハ大ニ増加スヘシ。此ノ外晝夜交替業ヲ行フ場合ニハ交替ニ際シ兩番ノ職工其ノ業務引繼ヲ疎漏ニスルノ弊アリ。或ハ殊ニ自己ノ仕事ノ結果ヲ多クセンコトニ汲々トシテ引繼後ノ執業ノ便否ヲ顧ミサルコトナキニ非ス。以上各種ノ弊害ハ皆夜業廢止ニ依リテ除去セラレヘキヲ以テ一面連續的ノ仕事ヲ間歇的ニ行フトキハ



朝夕業務ノ開始及終業ノ際多少ノ不便損失アリト雖是等ハ實ニ微々タルモノニシテ結局時間割當産額ノ増加ヲ見ルヘキ望アリ。

然ラハ則チ今夜業ヲ廢止シ晝業ノミト爲スモ其ノ生産額ハ半減セサルヤ必セリ。明治三十三年七月紡績聯合會ノ夜業廢止ニ關スル決議ヲ率スルニ、夜業ヲ廢止スルカ然ラサレハ四割ノ休鍾ヲ爲スヘシト定メタリ、即チ夜業廢止後ニ於ケル晝業ノ生産額ヲ六割ト推定シタルモノナルヘシ。夜業廢止ノ後ハ前陳ノ如ク諸般ノ改良ヲ爲シ得ルノ餘地アルヲ以テ、必スヤ六割以上ニ達スヘキハ勿論當業者中或ハ六割五歩ノ産額ヲ得ヘシト云ヒ、或ハ七割ニモ達スヘシト云フモノアリ是必スシモ誇大ノ説ニ非サルヘシ。

夜業廢止ノ場合ニ於テ晝業生産額ノ増加スルコト斯ノ如シ、今夜業ノ全部ヲ廢止セス、唯之ヲ一定ノ時間ニ限り、徹夜業ノミヲ廢スルトキハ、其ノ遞減時間ノ長短、執業ノ方法及監督ノ奈何ニ依リテハ、其ノ産額ハ現今ノ晝夜業生産額ト大差ナキヲ得ルノ望ナキニアラス。

(三) 製品ノ品質。

徹夜業ニ於テハ職工及其ノ監督者モ亦睡魔ニ襲ハレ、心身共ニ疲勞シ、周密ナル注意ト精勵ナル氣力ヲ以テ業ニ從フコト能ハサルヲ以テ、製絲ノ品質粗雜ニ流ル、ヲ免レス。加之晝業ノ製品モ亦徹夜業ニ於ケル打綿梳綿粗紡等ノ前工程ヲ經タルモノヨリ成ル爲其ノ品質ニ影響スルコト少シトセス、故ニ徹夜業ヲ繼續スル以上ハ到底精巧ナル綿絲ヲ製造スルコトヲ得サルナリ。現今内外ニ於テ需用スル本邦綿絲ノ種類ハ主トシテ太絲ニ屬シ、之カ用途モ亦概テ手織機ニ、上スニアルヲ以テ、其ノ品質ノ選擇餘リニ嚴ナラサルモ、漸次世人ノ嗜好昂進シ、細絲ノ需用益々増加シ、且機械織布業ノ進歩スルニ至レハ、其ノ品質ノ選擇ハ蓋シ今日ノ比ニ非サルヘシ。今ノ時ニ於テ豫メ之ニ備フルハ本邦紡績業者ノ一大急務ニ屬ス、而シテ徹夜業ノ廢止ハ實ニコレカ一方法ナリト謂ハサル可ラス。

(四) 職工及監督者。

現今我國紡績工場ニ使用スル職工數ハ一萬鍾ニ對シ晝夜交替業ニテ男女總計凡七百人ヲ要セリ。然ルニ若シ假リニ晝業ノミトスレハ果シテ幾何程ノ職



工ニテ能ク其ノ用ヲ滿タスコトヲ得ルヤ、是大ニ研究ヲ要スル問題ナリトス。或ハ曰ク晝業ノミト爲スモ少クトモ現今ノ半數以上ノ職工ヲ要スヘシ、蓋シ晝夜交替業ナレハ仕事ノ融通ヲ計リ、職工ノ繰合セテ爲スコトヲ得ルノミナラス、殊ニ或種ノ職工ニ就テハ夜業廢止ノ場合ニ於テモ、其ノ員數ヲ減スヘキモノニ非サレハナリト。本調査員ノ見ル所ニ依レハ晝夜交替業ニ要スル職工ノ多クモ半數ヲ以テスレハ以テ晝業ノミノ場合ヲ支持スルニ足ルヘシ、何トナレハ現今紡績工場ニ多數ノ職工ヲ要スル所以ノモノハ、主トシテ機械ノ不調子ト職工ノ出入頻繁ニシテ訓練ノ違ナキトニ由ル而シテ機械ノ不調子ト職工ノ出入トハ徹夜業ノ廢止ニ依リ大ニ之ヲ匡救シ得ル見込アレハナリ。今假ニ歐米ノ紡績工場ニ於ケル職工數ト我職工數トヲ對比スルニ其ノ間甚シキ徑庭アリ。例ヘハ英國、オールドハムニ於テ、ミュール精紡機七萬鍾ヲ有シ、四十手ヲ紡出スル工場ニ於テハ混綿部ヨリ精紡部迄ノ職工數百六十一人ニシテ一萬鍾僅ニ二十三人ノ割合ナリ。然ルニ本邦ニ於テ、リング精紡機ヲ以テ二十手以下太絲又ハ三十手四十手等ノ中細絲ヲ紡出セル所及、リング精紡機若ハミュール精紡機又ハ

兩機ヲ混用シ、六十手又ハ八十手ヲ紡出セル工場ニ於ケル混綿部ヨリ精紡部迄ノ職工數ハ一萬鍾ニ付八九十人乃至百八九十人ニシテ、三倍五步乃至八倍餘ナリ。是製造綿絲ノ細太原綿ノ良否等種々ノ原因アルヘキモ職工ノ種類及勞働効果ノ多寡等ハ其ノ一大原因ニシテ歐米紡績工場ノ職工ハ恰モ積年ノ訓練ヲ經タル常備軍ノ如ク、我紡績工場ノ職工ハ猶烏合ノ衆ノ如シ、乞フ其ノ事情ヲ詳説セン。

我國紡績職工ノ出入ハ極メテ頻繁ニシテ平均一箇年間ニ殆ト全數ノ交替ヲ見ル。例ヘハ大阪地方ニ於テ千人ノ職工ヲ有スル工場ニ於テハ年々出入各千二百人ニ達シ、從テ年々千二百人ヲ募集セサルヘカラサルヲ常トシ、殊ニ募集後一二箇月ノ間ニ退場スル職工甚タ多シ。抑モ紡績職工ノ出入ノ頻繁ナル此ノ如キハ何ニ因ル乎、固ヨリ各種ノ理由アルヘシト雖、紡績工場ニ於ケル徹夜業ハ其ノ重ナル一原因ト謂ハサルヘカラス。或ハ女工ノ婚姻ヲ以テ出入ノ主因タルカ如クニ思惟スル者アルモ、是未タ事ノ真相ヲ究メサルノ説ナリ。職工殊ニ女工ノ多クハ職工募集員若ハ職工紹介人ナル者ノ甘言ニ欺カレ、工場ニ來ルモ



已ニ一度職工トナレハ、生活ノ状態全ク異リ、殊ニ徹夜業ノ如キハ全ク彼等ノ家郷ニ於テ夢思セサル所ナリ。夜間睡魔ノ爲ニ襲ハレ、暫ク安息セントスルモ機械ノ運轉ト監督ノ鞭撻ハ、彼等ヲ脅迫シテ一刻モ安キ思ヲ爲スコトヲ許サス、二六時中違々トシテ職ニ堪ヘサルカ如キモノアリ。然ルニ晝間ハ到底彼等ヲシテ熟睡ヲ遂ケ、機能ノ恢復ヲ爲サシムルコト能ハス、是レ實ニ新來ノ職工ヲシテ急遽復タ行李ヲ理メテ望郷ノ嘆ヲ發セシムル至大ノ原因ナリトス。是ニ於テカ彼等ハ忽チ退場シ遂ニ散シテ四方ニ行クモノ比々概皆然リ。或ハ職工ノ内ニハ却テ徹夜業ヲ喜フモノアルカ如シト雖、是唯身體ノ强健ナル場合ニ於ケル一時限ノ事ニシテ、久シカラスシテ彼等ハ遂ニ其ノ健康ヲ害シ已ムナク工場ヲ去ルニ至ルハ屢見聞スル所ナリ。今若シ徹夜業ヲ廢センカ、職工ノ出入ハ現今ノ如ク頻繁ナラスシテ、勤續期間ハ一般ニ延長セラレ、比較的少數ノ職工ヲ以テ却テ良好ノ成績ヲ得ルノ望アルヤ疑ナシ。

元來我國ノ職工ハ出入頻繁ナルノミナラス、不時ノ缺席者多ケレハ工業主ハ所要ノ職工數ニ對シ、大抵一割乃至一割五分ノ豫備員ヲ設ケサルヘカラサルハ

事實ナリ。是蓋シ訓練ヲ經サル烏合無規律ノ衆ナルニ由ルト同時ニ、徹夜業等ニ依リテ心身ヲ疲憊セルヲ以テ、已ムナク缺席シテ一日ノ安息ヲ貪ルニ非サルナキヲ得ンヤ。此ノ故ニ徹夜業ヲ廢止シテ其ノ健康ヲ保全シ、規律ヲ正クセハ此ノ缺席數ヲ減少シ、無用ノ豫備員ヲ廢止スルヲ得ルヤ言ヲ俟タス。

徹夜業ト職工衛生トノ關係ハ先ニ述フル處ノ如ク、徹夜業ノ存在スル限ハ到底健全ナル職工ヲ得ル能ハサルハ固ヨリ疑ヲ容レサル處ナリ。抑モ健全ナル労働ハ實ニ諸般工業發達ノ要件ナリ、殊ニ紡績工業ノ如キ機械的工業ニ於テハ職工ハ精巧ノ労働ヲ爲スヨリモ、寧ロ規律的ニ機敏ニ立廻ハルノ必要アリ。之ヲ例セハ絲切レタルトキハ直ニ發見シテ之ヲ接キ、不正ノ篠アレハ之ヲ除キ、異種ノ絲アレハ之ヲ區別スルカ如ク、職工活動ノ範圍ハ力役若ハ技巧ニ非スシテ規律ト機敏トニ在リ。而シテ此ノ規律アル機敏ナル労働ハ極テ健全快活ナル精神ノ働作ヲ要シ、到底心身相副ハサルカ如キ者ニ望ム能ハサルナリ。

要之ニ徹夜業ヲ廢止センカ、職工ノ勤續年限ヲ延長シ、且其ノ缺席度數ヲ減少スヘシ。加之職工ノ訓練ト體力ノ健全ヲ促シ、機械ノ整調ヲ來シ、由テ以テ其ノ



功程ヲ増加スヘキコト蓋シ些少ニアラサルヘシ。又徹夜業ヲ廢止シテ職工數ヲ減少スルニ當リテハ比較的強健ニシテ訓練アル職工ヲ撰擇シ得ルノ便宜アルハ多言ヲ要セサルナリ。

以上ハ主トシテ職工ノ數ト其ノ勞働効果ニ就テ述ヘタリ。而シテ其ノ結果トシテ職工費ニ如何ナル影響アルヘキヤヲ按スルニ、各工場ニ於テ晝夜交替業ヲ行フトキハ職工賃ノ多キノミナラス、職工募集費、寄宿舎ノ補助費又ハ足止め策トシテ種々ノ雜費ヲ要スルコト少シトセス。然ルニ徹夜業ヲ廢止センカ此等ノ費用ハ漸次減少スヘキヤ疑ナシ。尤モ職工一人ノ受取ルヘキ賃銀ハ勞働効果ノ増進ト共ニ多少之ヲ増加セサル可カラサルニ至ルヘシト雖、前述ノ如ク諸雜費ヲ減少シ、且勞働效果ヲ増加スルヲ以テ製絲一捆ニ對スル賃金其ノ他職工諸費ハ現今ニ比シ減少ヲ見ルニ至ルヘシ。

右述フル所ハ職工ト徹夜業トノ關係ナリ。而シテ技手以下下級ノ工場監督者ニ就テハ職工ニ關シテ陳ヘタル論定ヲ適用スルモ大差ナカルヘシ。且現今紡績工場ニ使用スル下級監督者ニハ無教育ニシテ機械ノ性質ヲ解セサル者甚

タ多シ。又往々其ノ部下ヲ統御スルニ當リ自儘勝手ノ振舞ヲ爲シ、眞ニ工場ノ監督ニ忠實ナラサル者アリ、故ニ若シ能ク之ヲ刷新セハ大ニ工場ノ管理ヲ改善スルコトヲ得ヘシ。此ノ場合ニ於テ支配人、工務長其ノ他ノ事務員等ニ至リテハ之ヲ半減スルコト能ハサルヘシト雖、工場整理ノ方法ニ依リテハ多少ノ減員ヲ見ルコトヲ得ヘク、徹夜業ノ廢止ニ依リ監督者ヲ精撰スルコトヲ得ルノ利益ハ固ヨリ爭フ可ラサル處ナリ。

#### (五) 原棉及屑物。

現今十六手乃至二十手ノ太絲一捆三百斤ヲ製スルニ原棉凡ソ三百五十斤乃至三百六十斤ヲ要シ、其ノ差ハ屑物トナリ、又ハ塵埃トシテ散失スルモノナリ。今若シ徹夜業ヲ廢止スルトキハ屑物散失ノ割合ニ如何ナル影響ヲ及ボスヘキカニ就テハ或ハ大ニ之ヲ減スヘシト謂ヒ、或ハ必スシモ然ラスト謂フ者アリテ當業者ノ說一定セサルモ、現今晝夜交替業ノ爲機械ノ修繕行届カス職工ノ氣力乏シク、感覺鈍ク、産額及品質ニ於テ夜業ハ勿論晝業ノ成績迄モ影響ヲ蒙リ居ルコト前ニ陳述シタルカ如キ狀況ナリ。元來屑物ノ多寡ハ原料ノ良否ニ因ルモ、



同一ノ原料ヲ以テシ、而モ屑物ノ多キハ主トシテ絲切ノ多キニ由リ、絲切ノ多キハ機械ノ不調子ニ基ク、而シテ機械ノ不調子ハ氣候ノ關係アリト雖其ノ取扱ノ粗漏及修繕掃除ノ不行届ニ原因ス。機械學者ノ説ニ依レハ紡績機械ナルモノハ其ノ据付及取扱完全ナルトキハ道理上粗紡精紡ニ至リ絲ノ切ル、コトナキモノナリ。實際歐米ノ諸工場ニ於テ少數ノ職工ヲ以テ操業シ得ルハ絲切ノ少ナキニ由ルモノニシテ我邦ノ紡績工場ニ於テ絲切ノ多キハ主トシテ機械取扱ノ不完全ナルニ由ルト謂フ。故ニ若シ徹夜業ヲ廢止シ、機械ノ取扱修繕等ヲ叮嚀ニシ、職工ノ氣力ヲ増シ、感覺ヲ鋭敏ニセンカ屑物ノ額大ニ減少スルコト言フ俟タス。尤モ一度機械ノ運轉ヲ中止シ、工場内冷却スルトキハ翌朝仕事始ノ際機械カ順調トナル迄絲切多シト言フハ事實ナリ。然レトモ是唯一時ノ事ニ過キス、且工場内ニ暖房其ノ他ノ裝置ヲ設ケ場内ノ溫度水分等ヲ適度ニスルニ於テハ大ニ此ノ絲切ヲ防クコトヲ得ヘシ。又當業者中或ハ曰ク徹夜業ヲ廢止セハ現今充分整理セル工場ニ於テハ大ナル影響ナシトスルモ、夜間散亂セル棉カ油浸ミテ、油綿トナルコトハ大ニ減少シ得ヘシト。要スルニ原棉及屑物減少ノ

點ニ於テハ徹夜業ノ廢止ハ利益アルコト疑ヲ容レス。而シテ屑物散失ノ減少ハ假令僅少ノ割合ナリトスルモ紡績業ノ經濟上ニハ至大ノ關係ヲ有スルモノナリトス、何トナレハ綿糸ノ原價ハ原棉ノ代價其ノ大部分ヲ占ムルモノナレハナリ。例ヘハ百斤二十五圓ノ原棉三百五十斤工費十五六圓ヲ用キテ一捆ノ綿絲ヲ製造シ得タルニ、假ニ三百四五十斤ノ原棉ヲ用キテ製造シ得ルコト、ナリ、原棉五斤乃至十斤ヲ節約シ得ルニ至ランカ、一捆ノ原價ニ於テハ直ニ二圓内外ノ差違ヲ生スヘシ。況ンヤ屑絲ノ如キハ絲ノ形ヲ爲ス迄ニ幾多ノ工程ヲ經タルモノニシテ、原棉代價ノ外幾多ノ工費ヲ要シタルモノナルニ於テオヤ。故ニ徹夜業廢止ノ爲屑物散失ノ減少ニ及ホスヘキ影響如何ハ徹夜業ノ利害ヲ論スルニ當リ、輕視スヘカラサル問題ナリトス。

(六) 石炭及工場消耗品。

徹夜業ヲ廢止スルトキハ綿絲一捆ノ生産ニ要スル石炭消費額ニ多少ノ損失アルコトヲ免レサルモノノ如シ。然レトモ假ニ多少ノ損失ヲ免レストスルモ、其ノ消費額ヲ綿絲ノ原價若ハ其ノ工費總額ニ比スルトキハ、或者ノ想像スルカ



如ク重大ナル關係ヲ有セサルノミナラス、元來燃料ハ機關師並火夫等ノ注意ノ如何及運轉機械ノ整調ヲ欠クト否トノ事情ニ依リ、其ノ消費額ニ影響スルコト大ナルヲ以テ、徹夜業ヲ廢止シテ工場一般ノ監督ヲ周密ニシ、其ノ整理ヲ見ルニ至ラハ石炭消費額ニ於テモ、却テ節約シ得ルノ見込ナシトセス。

徹夜業ノ廢止ト石炭消費額トノ關係ニ就テ、或ハ曰ク紡績工場ニ於テ晝夜業ヲ繼續セサルトキハ、一旦使用汽罐ヲ冷却セシムルヲ以テ、翌朝ニ至リ再ヒ必要ノ壓力ヲ生スル迄ニハ、相當ノ燃料ヲ費サ、ル可ラス、又夜業ヲ廢止スルモ火災保險ノ契約ノ爲ニ常ニ消防用トシテ一箇ノ汽罐ヲ有効壓力以上ニ保持セシメ置サルヘカラス、是等ノ事情ノ爲要スル所ノ石炭消費額ハ蓋シ些少ニアラサルヘシ。或ハ曰ク徹夜業ヲ廢止スルトキハ工場内ニ於テ適度ノ溫度ヲ保持スルコト能ハサレハ、翌日ノ仕事ニ於テ絲切其ノ他ノ故障ヲ生スルコト多ク、之ニ對シテ暖房ノ方法ヲ施ストキハ爲ニ石炭ノ消費ヲ増スヘシト。然リ而テ此等ノ事情ノ爲徹夜業廢止ニ依リ損失スヘキ石炭消費額ハ何程ノ割合ナルヘキヤト云フニ至リテハ何人ト雖斷言ニ苦ム所ナリ。凡ソ紡績工場ニ於ケル石炭消費

額ハ一萬鍾ノ工場ニテ一日二十四時間ニ約貳萬斤内外ニシテ、製絲額一日太絲約二十五、六捆ト假定セハ大ナル過ナカラシカ。而シテ石炭ノ價格一萬斤ニ付二十五圓トセハ、一捆ニ對スル燃料費ハ貳圓内外ト爲ルヘシ。今徹夜業廢止ノ爲、夜間ノ埋火及翌朝焚出ニ要スル所ノ額ヲ石炭ノ所要總額ニ對シ一割ト假定シ、一日十二時間ノ製絲額ヲ十五捆若ハ十五捆半ト假定センカ、一捆ニ對スル燃料費ハ却テ多少ノ減少ヲ見ルヘシ。(或工場ニ於テ實驗シタル所ニ依レハ夜業ヲ廢シ一日十二時間操業シタル場合ニ於テ埋火及焚出ニ要スル額ハ嚴冬ノ候ト雖、其所要石炭額ノ七厘ニ出ツルコトナカリシト謂フ。)又夜間ノ暖房ニ要スル石炭ノ量ハ今之ヲ推算シ難シト雖、假ニ此等ノ所要額ヲ合シ一晝夜ノ二萬斤ニ對シ、一日十二時間ニ六割即チ一萬二千斤ヲ要ストスルモ、製絲額ニシテ晝夜業ノ六割ニ達スル以上ハ一捆ニ對スル燃料費ニ於テ損得ナキ計算ナリ。以テ石炭消費額ト徹夜業廢止ノ關係カ如何ナル範圍程度ニ於テ紡績工場ノ經濟上ニ影響ヲ及ホスヤヲ推知スルニ足ル。要之ニ石炭ノ消費額ハ徹夜業ノ廢止ニ依リ、比較的或ハ多少ノ増加ヲ見ルコトアリトスルモ、工場ノ經營上必スシモ恢



復シ難キニ非サルナリ。若シ夫レ油糞糶へツト其ノ他ノ工場消耗品ニ至リテハ夜業ノ廢止カ如何ナル關係ヲ及スヤハ茲ニ之ヲ論及セサルモ、晝夜交替業ニ比シ、比較的多少ノ利得アルヘシトハ當業者ノ間ニ殆ント異論ナキ所ナリ。

(七) 利息金。

現今我紡績業者ハ多ク借入金ヲ以テ運轉資金ニ充テ或ハ之ヲ以テ固定資金ノ一部ニ充ツルモノトス。而シテ借入金ノ多少ハ工場ニ依リテ異ナリト雖流通資金ノ殆ト全部ヲ借入金ニ取レル某會社ニ於テハ、現今一柵ニ對スル利息ハ壹圓乃至壹圓五拾錢ト豫算シ居レリト云ヒ。又某會社ノ三十三年上半期ニ於ケル支拂利息ハ一柵ニ付壹圓拾壹錢ニ當リ、同年下半期ハ同壹圓九拾錢ニ當リ、又紡績聯合會ノ調査ニ依レハ三十二年上半期中最高ノ利息ヲ仕拂ヒタル會社ハ一柵ニ付貳拾四圓七拾貳錢七厘同最低ノ利息ヲ仕拂ヒタル會社ハ一柵ニ付五十二錢五厘各會社ヲ通シテ一柵平均貳圓八拾九錢六厘ノ利息ヲ仕拂ヘリ。又三十四年上半期ノ考課狀ニ依リ、某氏ノ調査シタル所ニ依レハ營業費中仕拂利息ノ割合ハ大阪紡績一、四八割、鐘淵紡績一、三七割、九州紡績及福島紡績各一、七

四割、名古屋紡績二、八六割ト云フノ類ニシテ甚シキハ四割乃至四割五歩ニ及ヘルモノアリ。今晝夜業ヲ行フ場合ト徹夜業ヲ廢止セル場合トヲ比較シ、利息金ノ増減ヲ按スルニ、後者ニ在リテハ産額ノ減少換言スレハ原棉使用額、石炭消費額、職工賃、其ノ他諸經費ノ減少ニ伴ヒ、借入金額モ減少スヘキ譯ナレバ、同一ノ柵數ヲ六七日ニテ製出スルト、四五晝夜ニテ製出スルトハ理論上(他ノ事情ヲ一切同一ナリト假定スレバ)日歩ニ於テ差異ヲ生スヘキ筈ナリ。是即チ當業者カ借入金ニハ日歩ハ掛レトモ夜歩ハ掛ラスト云フ所以ナリ。然レトモ利息金ノ多少ハ此ノ如ク單純ナル理論ヨリモ、各工場各般ノ事情ニ依ルモノナルコトハ、前掲ノ如ク各會社ノ間ニ非常ナル相違アルニ依リテ之ヲ知り得ヘシ。

(八) 工費。

綿絲太番一柵ノ製造ニ要スル工費ハ明治三十四年上半期頃ノ計算ニテ約十五六圓ニシテ、少ナキハ約十三圓多キハ十七八圓乃至二十圓ナリ。此ノ内職工賃約五六圓、石炭代約二三圓、其ノ他ハ荷造運搬費、倉敷料、保險料、修繕費、役員給料、職工諸費、諸税及利息等ナリ。今徹夜業ヲ廢セハ此等ノ工費ニ如何ナル影響ヲ



及ホスヘキカハ至難ノ問題ナリ。去レハ茲ニ先ツ晝夜交替業ノ場合ト、全然夜業ヲ廢シ晝業ノミト爲シタル場合トヲ比較センニ、紡績業ニ多年ノ經驗アル當業者中ニモ一梱ニ付壹圓五六拾錢乃至七八拾錢ヲ増スヘシト云ヒ、又約貳圓ヲ増スヘシト云フ者アリ、或ハ四圓ヲ増スヘシト云フ者ナキニアラス。是ノ如ク當業者ノ所説區々タル所以ハ問題自身ノ極メテ困難ナルニ由ルノミナラス、各工場ニ於ケル經濟ノ狀況相同シカラサルニ由ル。現今同シク太絲製造ノ會社ニシテ一梱ノ工費ニ五六圓ノ相違アリ。從テ晝夜交替業廢止ノ工費ニ及ホス影響ニ關スル見解ノ一定セサル亦偶然ニ非サルヲ知ルヘシ。惟フニ各種ノ工費中晝夜交替業ノ廢止ニ依リ増加スヘキ懸念アルモノハ主トシテ石炭代ナルヘシ。而カモ前述シタルカ如ク一萬鍾ノ工場ニ於テ、晝夜業ニテ二萬斤ヲ用キタルモノカ、晝業ノミニテ一萬二千斤ヲ要スト假定スルモ、一梱ニ對スル燃料費ハ増加セサル譯ナルヲ以テ、假ニ此以上ヲ要ストスルモ、一梱ニ對スル燃料費ニ大ナル増加ヲ生スルコトナカルヘシ。次ニ賃金其ノ他職工諸費ハ前述シタルカ如ク、一梱ニ割當テ、漸次減額シ得ルノ見込アリ、今其ノ減額ノ割合ヲ示シ難キ

モ本來工費中大部分ヲ占ムルモノナレハ假令僅少ノ歩合ヲ減額シ得ルモ、尙優ニ燃料費等ノ増額ヲ償フテ餘アルヘシ。又役員ノ給料及旅費其ノ他事務費ハ製絲額ニ伴ヒテ減少セサル性質ノ費目ナレトモ、又一面ニハ會社ノ整理役員ノ心掛及手心ニテ伸縮増減スヘキモノナルヲ以テ、徹夜業ノ廢止ト共ニ事務ノ取扱ヲ整理シ經費ヲ緊縮スルコト必シモ難キニ非サルヘシ。殊ニ現今紡績會社ニ於テハ職工ノ出入頻繁ナルヨリ、其ノ募集並足留メ策ノ爲ニ幾多ノ手數ト經費トヲ要スレトモ、徹夜業ノ廢止ニ依リ、職工ノ出入減少スルヲ得ハ事務費ハ從テ大ニ減少スヘキ見込アリ。其ノ他、油、ヘット等工場消耗品、諸修繕費、保險料、荷造運搬費等ニ至リテハ或ハ増加スヘキモノアリ、或ハ減少スヘキモノアリ、彼是相照シテ大差ナシト看做シテ可ナリ。若夫レ仕拂利息金ヲ工費中ニ算入センカ、所謂日歩ハ掛レトモ、夜歩ハ掛ラサルノ道理ニテ之ヲ一梱ニ割當ツルトキハ増加スヘキ理ナリト雖前述シタルカ如ク、仕拂利息ハ寧ロ斯ル理論通りニ行カスシテ、原棉買入製品ノ賣行等諸般ノ事情ニ依リ非常ノ相違アルヲ以テ、實際ハ徹夜業ノ廢止ト仕拂利息ノ増減トノ間ニ因果ノ關係ヲ生スルコトナカルヘシ。



以上諸般ノ事情ヲ考量シ、之ヲ總フルニ壹柵ニ對スル工費ハ徹夜業廢止ニ依リ必シモ増加スヘキ限ニ在ラス。若假ニ一時幾分ノ増加ヲ免レストスルモ其ノ額僅少ナルヘク深ク憂フルニ足ラサルカ如シ。

(九) 資本金及純益。

明治三十三年末現在、紡績聯合會員五十四會社ノ資本金拂込額三千貳百九拾參萬餘圓、固定資本總額三千八百三拾七萬餘圓ニシテ、差引五百四拾三萬餘圓ハ資本金ノ不足額ナリ。而シテ積立金三百四拾貳萬六千餘圓、社債其ノ他借入金千七百五萬七千餘圓、合計貳千四拾八萬餘圓ト固定資本ノ不足額トノ差即チ千五百四萬餘圓ハ流動資本ニ用キラル、額ナリ。尙此等五十四會社ノ總鍾數ハ百二十四萬鍾ニシテ、一萬鍾割當固定資本ハ三拾萬九千餘圓ナリ。是新舊工場ノ平均ニシテ、今日新ニ工場ヲ設クルトキハ一萬鍾ニ付四拾萬圓以上ヲ要スヘシトハ一般ノ通説ナルヲ以テ、今假ニ一萬鍾四拾萬圓トシ、拂込資本金全部ヲ之ニ充當スルモノトシテ論センニ、拂込資本ニ對シテ紡績業者カ收得セル純益金ハ明治二十一年以來ヲ通算スルニ、凡ソ七分ニ相當ス。三十年以前ニ於テハ約

九分ナリシモ其ノ以後ハ僅ニ五分内外ニ出テサル狀況ナリ。而シテ今若徹夜業ヲ廢止ストセハ純益率ニ如何ナル影響ヲ及ホスヤト云フニ、假ニ一柵ノ工費及一柵ノ價格ニ異同ナク(原棉代ハ無論同一ト看ル)從テ一柵ノ純益ニ異同ナシトシテ論センニ、一萬鍾ノ工場ニ於テ晝夜交替業ヲ行ヒ、一箇年七千五百柵(一日廿五柵、一年營業日數三百日トス)ヲ製造スルト、晝業ノミニテ其ノ六割内外ヲ製造スルトキトハ固定資本四十萬圓ニ對シ純益率ニ於テ少カラサル差異ヲ生スル譯ナリ。即チ一柵四圓ノ純益ト見ルモ、晝夜業ヲ行フトキハ一箇年三萬圓ノ純益ニシテ、固定資本ニ對シ七步五厘ニ當ル。然ルニ晝業ノミニテ晝夜業ノ六割即チ四千五百柵ヲ製シ、一柵ニ付等シク四圓ノ純益トスレハ一萬八千圓ト爲リ、之ヲ四十萬圓ニ割當ツレハ、僅ニ四分五厘ニ相當スヘシ。若又紡績業カ相當ノ景氣ヲ保テル場合ニ於テ、一柵ノ純益八圓ト見ンニハ一萬鍾ノ工場ニ於ケル純益金六萬圓ニシテ、之ヲ四十萬圓ニ割當ツレハ一割五步ノ純益ト爲ル。然ルニ今徹夜業ヲ廢止シ晝業ノミニテ晝夜業ノ六割即チ四萬五千柵ヲ製出シ、仍一柵ノ純益八圓ヲ得ルトセンカ純益金總額三萬六千圓ト爲リ、之ヲ資本金四十萬圓ニ割當ツレハ九步ノ純益ニ當ル。之



ヲ晝夜交替業ノ一割五歩ニ比較スレハ純益六歩ノ減少ナリ。是即チ當業者カ徹夜業ヲ廢止スルコト能ハスト云フ所以ナリ。然レトモ一步ヲ進メテ攷究セシニ、晝業ノミニ依リテ晝夜業ノ六割ヲ製造スト假定セルハ内論ニ見積リタルモノニシテ、優ニ其以上ヲ製出シ得ルノ望アリ。加之機械償却費ハ晝夜交替業ヲ行フ場合ト晝業ノミヲ行フ場合トノ間ニハ大ナル差異アリ。即チ晝夜業ヲ廢止スルトキハ機械償却費ニ於テ大ナル利益アルヘシ。(固定資本四十萬圓ノ内土地建物ニ要スル者ハ約十萬圓、機械費約三十萬圓ナルヲ以テ、今晝夜業ノ場合ニ機械費三十萬圓ノ償却年限ヲ十五箇年トシ、晝業ノミノ場合ニ三十箇年ト假定セハ前者ハ年々一萬三千二百餘金ノ償却ヲ要シ、後者ハ四千三百餘圓ノ償却ヲ要ス。又綿絲一捆ノ價格ハ徹夜業ノ廢止前後ニ於テ異同ナシト假定シタルヲ以テ、一捆ノ純益從テ同一ナルノ結果ヲ生スルモ、徹夜業ノ廢止ニ依リ製品ノ品質ヲ改良シ得ル見込アルカ故ニ、製絲ノ價格ヲ保チ得ル利益アリ。假ニ一捆六圓五十錢ノ純益アリトスレハ一萬鍾一箇年ノ産額四千五百捆トシ、約三萬圓ノ收益アリテ前陳晝夜業ヲ行ヒ、一捆四圓ノ純益アル場合ト同シ。惟フニ徹

夜業ヲ廢止シテ機械ノ整調ヲ保チ、職工ノ勤績訓練ヲ得ハ假令急激ニ製品ノ改良ヲ見難シトスルモ、久シカラスシテ其ノ結果ノ顯ハルヘキヤ疑ヲ容レス。是ヲ以テ徹夜業ノ廢止ニ因リ假令一箇年ノ産額ヲ減スルモ、當業者ハ固定資本ニ對シ從前ト同一ノ純益ヲ收メ得ルノ見込ナキニ非サルナリ。

以上ハ假ニ夜業全體ヲ廢スルモノトシテ立論セリ。若單ニ徹夜業ノミノ廢止ニ止マルモノトスレハ工場ノ整理ト執業時間ノ繰合ニ依リテ晝夜業ノ場合ト同一産額ヲ得ルコト必シモ期シ難キニ非サルヘシ。果シテ然リトセハ前述ノ論旨ハ直ニ之ヲ此ノ場合ニ適用シ難キモ之ニ依リテ其ノ要領ヲ得ルニ庶幾ランカ。之ヲ要スルニ徹夜業廢止ニ伴フ缺陷ハ或ハ製品ノ改良ニ伴フ販賣價格ノ騰貴、或ハ原棉ノ節略、或ハ生産率ノ増加ニ因リ、其ノ他種々ノ方法手段ニ依リ、之ヲ緩和シ得ヘキ餘地綽々タルヲ見ルヘク、要ハ唯當事者ノ手腕ト奮勵トニ待ツアルノミ。思フニ紡績業ノ前途ハ洋々トシテ春海ノ如キモノアルト同時ニ之ニ横ハレル障碍モ亦幾多排除ヲ要スヘキモノアラン、而シテ其ノ障碍ノ最モ恐ルヘキモノハ寧ロ職工ノ供給ニ關スル問題ニ非スヤ。現今工場ニ於テ最



モ苦心スル所ハ職工ノ缺乏ニシテ、山間ト云ハス、海濱ト云ハス、全國ヲ舉ケテ紡績職工募集員ノ足跡到ラサルノ地ナシトハ當業者ヨリ屢聞ク所ナリ。而モ尙職工ノ缺乏ヲ訴フルコト此ノ如キモノアルハ何ソヤ、本調査員カ各地ニ出張ノ序ヲ以テ職工出身地ニ就キ聞ク處ニ依レハ、紡績工場ニ子女ヲ出スヲ好ム者少シ。而シテ其ノ理由ハ勿論會テ紡績工場ニ行キタル者ノ成績不良ナルニ原因ス而シテ其ノ所謂成績不良トハ或ハ其ノ子女ノ死亡、疾病、或ハ其ノ氣質嗜好ノ墮落、經濟上ノ不利益、募集員ノ誑詐等種々アリト雖、要スルニ一度紡績工場ニ子女ヲ送り、其ノ成績ヲ鑑ミタル地方ニ於テハ又其ノ子女ヲ之ニ送ラントスル者少ナシ、此ニ於テカ募集員ハ漸次新規ノ地ニ蹈入ルト同時ニ、百方甘言ヲ逞フシ、無智ノ子女ヲ誘致スルコト、ナルナリ。其ノ結果紡績工場ノ職工ハ漸次智徳體質ニ於テ低落スルニ至リ、而モ尙缺員ヲ補フニ遑アラサル狀況トナレルニハ非サルカ。此ノ如キ狀況ニテ推移センカ久カラスシテ斯業ハ職工供給ノ點ヨリ蹉跌スルノ憂ナキカ。假ニ職工一人ノ賃錢ハ大ニ騰貴セストスルモ、募集員其ノ他ノ諸費ハ漸ク増加シ、勞働効果ハ寧ロ減スルモ増スコトナク、一相ニ對スル

職工費ハ歐米ニ比シ寧ロ増加スルコト決シテ遠キニ非サルヘシ、試ニ現今ノ職工費ヲ以テ歐米ニ比スルモ一相當リニ算スレハ甚シキ徑庭ナキカ如シ。此ノ故ニ紡績業ノ前途ヲ按スレハ今ヨリ深ク思フ此ニ致シ、社會一般ヲシテ安ンシテ其ノ子女ヲ紡績工場ニ入ラシムルノ信用ヲ博シ、徒ニ烏合ノ多衆ヲ誘致スルコトヲ止メ、規律アル職工ヲ訓練スルニ勤メ、徐ニ其ノ利益ヲ收ムルノ計ヲ爲サ、ルヘカラス。而シテ之ヲ爲スニハ徹夜業ヲ廢シテ職工ノ健康ヲ保全シ、工場ノ規律ヲ正フスルカ如キハ最モ緊急ナル要務ナラン。

叙上ノ如ク徹夜業ノ禁止ハ工場勞働ノ取締上最モ緊切ノ事項ナリト雖、他方ニ於テ其ノ禁止カ工場ノ現狀ニ及ホス影響ニ付テモ之ヲ省慮セサルヘカラス。左レハ工業界ノ機運未タ熟セサルニ先チテ漫リニ之ヲ提唱センカ、工場法ハ遂ニ議會ヲ通過スルノ機アルヘカラス。然レトモ工場法ノ規定ハ獨リ徹夜業禁止ノミヲ規定スルモノニ非ラス、偶之ヲ規定セントスル爲法案全體ノ制定ヲ阻止スルカ如キコトハ是亦忍フヘカラサルコトニ屬ス。左レハ最初ノ明治二十年案ハ婦女及十四歳未滿ノ職工ニ對シ、夜間ノ使用ヲ禁止シタルニ拘ラス、爾後ノ諸案ハ嘗テ



之ヲ規定シタルコトナシ。然ルニ第二十六議會提出案ハ始メテ十箇年ノ猶豫期間ヲ設ケテ之ヲ實行スヘキ旨ヲ規定シタルヲ以テ、茲ニ紡績業者ノ反對ヲ見ルニ至リタリ、反對ノ趣旨左ノ如シ。

女子徹夜業禁止反對理由(大日本紡績聯合會陳情書)

今回政府ヨリ帝國議會ニ提出セラレタル工場法案ニ規定セル如ク若今後十年ニシテ女子ノ徹夜業ヲ禁止シ、其ノ結果一般徹夜業ノ全廢ヲ見ルコトアラシニハ本邦紡績業者ハ之レカ爲海外ニ於ケル棉糸棉布ノ販路ヲ失ヒ、内地ニ退嬰スルノ止ムナキニ至ルヘシ。假リニ數歩ヲ譲リ幸ニ棉糸棉布ノ輸出ニ何等ノ影響ヲ及ホササルモノト想定シ、十年後ニ於ケル棉糸ノ内地ニ於ケル需給ノ關係ヲ觀ルニ其ノ供給額ニ大缺乏ヲ來シ延イテ紡績事業界ニ一大混亂ヲ現出スルニ至ルヘキハ殆ント疑ヲ容ル、ノ餘地ナキナリ。左ニ其ノ理由ヲ單簡ニ説明セン。

第一本邦棉糸需給ノ現状。本邦ニ於ケル現在總鍾數ハ約二百萬鍾ニシテ、内約三十萬鍾ハ中糸及細糸紡出ニ使用セラル、モノナレハ、太糸紡出ニ使用セラ

ル、鍾數ハ約百七十萬鍾トス。之ニ依リ紡出セラルヘキ太糸ハ全運轉ノ場合ニ於テ約三十萬俵ヲ産スヘク。其ノ内二十萬俵ハ輸出向棉布原料トシテ用キラレ、他ノ三十萬俵ハ棉糸トシテ輸出セラル、モノナレハ、差引殘額八十萬俵ハ内地供給高ト概算セラル、ナリ。

第二徹夜業廢止後ノ棉糸需給。然ルニ若シ今後十年ニシテ徹夜業ヲ全廢セシカ其ノ結果トシテ太糸總出來高ハ約五割五分(實驗ニ依レハ晝業出來高ハ晝夜業總出來高ノ五割五分ヲ出テス)即チ七十一萬五千俵ニ減シ、其ノ總額ヲ内地ニ供給スルトスルモ既ニ十萬俵弱ノ内地供給不足ヲ示セルニ、更ニ此ノ内ヨリ前記輸出向棉布原料用二十萬俵及輸出向棉糸三十萬俵ヲ控除スレハ内地供給額ハ二十一萬五千俵ト爲リ、結局五十八萬五千俵ノ内地供給不足ヲ來スヘシ。尤モ今後十年間内地需要額ノ増加ヲ來スヘキト共ニ鍾數ニ於テモ亦之ニ準シテ増加スヘキハ必然ニシテ、今假リニ年々ノ内地需要增加率ヲ從來ノ經驗ニ徴シ、毎年三萬俵宛トシ、之ニ對スル鍾數增加率モ亦年々三萬俵ヲ製出シ得ヘキ鍾數、即チ四萬鍾トスル時ハ十年後ニ於ケル内地供給不足額ハ依然トシテ五十



八萬五千俵ナリトス。

或ハ曰ク今後十年ニシテ右ノ不足額ヲ現出スルコト果シテ明瞭ナルニ於テハ、其ノ不足額ヲ標準トシテ今後十年間ニ此不足額ヲ補フ丈ケノ鍾數ヲ増加スヘシト、サレト是レ謬論ナリ。何トナレハ、

(一) 十年後ニ於テ五十八九萬俵ノ内地供給不足額ヲ見ルコト明瞭ナルモ、今後十年間ハ決シテ何等ノ不足ヲ見ルニ非サレハ、此ノ間ニ於テ實際ノ需要額以上ノ鍾數増加ヲ爲スニ於テハ、需給ノ權衡忽ニシテ崩レ、紡績界ノ恐慌ヲ起スヘキコト必然ナレハ、苟クモ多少紡績事業ニ關スル智識アルモノハ斯カル無謀ノ舉ヲ爲サ、ルヘシ。

(二) 着實ナル事業家ハ十年後若クハ數年後ニ於テ實施セラルヘキ法律ヲ唯一ノ根據トシテ事業ヲ起シモノナカルヘシ。蓋シ萬一其ノ法律ニシテ變改又ハ實施期ヲ延長セラルルコトアランカ、其ノ事業ハ根底ヨリ覆サル、ノ恐アレハナリ。

(三) 徹夜業廢止ノ結果ハ利益ノ大削減ヲ來スヘキコト必然ナレハ事業界ハ之レ

ニ對シテ投資スルヲ躊躇スヘシ。

第三徹夜業廢止ノ結果。前記ノ理由ニ依リ十年後ニ於テ萬一徹夜業ヲ廢止スルニ於テハ、其ノ結果ハ十年後ニ至リ(一)棉糸布ノ輸出ヲ停止スルカ、又ハ(二)内地供給額ノ大不足ヲ來スカ、二者ノ内何レカ其ノ一タラサルヘカラス。而シテ若シ前者ノ如クンハ是レ我國棉製事業ノ大退歩ト云フヘク、若シ後者ノ如クンハ是レ實ニ我國紡績界ニ大波瀾ヲ起スモノナリ。要スルニ今回政府提出ノ工場法案ハ我國紡績事業ノ進歩ヲ阻害スルモノナルノミナラス、寧ロ紡績事業ノ根底ヲ撼動セントスルモノト云フモ不可ナキナリ。

此等ノ議論ニ對シテハ政府ニ於テ公然其ノ反駁ヲ爲スニ至ラスシテ議案ハ撤回セラレタリ。爾後更ニ一層ノ調査ヲ進メテ、徹夜業ノ職工健康ニ及ホス影響ノ甚大ナルコト、及徹夜業ノ禁止ハ決シテ紡績業ノ基礎ヲ殆カラシムルモノニ非ル經濟上ノ根據ヲ明ニスルコトニ努メ、一方ニ於テハ假令猶豫期間ヲ設クルモ一時ニ徹夜業ヲ禁止スルヲ以テ、策ノ得タルモノニ非ストシ、漸次ニ之ヲ禁止スルノ手段方法ニ付テ考慮ヲ廻ラシタリ。



徹夜業漸禁ノ方法ニ關シ各種ノ案ヲ立テタリ、今其ノ主要ナルモノヲ左ニ録ス。

第一案

工場法施行後五箇年間に滿十三歳以上ノ者ノ夜業ヲ禁止シ、次ノ二箇年間に一周年間二箇月ヲ限リ十四歳未滿ノ者及十六歳未滿ノ女子ノ夜業ヲ禁止シテ此ノ期間夜業休業ヲ餘儀ナクシ、爾後二箇年毎ニ此ノ期間ヲ一箇月宛増加シ、且漸次職工ノ制限ヲ嚴ニシ以テ工場法施行後十五箇年ニシテ、夜業禁止ノ目的ヲ達スルモノトシ、規程ノ要領ヲ左記ノ如クセントス。

最初二箇年	一周年中連續	二箇月間	十四歳未滿ノ者及十六歳未滿ノ女子夜業禁止
次ノ二箇年	全	三箇月間	上
次ノ二箇年	全	四箇月間	上
次ノ二箇年	全	五箇月間	十五歳未滿ノ者及二十歳未滿ノ女子夜業禁止
最後ノ二箇年	全	六箇月間	上

第二案

工場法施行後三箇年間に十二歳以上ノ者ヲ、次ノ四箇年間に十三歳以上ノ者

ヲ夜業ニ使用シ得ルモノトシ、七箇年ヲ經過ノ後ハ一箇年一定ノ期間ハ十四歳未滿ノ者ヲ夜業ニ使用スルコトヲ禁止ス。斯ク夜業ニ使用スル職工ノ年齢ノ制限ニ依リテ最初ノ二箇年間に一ヶ年二箇月以上ノ夜業休止ヲ餘儀ナクシ、次ノ二箇年間に之ヲ四箇月以上トシ、以後二箇年ヲ經ル毎ニ二箇月ヲ増加シテ、九年目ヨリ全部休止セシムルモノトス。

以上ノ兩案ニ付實施上ノ難易如何ヲ審案スルニ、夜業休止期間内ハ夜業期間ト同數ノ職工ヲ養ヒ置カサルヘカラス、即チ他日夜業ヲ開始スル際ヲ慮リ過剩ノ職工ヲ雇傭スルノ結果ヲ生シ、工場經濟ニ不利ヲ生スルノミナラス、年齢ノ制限ヲ漸次ニ高ムルコトニ依リテ事實上夜業ノ休止ヲ餘儀ナクセシムルカ如キハ法令ノ規定トシテ明截ヲ缺クモノト思考シタルヲ以テ、更ニ別案ヲ立ツルコトトセリ。是即チ四十三年ノ諮問案ニ現ハレタルモノナリ。

此ノ案ニ依レハ最初五箇年間に之ヲ現在ノ儘ト爲シ、爾後ノ十箇年ヲ二期ニ區別シ、最初ノ五箇年(施行後六年目)ハ夜間ニ於テ晝業職工ニ對シ二割ヲ減シタル職工ヲ使用スルカ、又ハ二時間以上ノ作業休止ヲ行フカ、其ノ孰レカヲ任意ニ選擇セシ



ムルコトトシ、次ノ五箇年間ハ四割ヲ減シタル職工ヲ使用スルカ、又ハ四時間以上ノ作業休止ヲ爲スカニ付テハ工業主ノ任意選擇ニ委ネタリ、尤モ此ノ方法ハ其ノ孰レヲ選フモ生産ニ及ホス影響ニ於テ大差ナシ。而シテ職工ヲ二組ニ分チ、六時交替ノ制ヲ採ル工場ニシテ、第二ノ方法ニ依ルコトヲ不便トスル場合ニ於テハ第一ノ方法ニ依リ、午後六時ヨリ午前六時迄ノ間ニ就業スル組ノ員數ヲ減スルノ方法ニ依ルヘク、十二時交替ノ制ヲ採ル工場ニシテ第一ノ方法ニ依ラサルトキハ作業休止時間ヲ午後十二時ノ前後ニ置キ、職工ヲシテ半途ニ操業ヲ停止セサラシムルヲ得ヘシ。斯ノ如クニシテ漸次夜業ヲ減縮スルト共ニ之ニ相當スル生産額ノ減少ヲ補充スル爲ニ必要ナル新施設ハ序ヲ逐フテ行フコトヲ得セシメ、十五箇年ノ後初メテ全ク夜業ヲ廢止スルニ至ラシメントスルニ在リ。

此ニ對スル答申意見ハ何レモ夜業禁止ノ精神ヲ諒トシタルモノノ如シ。而シテ紡績聯合會及工業協會、其ノ他數多ノ商業會議所ハ階段ヲ設ケテ漸次禁止セントスル方法ニ依ラスシテ、猶豫期間内ニ於ケル一切ノ準備方法ハ工場主ニ一任スヘシトノ條件ヲ付シテ徹夜業ノ禁止ニ同意ヲ表スルコトトナリ。生産調査會モ亦同様ノ意見ナリシヲ以テ、政府ハ此等ノ意見ヲ容レ十五箇年後ニ於テ一時ニ全禁ヲ行フモノト決シタリ。

十五箇年後ニ於ケル夜業禁止ノ紡績業ニ及ホス影響ニ關シテハ種々討議ヲ重ネタル所ニシテ、其ノ大要左ノ如シ

夜業禁止ノ紡績業ノ經濟ニ及ホス影響ハ(一)生産費ノ増加(二)資本ニ對スル利益ノ減少トシテ現出スヘシ。而シテ生産費ノ増加ト利益減少ノ程度ハ如何カアルヘキヤノ問題ニ付テハ、種々ノ說ヲ立テ得可キモ、夜業禁止ノ實行迄ニ相當ノ時日ヲ置キ相當ノ用意ヲ以テ斯業ノ經營上ニ改良ヲ實行センカ、此ノ影響ノ程度ハ一般ニ於テ想像スルカ如ク大ナルモノニ非ス。

先年紡績業不振ニ際シ某工場ニ於テ工場ノ一半ニ對シ二箇月間夜業ヲ休止シタルコトアリ、當時此ノ實驗ニ基キ工場全部晝夜業ヲ營ム場合ト十二時間ノ夜業ヲ廢止シタル場合ニ於ケル營業成績ヲ算出セリ、今參考ノ爲其ノ要領ヲ掲載スレハ左ノ如シ

(一) 紡績總錘數

約四萬餘錘



運轉日數

三百二十一日

(二) 紡出綿糸平均番手

十八番手強

(三) 綿糸出來高

(一) 晝夜業ノ場合  
(二) 晝業ノ場合

三萬余捆(一〇〇〇)  
一萬七千六百余捆(五八)

晝夜業ト晝業ノ成績比較表

借方 對比	借方		科 目	貸方		貸方 對比
	晝夜業ノ場合	金額		晝業ノ場合	金額	
、五六三	二、四五六、八六四、二〇〇	一、四四五、九三四、九六七	製糸賣上代	一、〇〇二、六九九、八六〇	一、四八四、六五〇、七六六	、五五五
、五六六	四四、七〇五、三三〇	三五、四三三、八〇三	屑棉賣上代	一三、五六〇、八六三	一六四、七〇〇、三七六	、八二二
、八八四	六、二五二、〇九九	五、五三六、〇〇九	雜品賣上代	一四三、六六五、八二五	三三六、二〇五、九四〇	、六三五
、六五〇	九、六二二、六九九	六、二五七、四〇〇	雜收入	二五、八八二、四八三	三五、二七二、七六六	、七三五
			原棉需用高	一、〇〇二、六九九、八六〇	一、四八四、六五〇、七六六	、五五五
			社員給料	一三、五六〇、八六三	一六四、七〇〇、三七六	、八二二
			職工給料	一四三、六六五、八二五	三三六、二〇五、九四〇	、六三五
			工場消耗品	二五、八八二、四八三	三五、二七二、七六六	、七三五
			石炭消費高	四八、八九四、〇三〇	八九、〇六八、六四〇	、五六二

借方 對比	借方		科 目	貸方		貸方 對比
	晝夜業ノ場合	金額		晝業ノ場合	金額	
、五六六	二、四五六、八六四、二〇〇	一、四四五、九三四、九六七	原棉諸掛	五、一三三、〇〇〇	九、九九〇、八八八	、五九九
			四十玉入製糸荷造費	八、一四〇、七〇五	一一、七六九、八四〇	、六九二
			二十玉入同上	一三、〇四五、四七〇	二〇、四九六、六二六	、六三七
			製糸運搬費	二、四四一、七八三	三、四三三、八二二	、七二二
			屑糸棉荷造費	九、五二二、八八五	二、三三三、四六八	、四二六
			器械修繕	一〇、四四三、八六六	三〇、五四八、五四八	、三四二
			他ノ諸修繕費	八、一〇三、五七九	一三、六九一、七二二	、五八六
			火災保險料	九、七七〇、四〇一	一一、五六二、四八	、九七二
			棉花保險料	一、〇七四、八八四	二、二二二、三〇〇	、五四五
			海上保險料	一、二二二、六三五	六、三七三、三六八	、三八〇
			寄宿舍費	二、四三三、三三六	八、九三三、六三二	、一五四
			職工募集費	一、三三六、六〇〇	六、五七四、七三三	、七二七
			人夫賃	四、七八二、六六〇	一、九九七、六五〇	、二、六五三
			諸雜費	五、二九八、七九三	六、六三六、八〇〇	、一、一六四
			諸利息	六、五三九、九六五	四四、六三九、一六七	、三五三
			仕拂利息	一五、七七八、三三〇	二、三九〇、六三三、七二七	、五九〇
			小計	一、四一八、九四四、二一七	二、三九〇、六三三、七二七	、五九〇







社 員 給 料	職 工 賃 銀	石 炭 代	油 工 場 用 品 其 他 ノ 消 耗 品 費	機 械 修 繕 費	建 物 修 繕 費	荷 造 費	職 工 募 集 費	衛 生 費 其 他 ノ 職 工 費	諸 稅 、 運 賃 、 利 息 、 倉 庫 料 、 保 險 料 等	聯 合 會 費	雜 費	計
一、〇〇九	八、五七七	二、一四九	九一八	四六六	一、九六一	六〇一	二、四三〇	三九七	五二二	甲一九、〇一六		
八、六三六	二、二三四	九五九	三九二	二一五	一、三六九	四〇二	三、六六三	一三六	乙一八、一八三			
一、一〇九	八、六〇六	二、一九二	九三八	四〇七	一、六六五	四二八	二、五一七	三二四	丙一八、五四五			
二五%	七%	五%	五%				一五%					
			三〇%	三〇%			三〇%					
一、三八六	九、二〇八	二、三〇二	九八五	二八五	一七一	一、六六五	二一四	三二四	丁一九、五六七			

三一八

備考

丙丁ノ差壹圓貳錢貳厘ハ夜業十二時間ノ操業ヲ全廢シテ晝業十二時間ノ操業ト爲シタル場合ニ於ケル二十手一捆ノ工費ノ推定増加額ナリ

尙生産費ノ増加及資本ニ對スル利益ノ減少ニ關シテ卑見ヲ開陳スヘシ。生産費中重要ナル原棉ノ相場ハ時ニ依リ少カラサル高低アルヲ以テ暫ク措キ、單ニ工費ノ増減ニ付述ヘンニ、同一番手ノ糸ト雖原棉ノ適否機械ノ精粗職工ノ良否及多少等ニ依リテ出來高ニ相違アリ、工場經理ノ巧拙ト出來高ノ多少ハ工費貴廉ノ岐ル、要因ナリ、故ニ同一番手ノ糸ト雖其ノ生産ニ要スル工費ハ工場ニ依リテ大ニ異ナルナリ。而シテ工費ハ各社ノ秘スル所ニシテ之ヲ探知スルコト頗ル困難ナルモ、從來ノ調査ト最近ノ調査トニ依リテ、現時棉糸相場ノ標準タル左二十手ノ工費ニ付述ヘンニ、現時二十手一捆ノ工費ハ十八九圓ナルカ、將來夜業十二時間ノ操業ヲ全廢スルトキハ、工費中社員給料、利息、諸稅、保險料等ハ約三割ノ増加ヲ來シ尙職工賃金、石炭代、油其ノ他ノ消耗品等ニモ多少ノ増加ヲ來スモ、機械修繕費、職工募集費其ノ他職工ノ收容ニ關スル費用等ハ二三割乃至四五割ノ減少ヲ來スヲ以テ、結局工費ノ増加率ハ七八分ニシテ多クモ一割内外ヲ出テサルヘシ。工費ノ増加ハ生産費ヲ高ムルヲ以テ當業者ノ利益ヲ減殺スルコト大ナルカ如キモ、左二十手ヲ百二十圓トスルトキハ之ニ對スル二圓未滿ノ増加ハ原棉ト絲



價ノ差益大ナルトキハ、左程苦痛ナラサルヘク供給ノ不足ニ因ル絲價ノ昂騰ハ一時ノ變態ナルヲ以テ之ヲ別トシ商況普通ノ場合ヲ考察スルニ、夜業ノ廢止ニ伴フ自然ノ結果タル絲價ノ改良ニ對シテハ其相應ノ代價ヲ以テ取引セラルヘク單ニ工費ノ増加ノミヲ顧慮スル要ナキカ如シ。或ハ云ハン内國需要ニ對シテハ暫ク措キ、清國市場ニ於テ印度絲又ハ支那絲ト競争スルコト能ハサルニ至ラント。之ニ對シテ多少ノ懸念ナキニ非サルモ今日清國市場ニ於ケル彼我綿絲ノ賣行狀況ヲ見ルニ單ニ價格ノ貴廉ニ由ルニ非スシテ、我綿絲ハ其ノ品質最モ精良ナルヲ以テ、支那絲ニ對シテハ勿論印度絲ニ比スルモ常ニ上値ニテ販賣セラレ、等シク本邦ニテモ其ノ精良ナル品種ハ常ニ一二圓以上上値ニ取引セララルル狀況ナレハ、絲價ノ改良ニ伴フ値上ハ需要者ヲ失フノ因タラサルナリ。故ニ夜業禁止ニ依リテ商勢ヲ轉倒スルカ如キコトナカルヘシ。

尙清國ニ於ケル綿絲紡績業ノ進歩ト綿絲需要ノ將來ヲ察スルニ嘗テ我手紡絲ニ代ハリタル印度絲ノ輸入増加ハ我紡績業ノ進歩ヲ促シテ遂ニ輸入絲ヲ驅逐スルニ至リ、尋テ綿布輸入ノ増加ハ織布業ノ興起ヲ促シタルヲ以テ、漸次輸入粗布ヲ

驅逐スルニ至リ、更ニ細絲ノ製造ヲ進メテ其ノ需要ノ増加ニ應シ、又織布業ニ一段ノ進歩ヲ遂ケツ、アル我邦ノ棉業ト略ホ同一ノ徑路ハ、清國ニ於テモ亦現ハルヘク、我對清棉物貿易ノ將來ハ今日ト其ノ趣ヲ異ニシ、太絲ノ輸出ハ比較的増加セサルヘキモ、細絲及棉布ノ輸出ハ増加スヘク、殊ニ棉布ノ輸出ヲ大ニ努ムヘキ運命ヲ有スルノミナラス、内國ニ於ケル手機製織ノ力織機製織ニ變遷スヘキ將來ニ對シテ我綿絲品質ノ改良ハ一層緊切ノ事タルナリ。

夜業ノ廢止ニ依リテ利益ノ減少スルハ已ムヲ得サル次第ニシテ、其ノ要因ハ(一)製額ノ減少(二)生産費ノ増加是ナリ。而シテ生産費ノ増加ハ絲ノ値上ニ依リテ之ヲ償フトスルモ、夜業十二時間ノ操業廢止ハ製額ニ四割乃至四割五分ノ減少ヲ來スヲ以テ、明治四十二年末ニ至ル五箇年ノ營業成績ヨリ計算スレハ資本ニ對スル利益及配當ノ割合ハ

最近五箇年ノ成績

拂込資本ニ對スル純益ノ割合	二割六四
同 配當率	一割七一

夜業廢止後

一割四五——一割五八
〇割九四——一割〇〇



斯ノ如ク減少スル譯ナリ。

上記ノ如ク夜業廢止後ニ於ケル推定成績ヲ從來ノ成績ニ比較スルトキハ、今日夜業廢止ノ可否ヲ論斷スルハ聊カ早計ナルカ如ク感スル者アラシモ現狀ノ儘ニ放任セハ如何ナル結果ヲ來スヘキヤ、左ノ諸問題ニ對セハ蓋シ思半ニ過ルモノアラシ。

- (一) 現狀ノ儘ニテ職工ヲ長ク勤續セシメ得ヘキヤ、
- (二) 其ノ大部分嫁期ニ先ツ數年ノ工場勤務ヲ目的トスル職工ニ對シテ技能ノ上達ヲ望ミ得ヘキヤ、
- (三) 未熟ノ職工ト夜間操業ニ基ク欠點ヲ艾除シテ今後益々製品ノ改良ヲ遂ケ得ヘキヤ、
- (四) 職工ノ募集上ノ困難ト之カ收容ニ尠カラサル費用ヲ投シツ、アル缺陷ヲ此ノ儘ニ放任セハ如何ナル結果ヲ來スヘキヤ、
- (五) 製品ノ改良ヲ遂クルコト能ハストセハ如何ニシテ内外市場ニ於テ先進國ノ商品ト競争シ得ヘキヤ、

(六) 機械其ノ他ノ設備ニハ今後益々多額ノ費用ヲ要スルニ至ルヘク夜業ヲ繼續シテ機械相當ノ命數ヲ保タシメ且其ノ固有ノ能率ヲ發揮シ得ヘキヤ、

(七) 以上ノ諸問題ヲ考察シ今日ノ儘ニテ將來長ク今日迄ノ如キ比較的良好ノ成績ヲ持續シ得ヘキ見込アリヤ、

斯ノ如キ理由ニ依リテ早晚夜業ヲ廢止スル必要起ルヘク、當業者任意ノ休止ハ事情切迫ノ曉ニ非サレハ之ヲ望ムコト能ハス。是レ國民衛生上ノ問題ノ外斯業ノ將來ニ於ケル經濟問題ヲ考慮シテ、敢テ之ヲ禁止スルノ必要ヲ認メタル所以ナリ。

右ニ對シ議會ニ於テハ多少ノ議論アリシト雖當時當業者間ニ何等反對ノ氣勢ヲ示スモノアラサリシヲ以テ、永年ノ懸案タリシ本問題ハ提案ノ通可決セラレタリ。

尙參考ノ爲紡績業ニ關スル統計二、三ヲ摘録スヘシ

其ノ一 綿絲紡績業統計表

(一) 資本額及錘數表



期	別	會社數	以上ノ内織 布兼業ノ會社	資本總額	拂込本額	諸積立金	錘數	織機臺數
明治四十一年	六月末	五	一〇	八八,四八一,三〇〇	五八,五五五,五三六	三,九三三,八三九	一,六三三,七四三	九,二九五
全 四十二年	六月末	五	一〇	八五,五三一,三〇〇	五八,三九七,三九五	三,一八九,六四四	一,六九五,八七五	九,六九六
全 四十二年	十二月末	五	一〇	八六,六三三,三〇〇	五九,七九三,七三〇	三,八二五,七一九	一,八四三,五九六	一〇,一〇九
全 四十二年	六月末	五	一〇	九五,八七一,三〇〇	六四,五二一,〇〇〇	三,七八四,四七〇	一,九五四,八九三	一〇,一〇〇
全 四十二年	十二月末	五	一〇	九三,八七一,三〇〇	六四,四〇一,五〇〇	三,六二二,五二一	一,〇〇四,九九八	一〇,一〇〇
全 四十二年	六月末	五	一〇	九四,三七二,三〇〇	六七,五五六,〇三三	三,四六八,九六七	一,〇九九,七九四	一〇,一〇〇
全 四十二年	十二月末	五	一〇	八八,〇〇〇,一〇〇	六三,三三三,九四五	三,三九九,九四三	一,〇〇〇,〇〇〇	一〇,一〇〇
全 四十四年	六月末	三	一六	八八,一六〇,一〇〇	六四,三四七,一六四	二,四七八,八七三	一,一七〇,七九六	一〇,四三三
全 四十四年	十二月末	三	一六	八六,四六五,一〇〇	六二,九四三,五九三	二,五五六,一三四	一,一五六,〇〇九	一〇,四三三
全 四十五年	六月末	三	一六	一〇五,一三六,四〇〇	七二,三六六,四九五	二,六五六,三三四	一,二七六,七四八	一〇,八八六
全 四十五年	十二月末	三	一六	一〇五,一三六,四〇〇	七二,三六六,四九五	二,六五六,三三四	一,二七六,七四八	一〇,八八六
大正元年	十二月末	四	一六	一〇五,一三六,四〇〇	七二,三六六,四九五	二,六五六,三三四	一,二七六,七四八	一〇,八八六

(二) 紡績會社純益金表

期	別	會社數	資本拂込額	毎半期純益金	純益金ノ拂込資 本ニ對スル割合	當期配當金	配當金ノ拂込資 本ニ對スル年率
全 四十一年	上半期	二	五七,一九三,五八六	三,三七三,〇一四	〇,五五五	三,二八二,五七五	一,一五
全 四十一年	下半期	二	五七,五九三,三八五	三,二四三,三三三	〇,五五六	二,九三三,八六四	一,一五

(三) 綿絲ノ製造額輸出入額及内地需要高

年次	内地製造高	綿絲輸入高	以上合計	綿絲輸出高	内地需要高
明治四十一年	八七八,五七〇	四,五五二	八八三,一二二	一六七,八四二	七一五,二八〇
全 四十二年	一,〇二五,二四四	三,二〇四	一,〇二八,四四八	二五八,八七八	七六九,五七〇
全 四十二年	一,一三四,七八〇	一,〇一六	一,一三五,七九六	三四七,六三三	七八八,一六三
全 四十四年	一,一二九,一六五	一,八四三	一,一三一,〇〇八	二八五,〇〇九	八四五,九九九
全 四十五年	一,三五二,九九二	一,八九五	一,三五四,八九二	三七四,九三二	九七九,九六〇



備考 一 相ハ四十八貫入トス

其ノ二 絹絲紡績業統計表

年次	絹		絲		合	
	鍾數	製造額	鍾數	製造額	鍾數	製造額
明治四十二年	七、五七一	二、三六、四六八	二、四、二四五	一、四八、七四七	九、五、八一六	三、八五、二一五
同 四十三年	六、三、一七〇	二、五三、四六六	二、三、三七五	一、六三、九一三	八、六、五四五	四、一七、三七九
同 四十四年	六、四、四二六	二、四四、四四一	二、二、三九八	一、五五、六〇三	八、六、八二四	四、〇〇、〇四四

備考 絹絲紡績ヲ營ム所ハ三會社ハ工場ナリ

其ノ三 麻絲紡績業統計表

年次	鍾數		製造額	
	鍾數	製造額	鍾數	製造額
明治四十二年	二、五、一一一	七、五七、八九八	一、九、〇六二	一、二四九、一四九
同 四十三年	一、九、〇六二	一、四〇、一、八六四	二、三、六一四	
同 四十四年				

備考 麻絲紡績ヲ營ム所ハ帝國製麻株式會社ノ五工場小泉合名會社都賀濱工場ヲ其ノ重ナルモノトシ資本金約五百萬圓ナリ

其ノ四 毛絲紡績業統計表

製品ノ重ナル種類	同上製造ノ工場數		織物ノ製造高	
	鍾數	製造額	鍾數	製造額
各種絨、セルヂス、毛布肩掛膝掛類	四	四六、五四〇	約九、三〇〇、〇〇〇	
フランネル	一	三、五七〇	約五〇〇、〇〇〇	
モスリン	一	一、四四、〇二〇	一、〇〇〇、〇〇〇	
合計	一〇	一、四四、〇二〇	一、六八五	

備考

(一) 本表中ニハ官立工場ヲ含マス拂込資本金ノ總額約一千五百萬圓ナリ

(二) 毛絲紡績ノミヲ専門トスルモノナク孰レモ皆紡織兼營ナルヲ以テ毛絲ノミノ製額明カナラス製織品ノ價額概算ヲ掲ケタリ

第三項 業務ニ關スル制限

婦女幼少者ハ危險ヲ自覺セサル爲、又ハ操業ニ熟達セサル爲、或ハ監督者ノ不注



意ニ依リテ危険ヲ冒ス場合多キヲ以テ、危険ナル業務ニ從事セシメサルコトヲ要ス。其ノ他身體ノ發育尙不十分ニシテ、注意及智識ノ足ラサル幼少者ハ衛生上有害ナル業務ニ從事スルヲ禁セサルヘカラス。此ノ趣旨ノ條項ハ二十年案ニ於テ既ニ之カ規定ヲ設ケタリ。即チ農商務大臣ハ職工ノ使用方法カ健康又ハ品行其ノ他經濟ノ發達ヲ害スト認ムルトキハ、特別ノ制限ヲ加ヘ又ハ禁止スルコトヲ得ト規定セリ。三十一年案ニ於テハ婦女及十四歳未満ノ者ニ對シ、略同様ノ規定ヲ設ケ、三十五年案ニ於テハ十六歳未満ノ男女及女子ニ關シテ規定シ、爾後ノ諸案總テ此ノ精神ヲ一貫セリ。

即チ第九條ニ於テハ工業主ハ十五歳未満ノ者及女子ヲシテ運轉中ノ機械若ハ動力傳動裝置ノ危険ナル部分ノ掃除、注油、検査等ヲ爲サシムルコトヲ禁止シ、併セテ運轉中ノ機械若ハ動力傳導裝置ニ調帶、調索ノ取付ケ若ハ取外シヲ爲サシムルコト其ノ他一般ニ危険ナル業務ニ就カシムルコトヲ禁止セリ。

前述ノ理由ニ因リ幼少者婦女カ危険ナル業務ニ從事シテ不測ノ災害ヲ醸シタル實例モ少ナカラサルヲ以テ危険ナル作業ニ對シテハ各國孰レモ婦女幼少者ノ

使用禁止規定ヲ設ケサルモノナシ(外國規定ノ内容ニ付テハ第二編第六章ニ於テ之ヲ詳述セリ)

本條ノ運用ニ付テハ主務大臣ニ於テ命令ヲ以テ其ノ業務ノ範圍ヲ明確ニシ、操業上疑義ナカラシムルコトヲ期シタリ(第十一條參照)而シテ本條ニ依リテ禁止セントスル事項ハ、大要左ノ如キモノナルカ如シ。

(甲) 危険ノ最モ大ナル汽罐及汽機、瓦斯若ハ石油機關、水車、發電機、電動機ノ如キ原動機類並電氣機械等ノ危険ナル部分ノ掃除、注油、修繕等ヲ取締ルハ勿論鋸機械等ノ如キ銳利ナル刃物ヲ有スル機械、起重機、捲揚機等ノ如キ機械、抵抗器、變壓器、開閉器等ノ如キ電氣裝置、其ノ他婦女幼少者カ之ヲ取扱フハ危険ナリト認ムル部分ヲ有スルモノニ對シテモ此等ノ作業ヲ禁止スルカ如キナリ。然レトモ此等ノ機械若ハ裝置ニ對シテ一切ノ取扱ヲ禁止スルモノニアラス、又此等ノ機械若ハ裝置ハ現實運轉中ニシテ始メテ危険ナルモノナレハ靜止中ハ勿論蒸汽若ハ電氣ヲ有セサルモノハ少シモ危険ナラス、從テ本條ノ適用ヲ受ケサルコトトナルヘシ。然ラハ機械若ハ裝置ノ危険ナル部分トハ如何ナル部分ヲ意味スルヤヲ見ルニ例ヘ



ハ勢輪、齒輪、調帶車、車軸、車軸接手、曲柄、聯桿、器、連接、桿、脚子、桿、轉子、銳利ナル刃物、阻  
 汽、昇、發、電、子、發、電、機、ノ、ブ、ラ、ツ、シ、ユ、及、コ、ム、ミ、ユ、テ、ー、ト、ル、高、壓、電、線、等、ノ、如、キ、物、ナ、ル、ハ  
 ク。又掃除、注油、検査、修繕以外ニ於テ危険ナル業務トハ運轉中ノ機械若ハ裝置ニ  
 調帶、調索ヲ取付ケ又ハ之カ取外ヲ爲スコト、汽罐又ハ汽機ニ附屬スル阻汽弁ノ開  
 閉、汽機ノ調整機ノ取扱、汽罐ノ焚火、發電機ノ「ブラツシユ」ノ取扱、抵抗器ノ取扱、高壓  
 電線ノ接續、鋸齒ニ材木ヲ喰込マシムルカ如キ鋸機械ノ取扱等ヲモ含ミ尙運轉中  
 ニ大ナル機械ニ附屬スル齒車、調帶其ノ他ノ危険部分ニシテ被覆又ハ柵圍等ナキ  
 時之ニ近接ノ場所ニ於ケル掃除ノ如キモ職工カ此ノ危険部ニ接觸センカ、大ナル  
 傷害ヲ受クル虞アルヲ以テ之ヲ危険ナル業務トシテ禁止スル必要アルカ如シ。  
 尤モ調帶、調索ノ取付又ハ取外シハ完全ナル「ベルト」シフターヲ用ウル場合、又ハ小  
 ナル調帶、調索ニシテ危険ノ程度極メテ輕キモノハ當然除外セラルヘキモノナリ。  
 又足場、車軸道等ノ如キ高所ニ於ケル作業モ、危険ノ程度大ナルモノナレハ之ヲ危  
 險ナル業務中ニ數フヘキモノナリ。然レトモ完全ナル柵圍ヲ有スルカ、又ハ車軸  
 道ニ接近シテ回轉スル車、其ノ他ニ對シ完全ナル豫防設備アリテ危険ノ虞ナキモ

ノノ如キハ當然本號ノ範圍外ニ屬スヘキモノナラン。

第九條ニ於テハ危険ナル業務ニ對シテ幼少者、婦女ノ保護ヲ規定シ第十條ニ於  
 テハ主トシテ衛生上有害ナル業務ニ關シテ制限規定ヲ設ケタリ。尙第十條ニ於  
 テハ十五歳未満ノ幼少年工ヲ保護スルコトヲ主眼ト爲シタリト雖、本條ノ業務中  
 危害ノ程度高キモノニ對シテハ十五歳以上ノ女子ト雖其ノ使用ヲ禁止スヘキ必  
 要アルヲ以テ、主務大臣ハ各個ノ場合ニ於ケル事情ニ應シ本條ノ適用ヲ擴張スル  
 コトヲ得ル旨ヲ定メタリ(第十一條二項)。

此ノ條項ニ關シテハ四十二年案ニ對シ具體的ニ業務ノ種類ヲ舉示スルヲ可ト  
 ストノ說アリタルヲ以テ、最後ノ公表案ハ之ヲ舉示スルコトヲ努メタルモ生産調  
 査會其ノ他ハ寧ロ命令ノ指定ニ讓ルヲ可トスルノ意見ヲ提出シ、政府之ヲ容レ、議  
 會ニ於テハ別段ノ異議ナクシテ其ノ通過ヲ見ルニ至リタリ。左レハ本條ニ於テ  
 モ第九條ト同シク主務大臣ハ命令ニ依リテ其ノ取締ヲ必要トスル工場ノ種類ヲ  
 舉ケ以テ其ノ適用上ノ疑義ヲ避クルコトトセリ、今其ノ重ナルモノヲ例示スレハ  
 大凡左ノ如シ。







ルヘカラス。斯ノ如キハ理論上非難スヘキ所ナシトスルモ、我國立法ノ實際ニ於テ斯ノ如キ手續ヲ執ルコトハ不可能ナルノミナラス、些末ナル事項ト雖、行政官ノ見込ニ依リテ裁量處分ヲ爲スコトヲ得サルコトトスレハ、運用上尠カラサル支障ヲ生スヘキハ勿論ナルヲ以テ、法律ニハ主義ノ大體ヲ規定スルニ止メ、別ニ例外規定ヲ設ケテ、行政上ノ裁量ヲ許スハ、立法上洵ニ避クヘカラサル所ナリ。

第一 年齢ニ關スル例外

(一) 工場勞働禁止年齢ヲ十二歳ト爲シタリト雖、本法實施以後直ニ十二歳未滿ノ者ノ使用ヲ禁センカ、工業主中或ハ遽ニ不便ヲ感スルモノナキヲ保セサルヲ以テ、本法施行ノ際現ニ使役中ノ者ヲ尙引續キ使用スル場合ニ限り其ノ使用ヲ繼續スルコトヲ認メタリ(第二條一項但書)。又他方ニ於テハ危險又ハ衛生上著シク有害ナラサル場所ニ於ケル輕易ノ業務ニハ必スシモ十歳以上ノ者ノ就業ヲ絶對的ニ禁止スルノ必要ナキ場合アル可キヲ思ヒ、作業ノ種類場所其ノ他ノ使用條件ヲ附シ十歳以上ノ者ノ使用ヲ許可スヘキコトト爲シタリ。而シテ輕易ナル業務トハ如何ナルモノナルヤヲ按スルニ大凡左ノ如キモノナルヘシ、

(イ) 煙草燐寸ノ函詰包裝商標貼付等ノ如キ業務

(ロ) 印刷製本製紙業等ニ於ケル紙ノ折疊等ノ如キ業務

(ハ) 生絲工場ノ一部

(ニ) 織物工場ノ一部

行政官廳カ許可スヘキ條件ノ内容トシテ當ニ研究セラルヘキ事項ハ、大體左ノ如キモノナルヘシ。

- (イ) 時間ノ制限、十歳以上十二歳未滿ノ者ハ、就學兒童ナルヲ以テ一日六、七時間位ニ制限スル必要アルヘシ。尤モ猶豫又ハ免除ヲ得タル兒童モナキニ非スト雖、極メテ少數ナルカ故ニ別ニ之ヲ區別シテ制限ヲ定ムル程ノ必要ハナカルヘシト考フ、其ノ他例ヘハ學後ノ午前ヨリ始業スル地ニ在リテハ其ノ始業時間前ノ使用ヲ禁止スルカ如キ必要アルヘシ。又休憩時間休日等ニ付テモ多少ノ條件ヲ付スルコトトナルヘキカ。此等ノ制限事項ハ業務ノ性質其ノ他諸般ノ事情ヲ斟酌シテ實情ニ適切ナルコトヲ期スヘキハ勿論ナルヘシ。
- (ロ) 設備其ノ他外界ノ事情、業務其ノモノハ輕易ナリトスルモ其ノ設備其ノ



他四圍ノ状況カ危害ヲ生シ又ハ衛生上有害ノ虞アルモノハ第九條第十條ニ該當セサル場合ト雖十二歳未満ノ者ヲ用ウルコトハ法ノ精神ニ照ラシテ許スヘキモノニ非サルヲ以テ此ノ如キ場合ニハ例ヘハ許可ノ條件トシテ設備ノ改造ヲ命スルカ如キコトアルヘシ。茲ニ一例ヲ舉レハ作業場ノ出入口ニ危険ナル機械カ運轉セル場合ニ別ニ出入口ヲ造ラシムルコトノ條件ヲ附シテ許可スルカ如キ之ナリ(第二條第二項)

(二) 第五條規定ノ特殊業務ニ於テハ徹夜業ヲ許可シタリト雖十四歳未満ノ者及二十歳未満ノ女子ニ對シテハ其ノ就業ヲ禁シタリ。然レトモ事業自體ニ於テ夜業ヲ必要トスルモノト、單ニ利益ヲ増大スル爲夜業ヲ營ムモノトノ間ニハ、自ら取扱上ノ區別ナカルヘカラス、故ニ本條ニ於テハ工場法施行後十五箇年間ハ現在ノ儘ニ据エ置キ十二歳以上ノ者ニ對シテハ別ニ禁止規定ヲ設ケサルコトトシ、事業上ノ要求ト取締上ノ必要トノ中間ニ在テ衡平ヲ得セシムルコトヲ期シタリ(第五條第一項但書)

(三) 一般的例外タル天災事變又ハ事變ノ虞アル際及避クヘカラサル事由ニ依リ

臨時必要アル場合ニ對シ例外ヲ設ケタリ。本法ニ規定スル十五歳未満ノ者及女子ニ對スル就業時間及徹夜業ノ制限等ハ平時之カ實行ヲ期スヘキハ勿論ナルモ天災事變ノ場合又ハ事變ノ起ルヘキ虞アルカ如キ非常ノ場合ニ際シテハ臨機ノ處置ニ出ルヲ要ス、故ニ本條ハ斯ル場合ニハ此等制限ニ關スル規定ノ適用ヲ一時停止スルコトヲ規定セリ(第八條第一項)。其ノ他ノ場合ニ於テ斯ノ如ク重大且一般的ナラストスルモ工場ニトリテハ一種ノ事變ニシテ平時ノ如ク執業スルヲ得サル事情ヲ生スル場合ナキニ非ス、故ニ工場カ一時事業ヲ休止シタル場合ノ如キ其ノ他避クヘカラサル事由ニ依リ必要アル場合ニ於テハ、就業時間及休日ノ制限ニ付特別ノ取扱ヲ爲シ得ルコトヲ規定シタルモノナリ(第八條第二項)要スルニ本條モ亦年齢ニ對スル例外規定タルヲ免レズ。

第二時間ニ關スル例外

(一) 十二時間労働ヲ原則トスルモ業務ノ種類ニ依リ施行後十五箇年間ハ許可ヲ得テ二時間以内延長シ得ルモノト爲シタリ。惟フニ十二時間労働ノ規定ニ依リ著シキ苦痛ヲ感スル工場ハ少カルヘキモ製糸業又ハ織物工業中ノ或モノ、如キ



從來ノ慣行上往々十五六時間以上ニ亘ル作業ヲ爲スモノ其ノ他事業ノ性質著シク不衛生ナラス、又其ノ作業ノ輕易ナルモノニ對シテハ本法施行後十五年間ヲ限リ主務大臣ニ於テ事業ノ種類ヲ指定シ、十四時間迄ノ労働ヲ爲サシムルコトトセリ。歐米各國ノ立法例中本條ノ如キ寛裕ナル規定ヲ設ケタルモノナシ。然レトモ第一期ノ立法トシテハ最極端ノ場合ノミヲ取締リ工業主及職工カ漸ク規律アル作業ニ習熟スルヲ待テ他日更ニ此ノ制限ノ程度ヲ高ムルコトヲ妨ケサルヲ以テ、本條モ亦第二條第五條及其ノ他ノ條項ト同シク理論ヨリモ寧ロ工業ノ實狀ニ鑑ミテ適當ナル制限ト爲シ以テ急激ノ變動ヲ避ケタルナリ(第三條第二項)

(二)時間ニ關スル制限中徹夜業ノ禁止ニ關シテハ十五箇年間ノ不適用ヲ規定シタル外事業ノ性質上當然設クヘキ例外アリ、是第五條第一項ノ規定スル所ナリ。元來幼少者及女子ノ夜間労働ハ之ヲ禁止スヘキモノナリト雖、工業ノ性質上夜間労働ヲ爲スニ非サレハ其ノ事業ヲ廢止スルノ已ムナキモノ、若ハ廢止スルニ至ラストスルモ、技術上顯著ナル障害ヲ受クルモノニ對シテハ、當然夜業ヲ爲スノ例外ヲ認メサルヘカラス。是即

(一)一時ニ作業ヲ爲スコトヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ就カシムルトキ

(即チ魚介ノ罐詰又ハ鹽藏果實ノ罐詰又ハ果實ヲ原料トスル醸造ノ如キ、或ハ殺蛹乾燥ノ如キ業務)

(二)夜間ノ作業ヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ就カシムルトキ(即チ新聞印刷、麵麴焼ノ如キ業務)

(三)晝夜連續作業ヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ就業セシムルトキ(即チ製鐵業、硝子業其ノ他繼續燃燒ヲ要スル窯業)

ニ關シ、除外例ヲ設ケタル所以ナリトス。此等ノ事業ト雖幼少者及女子ヲ必ス夜間ニ使用セサルヘカラサル理由アルニ非サルヲ以テ、單ニ理論上ノ見地ヨリスルトキハ之ヲ全禁スルヲ得サルニ非ス。然レトモ工場法施行後十五年間ハ現在ノ儘ニ据置キ、其ノ後ニ至リテ十四歳未滿ノ幼年者及未成年ノ女子ヲ使用スルコトヲ禁止スルヲ以テ足レリトシ、事業上ノ要求ト取締上ノ必要トノ中間ニ在テ衡平ヲ得セシメタルハ前述ノ理由ト全ク同一ナリ。此ノ條項ニ於テ成年女子ノミニ限リ夜業ヲ認メタル理由ハ、左ノ如シ



(一) 成年女子ハ未成年女子ヨリモ心身ノ發育比較的完全ナルヲ以テ之ヲ十四歳以上ノ男子ト同等ニ取扱フヲ適當ト爲シタルコト(外國ノ立法例中亦此ノ主義ヲ認ムルモノアリ)

(二) 一時ニ作業ヲ爲スヲ要スル事業ハ原料ノ變敗シ易キモノヲ取扱フ事業ナルヲ以テ之ニ對シ成年女子中ノ多數ヲ占ムル既婚者ヲ禁制スルハ實情ニ適合セサルモノアルヘキヲ顧慮シタルコト。

然ラハ本條第一號乃至第三號ノ業務ニ付女子及幼者カ夜業ヲ爲スコトハ如何ナル場合ニ起ルヘキヤ、又其ノ作業ノ種類如何ト云フニ第一號ニ該當スル事業ハ或ル季節ニ限ラレ周歲行ハルモノニ非ス、而カモ一時ニ急速作業ヲ爲スノ必要アリ、而シテ其ノ作業ノ種類ハ種々雜多ナリ、第二號ノ新聞印刷場ニ於テハ深夜迄ニ印刷ヲ終リ即時之カ配達準備ヲ爲スノ必要アリ、而シテ其ノ作業ノ種類ハ植字及折疊等ナリ。麵麩燒工場及牛乳殺菌場ニ於テハ深夜ニ作業ヲ爲シ早朝迄ニ之カ配達ヲ終ル必要アリ。第三號ニ屬スルモノハ製鐵業、硝子業其ノ他繼續燃燒ヲ要スル窯ヲ用ウルカ、又ハ一旦中止スルトキハ再ヒ始業スルニ當リ甚シキ技術上

ノ困難ヲ惹起スヘキ事業ニシテ、其ノ作業ハ周歲晝夜繼續スルモノナルカ故ニ、之ニ對シテハ職工ヲ二組以上ニ分チ、交替ニ就業セシムヘキ條件ヲ附シテ夜業ヲ認ムルコトトセリ、而シテ製鐵工業ニ於ケル作業ノ種類ハ石炭ノ供給其ノ他附屬作業ナリ、硝子業ニ於テモ多クハ補助作業ヲ爲スノミ。

本條ニ掲ケタル業務ノ種類ニ關シテハ主務大臣ノ命令ニ依リテ之ヲ指定シ、以テ適用上ノ疑義ヲ避クルコトトセリ(第五條第二項)

尙徹夜業禁止ニ對スル例外規定トシテ第六條ノ規定アリ、即チ職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ就業セシムル場合ニ於テハ如何ナル工業ニテモ本法施行後十五年間ハ徹夜業禁止ヲ勵行セサルコトトセリ。

元來幼少者及婦女ノ夜業禁止ニ對スル例外ハ第五條ニ於テ之ヲ悉セリ。然ルニ第五條ニ該當セサル事業ニシテ從來徹夜業ヲ爲シ來レル事業アリ、其ノ最モ主要ナルモノハ紡績業ナリ。此ノ種ノ事業ニ對シテ今直ニ夜業ヲ禁止スルトキハ事業ノ收益ヲ減シ、約半數ノ勞働者ヲ失職セシメ、内外ノ販路ニ於テ既得ノ利益ヲ失ヒ、製品ノ價格ニ急激ノ變動ヲ來シテ直接間接ニ國家經濟上ニ影響ヲ及ホスコ



ト等ノ不利アルヲ以テ、夜業禁止ニ十五年間ノ猶豫ヲ與フルコトト爲シ其ノ期間内ニ於テ工業主ヲシテ夜業禁止ノ實施ニ際シ、經濟上ノ變動ヲ避クルニ足ルヘキ十分ノ準備ヲ整エシムルコトヲ期セリ(第六條)

(三)前段第三ノ場合ニ於テハ年齢ノ制限ニ對スル例外規定ヲ設クルト共ニ勞働時間ニ對スル例外ヲモ規定シ得ルコトトセリ。即チ天災事變又ハ事變ノ虞アル際及避クヘカラサル事由ニ依リ臨時必要アル場合ニ於テハ事業ノ種類地域ヲ限リ又ハ行政官ノ許可ヲ得テ期間ヲ限リ第三條ノ規定ニ拘ラス就業時間ヲ延長シ、第四條及第五條ノ規定ニ拘ラス職工ヲ就業セシメ又ハ第七條規定ノ休日ヲモ廢スルコトヲ得ル旨ヲ定メタリ(第一條第一項第二項)

尙此ノ外避クヘカラサル事由ノ有無ニ拘ラス、臨機必要ヲ生シタル場合ニ於テ許可ノ手續ヲ爲サシムルトキハ時機ヲ逸スルノ虞アルヲ以テ一箇月七日間ヲ限リ豫メ其ノ旨ヲ行政官應ニ届出ツルニ於テハ就業時間ヲ二時間以内延長スルコトヲ得ルコトトセリ(第八條第三項)

(四)季節ニ依リ繁忙ナル事業ニ付テハ工業主ハ一定ノ期間ニ付豫メ行政官應ノ

認可ヲ受ケ其ノ期間中一年ニ付百二十日ノ割合ヲ超エサル限リ就業時間ヲ一時間以内延長シ得ヘク、勿論此ノ認可ヲ受ケタル期間内ハ第八條第三項ノ規定ハ之ヲ適用スルヲ得サルコトトセリ(第八條第四項)左レハ季節ニ依リ繁忙ナル業務ニシテ第三條ノ適用ヲ受クルニ於テハ一日ノ勞働時間ヲ十五時間ニ延長シ得ヘシ季節ニ依リ繁忙ナル業務ノ種類等ニ付テハ前述シタルハ茲ニ之ヲ略ス、此等數種ノ例外モ亦已ムヲ得サルニ出テタルモノニシテ此ノ規定カ果シテ法律ノ精神ヲ害セサルヤ否ヤハ適用上ノ問題ニ屬ス。以上第一、第二ノ例外ハ一方ニ於テハ法律施行ノ初期ニ當リテ豫定主義ヲ採用シタルト、他方ニ於テハ撤廢セント欲スルモ事業ノ現狀ニ於テ事情已ムナキモノアリシトノ二原因ニ歸セスンハアラス。

#### 第四節 設備ノ取締

職工保護ノ二大眼目ハ職工ノ僱使ト工場設備ノ取締ニ在リ。之ニ關スル立案ノ經過ヲ見ルニ、二十年案ニハ之ニ對シ何等ノ規定ヲ設ケス、三十一年案ニ至リテ明文ヲ以テ認可制度ヲ立テ、三十五年案ニ於テハ同シク認可制ヲ繼承シ、四十二年



案ニ於テハ認可制度ハ既ニ各府縣ニ於テ確立セル制度ナルヲ以テ之ヲ法文中ニ規定スル必要ナシトシテ唯工場及附屬建設物並設備カ危害ヲ生シ又ハ衛生風紀其ノ他公益ヲ害スル虞アル場合ニ於テ行政官廳ニ於テ豫防又ハ除害ノ爲必要ナル事項ヲ命シ必要ト認ムルトキハ全部又ハ一部ノ使用停止ヲ命スルヲ得ル旨ノ授權規定ヲ設ケタリ而シテ四十三年案之ヲ繼承シ延テ現行法ノ規定ト爲レリ。元來此ノ規定ハ如何ナル事カ衛生上有害ナルカ又ハ公益ヲ害スルヤヲ明ニセスシテ行政官廳ニ與フルニ至大ノ職權ヲ以テシタルモノトシ當業者ノ之ヲ非難セラルモノ尠カラサリキ。固ヨリ政府トシテモ工場法ノ制定ト同時ニ從來區々タル府縣令ノ規定ヲ整理シ工場ノ建設ニ關スル事項ヲ詳密ニ規定シ全國ニ互リ整一ノ取締ヲ爲スハ希フ所ニシテ出來得ヘクンハ進ンテ之ヲ實行センコトヲ欲セシナルヘシ。然レトモ工業ノ種類勞役ノ性質職工ノ多寡工場ノ規模工場經濟ノ狀況等千態萬狀ニシテ此等ヲ一律ノ下ニ置カントスルハ事實ニ於テ爲シ得ヘキ所ニ非ス況ンヤ事多クハ工業主ノ負擔ニ歸スルヲ以テ法律規定ノ強行ハ經濟ニ餘裕ナキ工業主ヲシテ事業ヲ廢止スルノ止ムヲ得サルニ至ラシメンコトヲ慮リ勅

令以下ノ行政命令ヲ以テ機宜ニ應シタル必要限度ノ取締ヲ爲スノ主義ヲ採リ從來ノ取締程度ヲ急ニ變革スルコトヲ避ケ漸ヲ以テ工場設備ノ改善ヲ促進センコトヲ期シタルモノナリ。

前述ノ如ク既ニ各府縣ニ於テモ各地ノ實情ト須要トニ應シ警察令ヲ以テ之カ取締ニ關スル規定ヲ設ケ汽機汽罐取締規則製造場若ハ火工場取締規則等ヲ發布シ警察官吏ヲシテ之カ施行ノ任ニ當ラシメツツアリ。尤モ現在各府縣ニ於ケル取締ノ實況ハ同一種類ノ工場ニ對スルモノト雖地方ニ依リ多少寬嚴ノ程度ヲ異ニシ或ハ工場及附屬建設物ノ危險防止若ハ衛生上ノ取締ニ缺クル所アルヲ免レス依テ工場法施行後ニ在リテハ各地ニ於ケル行政ノ劃一ヲ期スルト共ニ主トシテ専門ノ吏員ヲシテ取締ノ衝ニ當ラシメ以テ本條ノ趣旨ヲ遂行スルヲ要ス。議會ニ於テハ此ノ規定ノ執行ニ關シ從來ノ通り警察官吏ヲシテ之ニ當ラシムルヤ否ヤニ付數々質問アリタル外内容ニ關シテハ別ニ何等ノ異議ナカリキ。

然ラハ本條ニ依リ工場設備ニ關シ取締ヲ爲スヘキモノ如何ト云フニ概ネ左ノ如キモノナルヘシ而シテ最初ヨリ此等事項ノ全部ニ付取締ヲ行フトキハ遽ニ工



業主ニ大ナル負擔ヲ嫁スルコトアルヘキヲ以テ實施ノ場合ニハ其ノ緩急ニ付細密ノ調査ト慎重ノ用意ヲ加ヘラルルコトナルヘシ。

(甲) 工場及附屬建設物ニ付取締ヲ爲スヘキ事項

(一) 工場ノ構造

(一) 工場建物ノ地形並其ノ構造ノ不完全ナルモノ、例ヘハ大ナル建物ニシテ内部ニ柱ノ少ナキモノ、又ハ屋根ノ荷重ニ對シ下部ノ釣合其ノ當ヲ得サルモノ等之ナリ、

(二) 工場狹隘ニシテ場内ノ職工ニ對シ空氣ノ容量過少ナルモノ、

(三) 窓換氣孔等不完全ニシテ換氣不十分ナルモノ、

(四) 窓ノ構造、個數、配置等不完全ニシテ光線ノ透射不十分ナルモノ、

(五) 出入口、非常口、通路、階段、戸等ノ配置、個數、構造等ニ避難ノ注意ヲ缺クモノ、

以上ノ中(一)及(五)ハ危害ヲ生スルノ虞アリ、(二)及(三)及(四)ハ衛生上有害ナルヲ以テ取締ルヘキモノナリ。

(二) 寄宿舎ノ構造

(一) 寄宿人員ニ對シ建物ノ狭小ナルモノ及前各號ニ掲クル缺點アルモノ、

(二) 食堂、炊事場、便所、浴場、病室等ノ構造ニ於テ衛生及風紀上不完全ナルモノ、前記ノ(一)ハ危害及衛生上ノ上ヨリ、(二)ハ風俗及衛生上ヨリ之ヲ取締ルヘキモノナリ。

(三) 煙突ノ構造

(一) 煉瓦煙突ノ地形不完全ナル爲傾斜ヲ來シ、煉瓦積ノ厚サ不完全ナル爲若ハ粘材料ノ不適當ナル爲龜裂ヲ生シ、震災ノ際容易ニ倒壊スルモノ。

(二) 鍍製煙突ニシテ鍍板薄ク腐蝕ニ因リテ脆弱トナリ久シカラスシテ倒壊スル虞アルモノ、

(三) 煙突ノ位置不適當ナルノミナラス其ノ構造不完全ニシテ甚シキ煤煙ヲ噴出シ近隣ニ害ヲ及ホスモノ、

(一) 及(二)ハ危害ヲ生スルノ點ヨリ之ヲ取締リ、(三)ハ公益上ノ見地ヨリ之ヲ取締ルヘキモノナリ。

(乙) 工場設備



(一) 汽罐

(一) 設計、製作、据附等ノ不完全ナルモノ、  
 (二) 汽壓計、安全弁、水準計、驗水器等ノ如キ附屬品ノ規整ヲ缺クモノ、  
 生絲、精米等ノ小工場ニ使用スルモノニ於テ特ニ如上ノ缺點多ク、危害豫防上ノ見地ヨリ取締ヲ要ス。

(二) 原動機其ノ他ノ機械

(一) 勢輪、曲柄、齒車、車軸、調帶、ロール其ノ他ノ機械ノ部分ニシテ、其ノ位置構造等ニ依リ運轉中危險ノ虞多キニ拘ラス危害豫防ノ裝置ナキモノ、  
 (二) 工場内ニ機械密集シ通路甚狹ク、非常ノ場合ノミナラス平時ニ於テモ危險ナルモノ、  
 (三) 機械ノ位置不適當ナルカ若ハ据付方法ノ不完全ナル爲又ハ除害ノ設備ヲ缺ク爲、震動騒響ヲ發シテ公益ヲ害スルモノ(精米、製鐵、印刷、木皮粉碎等ノ工場)

(三) 危險又ハ衛生上有害ナル工場 (酸、毒水、セメント、水銀、磷、鉛又ハ此等化合物ヲ取扱フ工場、刷子、製紙、紡績等ノ工場) ニ於ケル特殊ノ

設備

- (一) 有害瓦斯、有害液、塵埃、粉末等ヲ流出飛散スル場所ニ於テ此等有有害物ヲ適當ニ處理スル施設ノ完カラサルモノ、
- (二) 有害料品ヲ取扱ヒ、又ハ有害物ヲ飛散スル場所ニ於ケル職工ニ對シ、危險豫防(作業服、呼吸器、手袋、食堂、洗面所又ハ浴場)ノ設備完カラサルモノ、
- (四) 防火及消火ノ設備
  - (一) 工場ノ構造カ火災豫防ニ對シテ不完全ナルモノ、
  - (二) 消火器又ハ消火裝置ノ不完全ナルモノ、
- (五) 工場及附屬建物若ハ設備ニシテ、使用久シキニ亘リ又ハ變災事故ノ爲危害ヲ發生スル状態ニ在ルモノ

第五節 雇傭及周旋

雇傭及周旋ハ何レモ契約ニ依リテ發生スル債權關係ナリト雖此ノ債權關係ノ發生及消滅ニ伴フ社會上ノ弊害ヲ艾除スルハ政府ノ爲スヘキ所ナリ



雇傭ニ關シテハ明治二十年案ノ第一章總則ニ於テ契約關係ノ内容ニ干涉シテ職工ヲ保護スルノ規定ヲ設ケタリト雖三十一年案ニハ工業主ヲシテ職工規則ヲ設ケシメ之ニ雇傭契約ニ關スル事項ヲ規定セシメ、行政官廳ハ認可ニ依リテ之ヲ整理センコトヲ期シタルモノノ如シ。然ルニ爾後ノ調査ニ依リ、職工ト工業主トノ雇傭契約ハ事實ニ於テ法鎖ヲ設定セサルモノ多キコト明カトナリタルヲ以テ、三十五年案ニハ單ニ職工ノ雇入紹介ノ取締ハ命令ヲ以テ之ヲ定ムトノ簡單ナル規定ニ脱化シタリ。爾後ノ諸案ニハ多少ノ相違アルモ、等シク此ノ形式ヲ踏襲シ、以テ現行法ノ規定ト爲レリ。現行法ハ第十七條ニ於テ職工ノ雇入、解雇、周旋ノ取締及徒弟ニ關スル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ムト爲シタリ、左ニ此等ノ諸項目ニ付之ヲ概説スヘシ。

第一周旋

周旋業ノ取締ハ現在ト雖各府縣ニ於テ命令ヲ以テ之ヲ行ヒツツアリ。然レトモ工場法ハ右ニ關シテハ勅令ヲ以テ之ヲ定ムヘキコトヲ規定セリ、此ノ勅令カ詳細ナル點迄規定スルヤ若ハ大部分ノ規定ヲ府縣令ニ委任スヘキヤハ固ヨリ逆賭

スヘキニ非サルモ、惟フニ周旋業ニ關スル取締事項トシテ出現スヘキ規定ハ現行各府縣令中ニ於ケルモノト大差ナカルヘキコトハ想像スルニ難カラズ、今其ノ大要ヲ摘録スレハ左ノ如シ

- (一) 行政官廳ノ免許ヲ受ケシムルコト但シ左ノ者ニハ免許セス
  - (一) 犯罪ヲ爲シタル者
  - (二) 本令ニ違反シ免許ヲ取消サレタル者
- (以上二項共相當ノ年月ヲ經過シ改悛ノ情狀顯著ナルトキニハ免許ヲ與フルコト)

- (二) 營業ノ取消又ハ停止ノ處分ヲ爲スコト
  - (一) 第一項ニ該當スル所爲アリタルトキ
  - (二) 行衛不明トナリタルトキ
- (三) 左ノ營業トノ兼營ヲ禁スルコト
  - (一) 宿屋、飲食店
  - (二) 待合茶屋、料理屋



- (三) 貸座敷、席貸業
- (四) 湯屋、遊技場
- (五) 其ノ他之ニ準スヘキモノ
- (四) 營業上ノ使用人ニ付テモ認可ヲ受ケシムルコト(第一項ノ如キ者ハ使用人ト爲ルコトヲ許サス、又法定代理人カ第一項ニ該當スルトキモ營業ノ免許ヲ與ヘサルコト)
- (五) 營業上ノ制限ニ關スル事項
  - (一) 詐欺ノ言行アルヘカラサルコト
  - (二) 職工ヨリ取ルヘキ手数料ニ關スル事項
  - (三) 職工未成年者ナルトキハ法定代理人ノ承認證ヲ得ヘキコト
  - (四) 手数料ノ額ハ豫メ認可ヲ受クルコト
  - (五) 職工ヲ教唆、慫慂シテ爭奪スヘカラサルコト(他人ノ雇傭中ナルコトヲ知リテ之ヲ周旋セサルコト)
  - (六) 諸帳簿ハ當該官吏ノ閱覽又ハ抄寫ヲ拒ムヘカラサルコト

第二職工募集

職工募集ニ關スル取締ニ關シテモ周旋ト同シク勅令ヲ以テ規定セララルヘキコト前ニ述ヘタルカ如シ。而シテ現在ト雖各府縣ニ於テハ既ニ府縣令ノ規定ヲ以テ必要ノ取締ヲ勵行シツツアリ、今各府縣ノ職工募集ニ關スル規定事項ヲ摘録スレハ左ノ如シ

- (一) 周旋業者タルト否トヲ問ハス募集地ノ行政官廳ノ認可ヲ受ケシムルコト
- (一) 募集ヲ爲ス者カ當該工業主ナラサルトキハ委託ヲ爲シタル工業主ノ委託書ヲ提示スルコト
- (二) 認可申請書ニハ必要ナル事項殊ニ職工ヲ錯誤ニ陥ラシメサル事項ヲ記載セシムルコト
- (二) 募集ノ手續ニ關スル事項
  - (一) 詐欺ノ申述ヲ爲ササルコト
  - (二) 無能力者ニ付テハ法定代理人ノ承認證ヲ取ルコト
  - (三) 募集期間ヲ明ニスルコト



- (三) 募集期間後相當日限内ニ募集ノ結果ヲ應募者名ト共ニ當該行政官廳ニ届出テシムルコト
  - (四) 工業主ト雇傭契約成立セサル場合ニハ歸郷旅費ハ周旋ヲ爲シタル者之ヲ負擔スルコト又周旋業者ハ歸郷セシムル責任ヲ有スルコト
  - (五) 募集ノ取消又ハ無認可ニテ爲ス募集ノ制裁
  - (六) 爭奪ヲ爲ササルコト
- 第三職工ノ雇入及解雇

職工ノ雇入及解雇ニ關シテハ府縣令中未タ規定ヲ設クルモノ多カラス重要物産同業組合ニテハ往々定款又ハ申合規約ヲ以テ或ル約束ヲ爲セルモノアリ。本事項ニ關シテハ勅令ヲ以テ如何ナル事項ヲ規定セラルヘキヤ豫想スルコト難シ。然レトモ問題トシテ研究セラルヘキ事項中ニハ(一)職工帳簿ニ關スルコト(二)賃銀ノ支拂ニ關スルコト(三)契約期間内ニ於ケル解雇ニ關スルコト(四)職工ノ歸郷費用ニ關スルコト等アルヘシ。本勅令ハ今後傭者被傭者間ノ關係ノ變遷ニ伴ヒ必要ナル變更ヲ爲スヘキモノニシテ其ノ範圍ヲ假リニ想定スル

コト難シ。

職工ノ雇入解雇及周旋ニ關スル取締ニ付當業者ノ最モ熱心ニ希望シタル所ハ職工ノ誘拐並職工ノ任意退役ニ對シ嚴重ナル制裁ヲ加エラレタシト云フニ在リタリ。其ノ他職工帳簿等ノ制度ニ關スル意見ノ發表モ亦少カラサリシカ此等ノ事項ニ關シテハ更ニ詳細ナル調査ヲ經タル後規定セラルルニ至ルヘシト信ス

(附勞働契約ニ干涉スル二三ノ事例)

雇傭契約關係ニ於テ職工ヲ保護スルノ立法例少カラス例ハ英國ニ於ケル千九百十年一月一日ヨリ實施セラレタル職業會議法及千九百十二年ノ炭坑最低賃銀法ノ如キ之ナリ。前者ハ衣服仕立業其ノ他三種ノ家内工業ニ關スル最低賃銀率ヲ法定スルコトヲ得ヘキ權能ヲ有スル機關ヲ商務院管理ノ下ニ創設シ之ヲ職業會議ト稱スルコトヲ規定シタルモノニシテ國家カ其ノ法律ノ力ニ依リテ勞働契約ノ内容ニ干涉セントスルモノナリ。後者即チ炭坑最低賃銀法モ亦各勞働者ノ一日所得高ニ關スル最低賃銀ノ原則ヲ明ニ法律上ニ容認シタルモノナリ。



其ノ他濠洲新西蘭士等ニ於テ千八百九十六年以降行ハルル賃銀會議ノ制度モ亦最低賃銀ノ主義ヲ法律的ニ強行スルモノナリ。此ノ賃銀會議ハ工業家及労働者中ヨリ同數ノ委員ヲ選出シ、更ニ不偏不黨ノ議長ヲ以テ組織セラレタルモノニシテ其ノ權限事項左ノ如シ、

- (一) 最低賃銀、出來高拂賃銀率、時間外労働ノ賃銀、並労働時間ノ決定
- (二) 幼少年工ノ數ヲ制限シ、徒弟ノ數並其ノ賃銀ヲ定ムルコト
- (三) 老人、痲疾者其ノ他低能労働者ニ對シテ一箇年普通ノ最低賃銀以下ニ於テ労働ニ從事シ得ルノ特權ヲ賦與スルコト

但シ此等例外労働者ノ數ハ全労働者ノ三分ノ一ヲ超ユルコトヲ得サルコト同會議ノ決定ハ普通裁判所ニ於テ之ヲ強制セラルヘク、一度決議セル最低賃銀法ニ違反スル者ニハ二千麻克以下ノ罰金ヲ課シ、三回以上ノ違反者ニ對シテハ其ノ營業鑑札ヲ沒收シテ其ノ職業ヲ禁止スル等重キ制裁ヲ以テ雇傭契約ノ内容ニ干涉シ以テ労働者ヲ保護セントセリ。

抑モ中世紀以前ニ於テハ契約自由ノ原則ハ一般ニ認メラルルコトナカリシナ

リ。然レトモ中世ノ警察的國家斃レテ近世ノ立憲國家之ニ代ハルニ至リ、契約自由ノ原則ハ一般ニ進歩セル民法ノ採用スル所トナリ、労働契約ノ如キモ全ク私法的自由契約ノ律スル所トナリ、労働條件ニ關スル公法的制限規程ハ其ノ存在ヲ失フニ至レリ。此ノ契約自由ノ原則ハ民主々義社會主義ノ學說ト相俟ツテ益々歐米ノ天下ヲ風靡シ、第十八世紀末工業革命ノ勃發以後ニ於テハ遂ニ甚シキ社會的缺陷ヲ構成スルニ至レリ。

最近ニ於ケル立法ノ傾向ヲ見ルニ、傭者被傭者間ノ雇傭契約等ニ付再ヒ契約ノ自由ヲ束縛セントスル新法制ヲ續出スルニ至レリ、是全ク契約自由ノ原則ニ對スル反動トシテ労働問題救済ノ爲ニ生シタルモノナリト想像スルニ難カラサル所ナリ。

### 第六節 扶助

職工ノ扶助ハ我國ニ於テハ工場法中ニ之ヲ規定セルモ、是實ハ工場關係ヲ離レタル重要ナル社會問題ニシテ、先進國ニ於テハ最モ論議ノ存スル所ナルカ、我國ニ







